

---

# 炎の召喚士フレア

Lolo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

炎の召喚士フレア

### 【Zコード】

Z7204V

### 【作者名】

レオ10

### 【あらすじ】

注意?

「召喚」とありますが、人気の(?)現代の人々が異世界に強制的に呼び出されてどうのこののという話では御座いません。

注意?

攻撃的なタイトルですが、戦闘シーンは片手で数えるほどです。

注意?

あまり詳しくないのですが、どうやらチートとかいう感じの気配があります。

以上が余り気にならないお方へ。

平凡な女の子が、ドラゴン召喚をきっかけに魔法使いとして生きていくハメになるお話しです。

## プロローグ（前書き）

つまりないプロローグです。よろしければ、第一話を読んで善し悪しを判断して頂けると幸いです。

## プロローグ

レミュエル王国、王都リーグル。

王に仕える文官の1人であるダグラスは王宮から離れた、とある貴族邸にいた。

王の側近の1人であるダグラスは貴族の中でも特にあちらこちらへ顔が利く方に入る。

30代半ばの、痩せこけた頬の頼りない印象の彼は容貌からは想像もつかない、陰謀を語つていた。

「協力してくださった暁には、貴方に、王位について頂きたい」

低めた声でダグラス。

「面白い男だ。こんな計画を立てておいて、自身は王位に興味がないと？」

相手の声は意図せずとも低い。声を聞くだけで威圧感を受ける。

しかし、声の主は背が高くとも大男という印象ではない。筋肉で引き締まつた身体は武人としては寧ろ細いほうになる。

「私は、今のこの国が気にくわない……それだけですよ。まあ、1つくらい野心を出さねば怪しまれですからお願ひを1つ。貴方が王位に就いた日には私を宰相として登用してください」

「頼まれるまでもない。俺は文官には詳しくないからな」

ダグラスは答えを聞くと、口元に笑みを浮かべた。

「では、またご連絡にあがります」

ダグラスは、まだ夜も深まる中、王宮へ急いで戻つて行つた。

約10年前のこの日、全ての因果が始まった。

アーラン召喚ー？ ちょっと待って、聞いてないよー！

王都リーグルも、北方は王宮を中心に城下町で賑わっているが、南へ行くと農民達がつましく暮らす静かで穏やかな農村地帯となる。

そんな、リーグル南方の小さな家の屋根裏部屋をフレアは掃除していた。

16歳のフレアは農民にしては珍しく学校に通っていた。これも、父のお陰である。フレアの父は以前この国の軍に在籍しており、しかも召喚士であった。

召喚士というのは、魔法書から魔獸……召喚獸を呼び出し、戦う軍人の事をいう。魔法書があれば誰でも召喚が行えるという訳ではない。戦闘能力とは全く別の、魔法を使う為の体力のようなものである、魔力が強くなれば、強い召喚獸は呼び出せない。彼女の父、アークはSランク……つまり最高位の魔獸を召喚する力を持つていた。

だが、今は此の世にいない。

死因については不明だが、フレアには大方見当がついていた。

この国では貴族が能力の有無に拘わらず武官や文官として幅を利かせている。平民、特に貧乏な農民は虫けら同然に扱われる。

アークはきっと、その才能を貴族達に疎まれて、身内に殺された

のだとフレアは考える。

『能無し貴族が父さんを殺したんだ』

父を尊敬していたフレアは、10になるよりも前から貴族を恨み、忌み嫌うようになっていた。

「いけなつ」

何も考えず、作業に没頭していたら本棚にぶつかり中身をいくらか落としてしまった。

身体の小さい彼女は上方に本を戻すのにも一苦労である。

「あーあ、やんなつちやつ

ぶつぶつ、小言を漏らしながら本を集めの彼女の手が止まった。

「これ……」

赤い革表紙の、分厚い本。金文字で古語……つまり魔法用語が書かれている。

「魔法書だ……」

パラパラとページを繰ってみる。

綺麗な字で書き込みがたくさん入っている。相当、使い込んでいた

ようだ。

「 折つてある」

魔法陣のページの一箇所が、田印のように折られていた。

「えつと、…… リラシングの炎属性ドライバー…… か

フレアは、アークが炎の召喚士と呼ばれていたのを思い出した。

何となく、目の前が滲む。

そして突然思い立つた。

召喚をしてみよう、と。

一般人の召喚は禁止されているのだが、出来るわけが無いのだから、真似事くらい構わないだろうという思いであった。残りの本を棚に押し込み、スペースを作る。

本を床に置いて魔法陣に向き合つて座る。血を一滴、垂らさねばならないので先ほど片付けたガラス片を取つた。

深呼吸を一つ。

左手の人差し指の腹を、そつと切る。

「痛つ……」

これを召喚士は毎回やつているのか。

小さな雲が、魔法陣に落ちた。

本に手を当てて、呪文を読む。

間違えないようにひたすらくつと。

出来もしないことを本気でやつてこる自分がくすぐったかったが、誰も見ていないからまあいいかと思つ。呪文を読み切る。

やはつ何も起こらなこようだ。

笑つて立ち上がる。

「わつ、続きやんなわや……えつ？」

ゴルク栓を思い切り抜いたよつな、軽い、景気の良い音に振り返ると本から赤い煙が出ている。

「えつ！？ えつ……どつこつ」と…。

フレアの頭を過ぎたのは『ハランクのドワーフ』が出て来たら、ウチが壊れる！』 だった。

思わず床に這いつくばり、煙を凝視する。煙が晴れ、現れたのは…。

「ハヘン、ゴホッ。まーつたぐ、いつもながら煙いつたらないぜーで、お前は誰だ？ 街を幾つ潰すんだ？」

フレアは、思わずポカーンとした。

「ト……トカゲ？」

「あん？ トカゲ？ そんなもん、ジーでもこいから、どつどと命令しり つてガキイツ！？」

引っ繰り返らんばかりに驚いているのは、20センチくらいの高さで、2本足で立つ赤いドラゴン（らしきもの）。大きければ、強そうに見える骨に幕が張られたような翼があり、金色の角がある事を除けば只のトカゲだ。2足歩行で喋るトカゲ、だが。

「あんた……何？」

「何？ だつて！？」

お前が召喚したんだろうが！

クラーファンドラ・フレイム・ドラゴンよつー。

「ク……クーフア？」

フレアは頭がどうかしかつてあった。

わいつわめで見開いていた黒くぱつぱつとした皿を睨じ、頭を抱える。

「いれは夢よ、夢……フレア、やんわり起きなやつこー。」

皿をそつと開くが……。

「何やつてんだ、お前よお？」

「やつぱ、こるひー」

今度は崩れ落ちるフレア。

「ねえ……『ラゴン』で、こんな小さいの？」

「あん？ 小さいもんかっ！」

いやしかし、お前はデカイなーあ、巨人か？ 俺様が小さくなつた  
気分だぜー！」

「あたしは人間！ 名前はフレアつ！  
あんたが小さいのよつー！  
何この本……父さんのじやなかつたのかな。こんなふざけたトカゲ  
がラランクドラゴンな訳ないもん！」

「あ……待てよ、お前……。

人間なのか？ フツーの？」

「やつよ、寧ろ小さい方よー！」

もつ訳が判らなくなり、喧嘩腰になつているフレア。

「お……おやつ、落ち着けよお、フレアあ」

「あんたが落ち着きなさいよ」

クーファはいきなり窓から飛び出す。

「あ、ハハーー！」

フレアは我に返つた。

これがEランクドラゴンであつてもなくとも……例えEランク（最低ランク）の魔獣でも一般人の召喚には厳罰が下される。下手をしたら、青春を牢屋で送ることになるかも！

「待てーつー！ 戻つてこーいーつー！」

叫んだフレアの顔に、戻ってきたドラゴンが激突し、フレアは引っ繰り返るハメになった。

「ほ……本当に俺が小さくなつてゐる」「

「小っちゃなつむる？」

「おうよ。俺はハムクーラー……。お前なんか、鼻息で飛ばせる超ビッグサイズ のばすなの!」

思い悩んでいたようだ。

テンションが一気に低くなっている。

何となく氣の毒になつてきただフレアだつた。

「あ、あのや…… あたし、たまたま、冗談のつもりであなたの事を呼び出しちゃつただけだから。帰つていいよ。

「そう、そう。あたしの魔力が足りてないから大きくなれないのかもよ？」

ドランは

「それもそ・だな」

と言いかけ、止まった。

「冗談で俺を呼び出したあつーー？」

「いー、ごめんなさいーー！」

謝ったフレアだが、相手は怒っているのではなく酷く驚いているの  
だった。

「待て、つまりお前は召喚士じやねえのか！？」

「う、うん。一般人。

だからあんたを召喚した事がバレると大変な事になるの。だから戻  
つて、早く、お願いつ！」

パチン、と顔の前で手を合わせた。

「おかしいぞ！ そいつはよお。

召喚者の魔力が関わるのは寧ろ、召喚そのものだ。呼び出すのに足  
る魔力を持つてれば召還後は、ガス欠になつてようが一切構わねえ  
くらいだ。

つ・ま・り・だ。  
フレアつったな？

お前は俺を呼び出せる魔力を持っていたのに、正しく召喚が出来て  
ねえつつも真にファンタジックな状態な訳だ

「ファンタジックの意味判つてゐる？」

腕組みして考へ込むドリゴン。マッチ棒のよつた腕だ。……呪、前足だ。

「えつとさ、それはもつといから戻つて、ね？」

「フン、普通は一秒でも長く召喚するのに四苦八苦するもんだがなア」「」

「フンは「じゅーな」と消えていくはずだつた。

「……ん、あれ？」

「くつ？」

「待てよ、今、戻るから」

「うと」

静寂がたつぱり一〇秒は続いた。

「戻れねえ」

「は？」

「ど……どすんだ！ 戻れねえだつて……」

「ドリゴンちが聞きたいわつ……」

「どこのう意味よ、戻れないって……？」

「だから戻れねえんだよー。」

「あたし、すりへじへ困るーー。」

「俺も、すりへじへ困るーー。」

また、静寂が今度は20秒近く続いた。

それを破ったのは……。

「フレア、どうしたの？ 叫んだりして？」

ひょっこり、母が顔を出す。

「あー」

「あー、やの子はー？」

デリモンとフレアの母、ソフティーの皿がまかいつと皿ついた。

「うー、うるさいわねー。」

「クーラーフラッシュ・フレイム・アーリングだー。」

「名乗るなあーー。」

入軍志願するハメになつた。青春を返して欲しい。

ソフイーは皿をぱちくつわせて両者を見比べ、そして床の魔法書を見た。

「まわかフレア……召喚したの？」

「ノル、ごめんなさい」

ヒルダがソフイーは手を叩いて大喜び。

「やつぱり父さんの子だわつ……」

凄いわよフレア！ その子はドラゴンなの？ 素敵！

クーファちゃん、下でお茶でも飲む？」

「待つて母さん、そんな……友達が家に来たとかじゃないんだから！」

脳天氣にも程がある対応。ずれている。

「紅茶か？ ミルクと砂糖たつぱりな！」

「飲むんかいつ……」

「ちりにも呆れる。フレアは本当に頭が痛くなつてきた。

「てか、母さん……クーフアつて？」

「そんなお名前でしょ？」

「いや、クーラフア・ソードラ・フレイム・ドライバー」

クーフアが訂正するも

「うふ。クーフアちゃん」

悪氣の一切無い笑顔。クーフアは戻す気も起きなかつたらしい。大人しくソフィーの肩にパタパタとドラゴンの飛行について適さないが本当に、パタパタといった感じで飛び上がり、階下へ行つてしまつた。フレアもやむなく続ぐ。

「それにしても、長いわね」

紅茶を一杯、ゆるりと飲み終わるとソフィーは言った。

「何のこと?」

「クーフアちゃんの召喚時間」

フレアとクーフアは「あつ」と、顔を合わせた。召喚士の娘であるフレアは絵本代わりのよう、魔法書を読んでいたので一通りの知識ならある。

「そうだ、お前みたいな小娘が10分以上も俺を召喚し続けてピンピングしてるなんて、おかしすぎるぞつー」

クーファが問題を正確に述べてくれた。彼(?)の言つ通り、普通、高位魔獣の召喚と維持には膨大な魔力が必要で、Sランクドラゴンなど並みの召喚士では召喚できないし、できたとしてもものの2、3分でタイム・オーバーとなる。

「訳が判らない……っ」

フレアはまた、黒い髪をくしゃっと掻んだ。

「あのね、もしかしてフレア……あなた、永久召喚したのかもよ？」

「……はあーー？」

フレアとクーファの声が重なる。

「ムリ無理むりっーーー！」

「でもね、それならクーファちゃんが自力で戻れないことの説明がつくわよ？」

「にしたつて、Eランク魔獣の通常召喚もしたことないあたしが、Sランク魔獣の永久召喚なんてできないって！」

「そりだぜマダム、俺を永久召喚なんて出来たら、生きる伝説になれるぜ？」

「せうかしら？」

通常召喚とは、時間制限付きの召喚。術者の魔力切れか、術者のエネルギー

意思により召喚獣は消える。初步的であり、最もよく使われる召喚法である。

一方で、永久召喚はそれと随分異なる。術者の命が尽きるまで魔獣を自らの元に留めておくというもの。これの難易度はEランク魔獣の永久召喚でもEランクの魔獣を召喚するのと同じか、それ以上とさえ言われる。クーファが伝説級と言つたが、大袈裟ではない。

またこれと似たものに契約召喚というものがあるが、こちらは若干難易度が下がる。召喚者と魔獣の契約により、その術者が死ぬまで、契約魔獣を他の者が召喚出来なくなるというもの。

「とにかく、あたし……どうすればいいの…？」

「のままではいつかバレて、捕まるだろ。」

フレアが落ち込んでいると、ソフィーが、とんでもない事を笑顔で、  
「わ、名案！ という風に言つた。

「召喚士になればいいじゃない！」

「……はあっ！？」

召喚士になると、「これは、王城に仕える武官になるか、国内に7名いてそれぞれ自らの軍を持つ大将軍の下に入隊するかだ。この国の貴族が大嫌いなフレアの様な者は後者の、しかも平民の大将軍である2人の内どちらかの軍に入るしかない。」

「いーじゃねーか

クーファまでそんな事を言つていろ。

「あのねクーファ……」

「俺を召喚できたんだからな！  
一生、皿漫でさるがつ

「皿漫したら牢屋行きなのつー。」

「だから、正面切つて皿漫するためこ、正式に召喚士になつとけー。」

フレアは特大の溜息を吐く。

「なつとけー…………つて、簡単に云わないでよお」

ちらりと発案者ソフィーを見ると、彼女はどこからかビラを取り出した。

「今、平民出身の女性大将軍エレイズ様の軍で公募が行われてるわ  
よー。」

エレイズ大将軍は、若くて有能な方だし、部下も8、9割が平民と  
いうことで有名よ、いいじやない！」

フレアは、理性が大反対すると同時に、それしか牢屋行きを逃れる  
手がない事も判つていた。

「わかった。行くつー。」

「よくぞ言つたぜ、未来の大将軍つ！」

「クーフア、うるさいつ！」

入軍試験の受付に行くも、周りを見る限り既に落ちたよつた気分となる。

翌日、フレアはエレイズが城主を務めるダークヒル城へ向かつた。クーファは上着の大きなポケットに隠れている。やはり1日経つても、クーファはそのままなのだ。

「はあ、あたしの日常はどう行ったの……」

「日常なんて、紙にくるんで肩力」に捨てとけ!」

「ガムじやないんだから!」

ダークヒル城は、王都から馬の足で3日、普通の少女が歩けばその倍はくだらなく掛かる。それだけでもめげそうになる。

「しかし、ダークヒルなんて陰気な名前だなー。エレイズっての、暗い奴なのか?」

クーファが言つと、フレアは少々ムツとして言い返す。

「違うわよ! ダークヒルは、城のある地名!」

エレイズ様は、クールで名前とかにこだわらないから城名にそのまま地名を使ったの。

すつしりく綺麗で強くて とにかく、完璧なんだからー!」

「……ふーん」

フレアは といつよつ平民の殆どはエレイズかもう一人の大将

軍、ウォーレンのファンである。

人気の高さ故、この2人は無事に出世しているとも言える。この2人を処分したとなると、ただでさえ評判の悪い国王への信用が減るどころか無くなるからだ。また、能力をとってもこの2人とその軍を欠くと国の軍事力がことごとく減退する。

大將軍となるには、Sランク魔獣を召喚することができる「上級召喚士」として認定されるか権力の行使かである。平民は前者でしか道はないが、5人の貴族大將軍の内3人は後者で「中級召喚士」(BからAランクの魔獣召喚ができると認定された者)。これくらいなら、Hレイズやウォーレンの軍にはザラにいるのだが。

「そういうやお前、ただの魔法も使つたことなかつたのか?」

クーファが思い出したように聞いた。

「無い。

呪文唱えて、炎とか雷とか出すアレでしょ? 全つ然判らない

「全ての魔法ド素人に召喚されたのか、俺は……」

プライドがギタギタだぜ。は~あ

フレアは何度目かの確認をする。

「あんた、本当に炎属性のSランクドラゴンなのね?」

「つたり前よ!」

「あんた、嘘吐けそうにないしなあ」

魔獸はランク、種族の他に属性でも召喚の難易度が変わる。上から順に光、炎、氷、水、雷、土の6段階であり、クーファは最高ランク、最強種の第2属性ということになる。

「あのさ」

ダークヒルを田指して3日。安宿に泊まり、毎日ひたすら歩いてもつクタクタであるが、まだ半分。

「何だよ？」

「あんた、アークって召喚士知ってる？」

「お？ おう、懐かしい名前だぜ！」

俺はあいつの契約魔獸だつたんだ。俺が背中に乗せてやつた人間は未だにあいつだけさ！

い、い奴だったな！ 俺とあいつの作った武勇伝の数々つ！ 伝説にでもなつてんのかね」

「ううん。父さんは平民だもん。……大將軍でもなかつたし。手柄は全部、貴族連中にとられちやつてた」

「ふーん、お前の父さんが。

待てよ、父さん！？」

アークの娘だつてえ！？」

フレアは頷いた。思い出すと悲しいし、腹も立つてくれる。

「やうか。つてことはアークの奴が何かしたんだな？  
あいつは今どこだ？ 出張か？」

「ううん。

死んじやつた

「死んだ……？ あいつが？」

「あんたが、あたしに召喚されたのが、何よりの証拠でしょ

クーファは暫くぼーっとしていたかと思つと、いきなり大声を上げて泣き始めた。

「死因……はつ？ うう」

「わかんないの。

貴族に隠蔽されたの。多分、貴族連中に殺されたのよ。  
父さん、優しい人だつたから……能無しで屑キレ以下の貴族でも同  
国人を殺せなかつたんだと思つ。相手が他国の“敵”なら、父さん  
が負けるわけないもん」

淡々と喋るフレア。

彼女は父のことで泣くのを自らに禁じていた。目が潤んでも、涙を  
流したり、しゃくりを上げてはいけない、と……。誰に言われたの  
でもなく、自分で決めた。

それから更に3日後の夕方少し前、フレアとクーファはダークヒル城に着いた。飾り気のない、白塗りの城壁。高い城門と濠で囲まれた城だ。今は北の正門が解放され、公募受付がなされている。

フレアが列の一番後ろに並ぶと、明らかに場違いであつた。若者から中年くらいまで、年格好は様々だが、見る限り筋骨隆々であつたり、どう見ても武術家を思わせる鋭い目付きの者……。エレイズの軍という事もあり、女性の志願者も少くないがフレアのよつに「小さな女の子」は当然いない。

フレアが何も始まつていないので、諦め、氣落ちしていると順番が回ってきた。

「次～い」

前の男が大きすぎて、今までこのやる気なさげな声の主は見えていなかつた。

「んあ、珍しいな」

「ど……ども」

「名前書いて。あと、志望動機」

フレアは一瞬、困つたが次のように書く。

【名前：フレア

志望動機：召喚士であつた父のようになりたい】

フレアを見ていた男は何故かニッと笑う。

『嘘がバレた！？』

「俺はリア。エレイズの副官な。

試験は明日の午前10時からだ」

「は……はい…」

落ち着いて相手を見ると、変わった男だ。……見た目の話だが。

20代の半ばくらいだろう。ワックスでガチガチに固めているらし  
い赤い髪は、クーファの体の赤さと良  
い勝負。この辺りの者に多い、緑色の瞳は切れ長で鋭いが、どこか  
人なつっこい猫を思わせるような印象がある。

「あいつ、なかなかできるな

クーファは真面目な口調で言つた。

「どうこう」と？

副官なりば当然だが、一応聞いておく。

「多分あいつ、俺に気付いていたぜ」

「そんなん！

通報されたらどうしよう…」

「落ち着けっての。

ありや単に面白がってるクチだぜ。てか、通報ならあの場で出来た  
だろ

「へ、そっか  
……」

一安心ではある。

しかし、試験に悪影響なのでは？ いや、そうに決まっている……。

## 入軍試験当日。……これって試験??

そして翌日。10時きっかりに志願者達の入城が始まった。

大広間に通される。床から壁、天井まで真っ黒である広間は大きな窓から明かりが差し込んでいる。真ん中辺りまで押し込まれたフレアは、床の中央の模様に気付いた。

鋭い眼光を放つ、巨大な純白の狼である。そういうえば、エレイズの契約魔獣はSランク獣族、氷属性の狼型魔獣と聞いたことがある。きっと、城主の趣味なのだろう。

「はいはい、全員入ったな？」

リアが広間突き当たりの扉から現れる。びくやら廊下に続く扉らしい。

「今から呼ぶ奴らは俺に付いてこい。で、残りは後の奴に従つて2手に別れて左右の部屋に。じゃ、呼ぶぞ。1回しか言わねえからな

リアがだらだらと呼び上げたのは、20名前後の名。その中にはフレアもいた。

リアに従い、真っ直ぐ長い廊下を歩く。

廊下の絨毯はやはり、黒。ランプ立ては狼の頭の形をしている。

「じゃ、ここで待機な。好きにしてろー」

ヒラヒラと手を振り、廊下の真ん中辺りの部屋に志願者を残して彼は出て行ってしまった。

黒基調のインテリアが置かれた広い部屋。ソファなどは全員が座つても余りあるが、遠慮してか誰も座らない……と思っていたいと、1人がまず腰を下ろした。

細い身体の少年。フレアより少し年上というくらいだろうか。長い茶髪に、黒い瞳。顔だけ見ていると、少女と見違えそうだ。

「座つたら？」

何となく目が合つたフレアに言つたらしく。

隣にフレアが座ると

「俺はシユウ。よひしく」

と丁寧に挨拶をくれた。

「フレア。こちからよろしく」

「同じ年頃の人気がいて良かったよ。

年上ばかりだと、無駄に気疲れしない？」

よく喋るなと思いつつ

「やうなんだよねえ。あたしなんて、明らかに場違いだし……。

この城を目指して歩いてたのに、道行く人に『上り下りはレイズ大將軍の城しかないぞ』  
なーんて言われて！』

と、文句が口を次いで出て来た。

「俺も似たようなものだよ。  
それにしても……どうして俺達だけここなのかな」

「3つに分けるにしたって、まだ100人は残ってたよね」  
フレアは頷きつつ言った。等分したのではないのは、明らかだった。  
意図は何だらうか。

「取り敢えず、見かけ倒しがここにいるのは確かだね」

微笑みつつ、フレアとシュウの前に座ったのは30代前くらいの紳士然とした男。

「俺はジェイド。まあ、今日でさよならにならない事を互いに祈るうか」

シュウは微笑みを返す。

「さりげない言い方、自信がありそうですね」

「まあねえ……。

「さりげない言い方、自信がありそうですね」  
そうそう、入り口のところで見たかい？ 無駄に自分をアピールするためかわざと諂いを起こして腕つ節をアピールしていた男、……」

「あっ、あのヤな感じの人ですね？」

あたしの方見てニヤニヤするから、睨んでやつたんですね」

思い出すと苛々してきたので、即座に便乗したフレア。

「脳内まで筋肉なんだろうね。あんなのじゃ、ダメ貴族のボディガードくらにしかなれないよ」

ジョイドも、品の良い雰囲気に合わず、貴族嫌いの平民らしき。

「そうですね。あれよりは俺の方が、望みある気がします」

シユウも軽く笑つてそう言つた。

そこで扉が開かれた。

「はいはい。じゃあ、今から一人ずつ来てもらひからな。面接的なモノやるから」

リアは入つてくると、そう告げた。まず、部屋の奥に一人佇んでいた男……恐らく剣士が呼ばれた。ガリガリに瘦せているリアなど、軽く弾き飛ばされそうな長身でがつしりした体格。

「面接って、やつぱりエレイズ様とだよね？」

フレアが言つと、2人は首を傾げつ頷くといつ変わつた事をした。

「まあ、そうじゃないかな」

とシユウ。

「脈アリって事かな。俺達は」

「ジェイドが言つ。そして

「1対1なら、口説いちゃうかもなあ」

などと、嘘か本気が判らない事を付け足した。

10人目でのジェイドが呼ばれた。

「戻つてこないから、どんな面接なのか判らないままだね」

シコウが部屋を見回しつつ言つた。

そしてフレアの番。

「じゃあ、頑張つて」

「うん、ありがと……」

緊張してリアの後ろに付いていく。

「そんな、びびんなつての。

取つて臉おつけて訳じやねえんだから」

笑われたが、心拍数は順調に上がる。

「んじゃ、お達者で」

明るく背中を押され、部屋に通された。

小さい部屋に、1人だけ座っている。顔は知っているがこんなに近くで見るのは初めてである。憧れの人、エレイズ大将軍。軽くウェーブした銀髪は背中の辺りまで届いていそうだ。座っていても判る、スタイルの良さ。そして何より、美しい顔立ち。黒い瞳、すっとした鼻、薄桃色の唇……完全なバランスは彫像のようだ。

「やあ」

思いの外、軽い挨拶が来た。

「……は、初めまして、よ、ようじくお願ひしますっ……」

クスリ、と笑われた。

『うわあっ……綺麗……』

「座つて。フレア？」

「は、はい！」

「緊張しないでいいよ。ポケットの子は？」

「えつ、ええつと」

クーファは自ら、パタパタと出て来た。

「ちゅつ！ クーファ！…」

机の上に腕組みして（小さいが）堂々と立つクーファ。

「クーラフア・ンドラ・フレイム・デラゴンだ」

エレイズはにっこりとした。

「だからクーファか。  
面接だから、わざわざ召喚したの？」

「ええとそれが……」

フレアはポツリポツリと真相を語った。

黙つて聞いてくれていたエレイズは一言。

「リアに受け付けやらせて正解だつた」

「……え？」

「君には凄い力があるつて事。

受付の時、リアにある程度組み分けをしておいてもらつたんだ。他の組も一応見たけどやつぱり掘り出し物は無かつたなあ」

「でもあたし、今まで魔法なんてこれっぽつちも触れてきてなかつたし……。あ、父さんの魔法書は昔読んでもましたけど、ほんとにそれだけで……」

そこにクーファが割り込む。

「フレアは合格って訳か?」「

「うん」

軽い答え。

「第1組の23人は全員合格。あとはやっぱリダメだった」「ここで言つていいんですか!?' といつ思いのフレアは放つておきクーファは話を進める。

「フレアは恐らく、ランク炎属性ドラゴン族の俺を永久召喚したようなんだが。どういう訳で可能だったのか俺もコイツもせっぱりなんだ。何か判るか?」

残念ながら、エレイズは首を横に。

「こんな例、見たことない。

それに……クーファの力がここまで制限されてる訳も。ランクドラゴンは、完全な状態で召喚する方法と何割か力を強制的に制御して召喚する方法があるけど……。ここまで制御は有り得ない」

そして、少し考えてから言つた。

「あいつなら判るかな」

「……あいつ?」

「うん。ウォーレン。頭、良いんだよ」

常日頃、のけ者にされている平民出身の大将軍2人が同期の上、今でも仲良くしているのは有名な話の一つ。

「今度聞いておいてあげる。  
じゃ、面接終わり」

可愛くバイバイされ、へなつとなつてしまふフレアだった。

兎に角、良かつたといつ気持ちで一杯だった。

合格発表。……クレーマーって冗談でもこるんだねえ。

翌日、合格発表が行われた。

形だけであり、合格者は全員結果を知っている。知らないのは不合格者のみ。

「はいはい。じゃあ合格発表

リアがさうさうと前方を読み上げる。

「以上、23名。残りはまた今度か、他の軍で頑張れよって事で」

フレアは肩をトントン、と叩かれた。シユウである。

「向こう見でよ

笑いを堪えてこらへし。

フレアが見ると、昨日やたらと立っていた男が怒りで震えていた。

「ちょっと待て！！」

「来た来た」

シユウは確實に楽しんでいる。

「さくに力も見ないで、何が試験だつ！」

普通の職場面接に来たんじゃねえぞ！」

すると、それに乘じて不合格者のうち何名かが声を上げ始めた。

「リア副面はまじつするのかな」

ショウはまじつ、「わくわくとしていた。

「よーし、ちょっと待つて。」

文句なら、ウチの可愛い将軍が聞く。」

リアが面倒くさそうに、横に待機していた衛兵にエレイズを呼びに行かせた。

数分後。

エレイズが現れた。何となく、だるそうとこづか眠そうである。

「2日連続で午前中に起つてなにでよ」

「ぐー」に文句を言つてゐる。

しかしひレアは、やはり言動よりも姿に注目してしまつ。寝起きそのまま、くしゃつとした髪が背中に垂れている。大きな目はほとんどしていた。胸元が大きくカットされている純黒のワンピースは寝間着か。

「文句、聞くけど」

田をこすりながら、話を聞いていたのか予想がついたのか「文句」の発信源をじつと見た。

その時フレアはぞくじとした。

無表情な美貌に隠れているものが見えた気がしたのだ。例えようもなく強い力とでもいおうか。シユウを始めとした、合格者達はフレアと殆ど同じ感覚を抱いていたが他の者は気付いていない。例の男が一瞬ぼーっとしたのは単にエレイズと田が合つたからだろう。

「俺は試験方法に納得できねえと言つたんですよ！  
顔見られただけで、決められちゃ困るつ」

便乗犯は更に増えている。

「顔、見ただけで判るんだけど……まあ、いいや」

微笑んだが、冷たい笑み。

氷の女王……そんな印象である。

「じゃあ君、今から君が納得できる試験してあげる。  
君が合格したら、全員受け入れてあげる。こちらの不備つて事になるから」

リアがエレイズに耳打ちしているのがフレアの田の端に映った。エレイズはそれを首を振つて否定する。

「あ、お好き」ビバヤ

リアのそんな言葉が聞こえた。そして更に

「おい、お前ら、担架の用意しどけ」

と言つたのも聞こえた。

「Hレイズ様とあいつが戦つとか？」

フレアが言つて、シユウはちよつと首を傾げた。

「戦いにもならないと想つよ？」

Hレイズが即席ルールを発表した。

「そうだな……」

自分の足で、小さな円を描いてその中に立つた。

「私をここから出せたら、君の勝ちだ。  
どんな手を使つてもいいけど、制限時間は……ん」

フレアを見た……何故？

「好きな数字は？」

「えつ、え……と、……5?」

「じゃあ5分。マーク、計つて」

「はい」

近くにいた衛兵が時計を見て、カウントを始める。

「あと10秒、9、8、7、6、5」

男は勝ちは決まりとでも言ひよひに、にやにやしている。

「4、3、2、1、開始」

男は助走をつけて、拳を引く。

「悪く思わねえでくだせえ!」

「その言葉、返すね」

男の拳がエレイズに当たった　と、誰もが思った時、吹き飛んだ  
のは男の方だった。

「何で!?」

フレアが田を丸くすると、シウウが小声で見解を述べる。

「多分、将軍は魔力で結界……というかバリアを張ったんじゃない  
かな」

「よく判るわね！」

「ちょっと、勉強しててね」

召喚魔法が余りにも有名なので、それ以外の魔力の使い方はおろそかにそれがちなのだが、どちらも実践では大いに役立つ。本当に強い者はどちらも手を抜かないものだ。

「一分経過あ」

もう決まりの事、よくやるよ……といつ表情でマークと云が告げる。

大勢の不合格者から、しつかりしんとの声が掛かる。彼らの運命も掛かっているのだから当然だ。

「くつそお」

男は立ち上がる。見かけ通り、身体は丈夫らしい。

ズボンのポケットから何か取り出す。

「おっ、魔法陣。召喚するのかな？」

かなり目がいいらしく、シユウは言った。

「それって、流石にまずいんじゃ……」

「どーせEか、せいぜいDじゃない?」

男が、さつきできた傷口の血を指につけて魔法陣に押しつける。

クーファの時は比べものにならない大きな音、煙の中から大熊が現れた。

「おっ……大きい」

フレアは目を丸くするも、

「ロランクの土属性、獣族。大したことはないな。大きいだけというのは、術者と同じだ」

「ジヨイドさん……よく知つてますねえ」

フレアは感心したように、彼を振り返り見た。

「召喚を使えるといつ事は、どこの軍にいたか、資格を得たんだろつけど」

「……資格？」

「あまり知られていないけどね。

軍人になる、以外に、年に2度開催される召喚士試験に受かつた者は召喚資格が得られるんだよ」

「へ……へえ」

知らない」とばかりだ。

「行けえつ！」

男が大きく指さした方向へ、つまりエレイズに向かつて熊が猛スピードで突進する。熊が頭からぶち当たつしていくが、やはり彼女は慌てない。

「君に恨みはないけど……」

そんな悠長な事を言いながら、右手を伸ばす。

ピタリ、と熊が止まった。

ぐらつと大きな体が揺れた、と思うとそのまま横転。

「おいつ！ 何してんだ！？」

男が叫ぶも、熊は起きあがらず出て来た時と同様、音と煙を立てて消えていった。

「はい、3分経過あ

声と同時に男は、やけになつたよつて、また自ら突つ込む。

殴つてダメなら、掴んで投げようつて安易で無駄な発想をしたらいい。エレイズの腕を捕らえ、背負い投げの如く放り投げようとするが、やはり無意味。

何とエレイズは男の半分程しかないと見える細い腕で男の腕を逆

にひねりあげ、円の外に叩きつけた。

まだ彼女は半径1メートルもない円の中、1歩も動いていない。

それから終了のゴールがあつても、男はとうとう起きあがらず担架  
が使われた。

## 部隊分けと、その理由《わけ》

「はいはい。じゃあ、合格者以外、さつさとお帰りあれ~」

リアの言葉で、完全に勢いを失った、残りの不合格者 つまり担架の上の男に同調していた者達は帰つて行つた。

「じゃあ23名、こっちに来てくれ。  
部隊分けについて説明すっから」

フレアが昨日、帰つてから大慌てで調べたところによるとエレイズの軍は大きく4つに分かれていてそれをエレイズが統括しているというということだ。副官の2人、リアともう1人のセフィー口の隊が一般的とも言える戦闘部隊。後の2つは詳細不明。暗部などと呼ばれるものだろうかと、推測した。

大広間に並ばされたフレア達。1人の男が待つていた。

「長かつたな。問題でも?」

その彼がリアに言った。

リアよりは肩などがしつかりした印象である長身、長髪の彼は声も表情も物静かな雰囲気。

「お~、問題アリアリ。ま、將軍がサッパリ解決したけどな」

答えてからリアはフレア達に男を紹介する。

「こいつが俺と同じく、副官のセフィー口な。部隊長の1人だ。あの2人は都合により今日は城内にいなくてな」

喋るのはリア、という役割分担でもしているかのようになセフィー口は黙つたままである。

「部隊分けの前に、どうやってお前ら23人を選んだか言つとくな」  
リアがパチンと、指を鳴らす。それと同時に音が立つて、煙と共に小さな影。

「そんな生き物いたつけ？ てな顔してる奴も多いな。  
幻獣族つて奴だ。高位の幻獣族になると、ユニコーンだとかフーン  
ツクスだとか、神話でお馴染みの魔獸もいるが、こいつはロランク  
のキマイラつて魔獸だ」

緑色で、ぱつと見はトカゲやカメレオンのような姿だが目が正面に  
1つしかない。また尾が短い。はつきり言つて不細工。

「ロランクの光属性、幻獣族キマイラの能力、知つてるか？」

答えられる事が判つているかのように、ジョイドを見た。

「自分よりも、強い魔力を持つた存在が 術者を除き 近付く  
と表皮が赤くなる、でしたね？」

「」答。

つまり、こいつが赤く変色した相手がお前らつてこと。手つ取り早

いだろ？

逆に言えば、こいつが赤くなりや志望動機が何であれ、喧嘩したら一瞬で吹っ飛びそうなヒヨロヒヨロでも合格なんだ。

今、能力がなくてもいいんだ、別に。人手は足りてるからな。成長が見込める連中つてワケなのさ」

そして、付け足す。

「俺の今の召喚法だが、召喚対象より自分の魔力が大幅に強けりやこいつのを身につけとけば指に怪我しなくても良いつつもんだ」リアが上着の裏を見せると、たくさん、といつか隙間ある限り魔法陣の描かれた布が縫いつけられてあつた。

「あと、誤解されると嫌だから言つとくぜ。

俺の契約魔獣は、Aランク炎属性の獣族な」

そこで、セフィーロがやつと口を開く。

「そろそろ始める」

「はいはい。んじゃ、怒られたところで部隊発表。

人数分けを言つとくと、俺の隊が8人、セフィーロの隊が9人。もう2つは情報部隊に2人、隠密にや4人」

名前が呼ばれていった。

フレアはリアの隊で、シュウは情報、ジェイドは隠密と折角、気安く話せると思った2人とは分かれた。

「じゃ、俺の隊と隠密は今から第1会議室で詳細説明する」

リアが言い、

「残りは第2だ」

とセフィー口が続け、それぞれ左右に分かれて歩き始めた。

「まず、俺の隊だが」

全員が会議室……どうも唯一と思われる白い内壁の部屋の椅子に座ると、リアが口を開いた。

「魔力を使った戦闘に向いてる奴が中心になつてゐる。潜在的なモンも含め、今のところこの氷属性……つまり第3属性程度の召喚が可能な魔力を持つてる奴か、もしくは全

く以て武術に向いてなさそーな奴がココ。この後、裏の魔法訓練塔に行つてもらう。そこで2人ずつ小隊分けをされて、優しい上官からもつと丁寧な説明を受ける事になる」

そこで言葉を切つた。

「次に隠密だが、経歴持ちが多い。自分で判るな？」

能力的にはバランス重視。これは、隊長がコエーから念入りにチエックしたんだが。魔力も召喚、攻撃用、防御用、その他で必要とするセンスが違うんだ。その、バランス。

明日には隊長が帰つてくるが、この後は補佐官からちょっとした説明がある。大広間に戻つて、そこで落ち合つてくれ、以上

それから一回を見た。

「質問はあ？」

「あと、2つの隊はどういう基準で？」

20代前後くらいの青年。説明を聞いた今なら頷けるが、武術には向いていなさそうな小さい身体。背は普通だろうが、子供っぽい丸顔の所為で小さく見える。

「セフイー口の方は、俺のこと逆な。これも、経歴持ち……特に剣士やなんかとして働いてた奴が多くいる。

情報の2人に関しちゃ難しいが……俺の隣で、受付の時に黙つて見てた姉ちゃん覚えてるか？」

一同、首を傾げた。

「ま、普通気にしないわな。  
あいつがくれつつた2人だ。  
あいつは不思議ちゃんでなあ……いや、悪口じやなくつて。苦労するね、あの2人」

フレアは何となく、シュウはそういう相手に苦労しない気がした。

リアに従つてフレア達は1度外に出た。城の一部、通り抜けできるようになつてゐるところを抜けるとそんなに高くない塔が建つていた。

「ちなみに」コハは、全員が魔法の訓練に使うからな

「それにしても小さくないですか？」

たまたま、隣を歩いていたフレアが質問を投げると彼はにやりとした。

「入つたら、ビックリするぜ」

リアがドアを開ける。真つ黒な大して高くも、奥行きがありそこもない塔の中は……。

「えつ、広い！？」

思わず、声に出したのはフレアだけではなさそうだ。外觀からは想像もできない大広間を軽く越える床面積があつた。

「どうなつてゐんですか？」

1人が質問する。

「狭い土地だから、マジックフィールドを作りだして、強制的に広げたんだ。

ウチの將軍だから出来る事さ。……ま、ウォーレンも出来るかねー

え」

呼び捨てかい、とフレアは思ったが、触れないでおいた。何となく、リアのこういった自由な雰囲気は好感が持てるし。

彼もきっと、身分などが嫌いな平民出身なのだろう。

「とにかく、だ。俺はここまで。

ホラ、あの4人な」

リアが奥に目をやった。

「後は頼んだぜー。」

彼の言葉に4人は揃つて低頭すると、進み出でた。

上官から丁寧な説明。この人、頭良いんだろうな。

「第1小隊隊長、クロウです」

まず召乗つたのは、恐らく4人の中で一番若い青年。首を隠すくらいのすつきり短い髪、切れ長の黒目勝ちな瞳。背が割と低いので、女性と見違えそうだつた。

「エドワード、フレアは僕に付いてきてください」  
私が第1小隊！？ と、驚くフレア。どう考へても、数字が小さい方が実力などが高い小隊に違いないのに。クーファの話がいっているのだろうか……。

「よろしくな

隣に並んできた青年が笑いかけてくれた。

「えと……エドワードさん？」

「ああ。『さん』は要らねえって。  
フレア、だな」

「うん」

小さいフレアからすると充分だが、エドワードは標準より小柄である。声と同じく、明るい印象の顔立ちで、取り敢えず人間関係の心配は無さそうだと思ったフレア。

フレアとエドワードは、1つ上の階に連れてこられた。壁を隙間無く本棚が覆う、中央に大きな丸机のある図書館のよつた部屋。

「その辺りに座つてください」

クロウが示したところに2人は並んで座る。

「まず、小隊について話しておきます」

そういえば、何も説明がなかつた。

「この、エレイズ大將軍指揮下の軍は約2400名。少ない方ですが、1人1人の実力を重視して選抜するところなのです。

その中で、僕ら魔法戦闘部隊、通称リア隊は約1000名います。それを50名ずつ20に分けたのが小隊です」

“ここまで質問は？”といつぱり、2人をさつと見、反応が無いので続ける。

「小隊もまた、10名ずつ5つの班に分かれています。詳細な連絡を伝える場合、または出陣前、帰還後の人数確認の為便宜上作られているだけですので、大きな意味はありません。

あなたたちは、この第一小隊の4班にフレア、5班にエドワードとなります。4班の班長はサラ、5班の班長はゴードンです」

責任職にいる女性が多いのもエレイズ軍の特徴と聞くが、やはりそ

うらじい。やつきの隊長4名の中にも一人、女性がいた。

「補足ですが、僕は第一小隊隊長とリア隊補佐官を兼任しています  
故、不在が多くなります。

その場合、第1班班長のカイが代理を務めますので覚えておいてく  
ださい」

それにしても、丁寧な人だとフレアは感心。丁寧口調の上、一切、  
長い説明が滞る事がない。

もともと頭がいいのか、何事も几帳面に準備する性格なのかはまだ  
判らないが。

「戦時でない限りは見張り当番である日を除いて、起床や就寝時  
間は定められていません。ただ、6時から7時には起床する者が多  
いです」

「そんな遅くていいんですか！」

フレアは思わず口に出してしまった。

クロウは少し驚いた目をしたが、微笑んでくれた。

「あ……その、あたし農民だったので。  
夏場なんか、4時5時が基本で……」

「好ましいです」

見た目通り、だらけた生活は嫌いなのだわ。

「あの、見張りって何人くらいでやるんですか？」

エドワードが、話が止まった隙に質問した。

「2人1組が基本です。セフィー口隊とも合わせ、計8組がそれぞれ城内外の警備をします。  
交替は普通、3時間。おおよそですが10日ごとに1回くらい」と思つていてください。

見習いの期間は、班長と共に2人以上で回る事になるでしょう。前日に、集合時間などが直接伝えられます」

そして、フレアの関心事へ。

「それと、給金についても話しておきます。

月払いが基本で、見習い、下級兵、中級兵、上級兵……または各位に等しい階級の者……と額が変わります。下は30万Gから上は、100万以上となります。戦などがあつた場合は戦功により上下しますが、今月あなたたちには30万、給与されるかと」

それでも、フレアには田が飛び出そな程の大金であった。平民、特に農民の一ヶ月の生活費は高くて5万なのだから。

「日々の訓練も、戦前の演習など以外は強制されませんが毎日欠かさずといつ者が殆どです。訓練の際は、どの施設も使用できます。ここにある魔法書も、自由に読むことができます」

そして言葉を切り、2人を見た。

「因みに、僕の所見ではフレアは炎、エドワードは雷の魔法と相性がいいようです」

「あつ、あの」

フレアが口を挟んだ。

「召喚以外の魔法つて……」

「召喚魔法と同じく本を読めば そして、自らの力量と合えば大体、扱えることでしょう。」

判りにくい場合は僕のように銀の襟章を着けている上位兵、または白い襟章の中位兵を見付けて質問するのも良いでしょう。用事がないう限り、断る者はいないはずですよ」

襟章については、フレアも（昨日、慌てて調べて）知っている。エレイズと、副官、隠密部隊隊長、情報部隊隊長が黒、その下が銀、白、青となる。寒色ばかりだ。軍に依つて違つそのうので、やはりエレイズの好みだろうか。

また、見習いに襟章はなく代わりに軍服着用が義務づけられる。黒いコートのようなもので、洒落ているため、位が上がつても好んで着用している者も多いとか。因みにクロウは、黒いロングパンツに白いジャケットという出で立ちで襟章は細いチエーンに通して胸元に下げている。

「僕からは以上です。」

もう少しで、4班、5班の班長が来ますので兵舎など案内してもら

つてください」

そつ話を閉じると、時計をひひひと見てから急ぎ足で出て行った。  
仕事でもあるのだらうか。

その後フレアは、迎えに来た4班の班長サラと兵舎へ向かった。  
サラは、見たところ20代くらい。

フレアと同じく、堅苦しげのが嫌いなタイプらしく呼び捨てでいい  
とまで言つた。

「だつていい、階級なんて用一単位でロロロロ変わるんだから  
との」と。

「雑用係を雇つ軍も多いんだけど、ウチはやつこいつの一切なくて。  
だから、部屋の掃除で今日は終わるかもね」

笑いながら言つたサラが開けた部屋の中……。

確かに、そのようだ。

物は無いが、放つとらかしだったため埃が凄い。掃除用具について  
は、各階に共用のものがあるそつで。

また、兵舎の掃除は上級兵であると何であると整備係の当番が  
回つてくれるやうだ。

「え、クロウさんも？」

「そうよ、てか、あの人気が整備した翌日が一番綺麗（笑）。あんなに美形だけど、隙が無いから彼女できないのよお」

フレアも思わず噴き出した。

「じゃ、何があつたらこつでもビードリッて事で。私は行くね」

「ありがとう」ゼロましたあ

サラがいなくなると、クーファがポケットから顔を出す。

「ふはあつ！」

つたく、苦しいつたらないぜ！－俺、隠れる意味あんのか？」

「あるわよー だつて……」

エレイズに言われたのだった。

『クーファの事は、なるべく他に知られないように。ウチの上層部とかウォーレンはともかく、他の軍に知られると面倒な事になりかねないからね』

面倒な事がどういう事なのかは不明だが、將軍の指示は聞かなければならぬ。

「じゃ、クーファも手伝つてねー」

「は？」

「これ、窓枠のとこ頼んだわよ～」

クーファに小さなハタキを持たせたフレア。自分は棚などの大埃落としから。

「はあっ、お前って奴はよお……。

クーラファンデラ・フレイム・ドーラゴンにハタキかけられた女として、歴史に残るぜ」

「やつたあ

皮肉と承知しているが、あえて気にせず。

クーファも小言を言いつつ、なかなか眞面目に働いている。これから、高いところの掃除は羽根があるクーファに任せよつといつそり決めたフレアだった。

落ち着いたと思つたら、また不可避の問題事ですか！？

フレアが入軍してから1週間。なかなか、ここでの生活にも慣れてくれた。班のメンバーも班長のサラを中心に感じの良い者ばかりだし。商人の家の裕福な平民や、貴族に奇妙なものを見るような扱いを受ける学校よりもよっぽど居心地が良かつた。母、ソフィーからの手紙によると、退学手続の時、理由を知つた教員の呆然としたり悔しげにしたりする様が見物だったとか。

「ねー、クーファ」

「何だ？」

城のすぐ近くの店で買つてきた朝食を部屋で食べながら。

クーファもサンドイッチを頬張つている。

「あんたつて、今も戦えるの？」

「うーん、そういうや試してねえな……。  
でも万が一、俺様の本来の力が發揮されちまつとこの城どじろか丘  
一帯が消えるからなあ」

首を傾げる。と、そこでノック。

「（クーファ、隠れて！）  
はいー」

フレアがドアを開けると。

「リ、リア副官…？」

「へへへ、んな驚かなくて。」

エレイズが、例の奴と一緒に来いつてよ

やはり、リアも知つてこるようだ。

「判りました。えつと、ジイク……」

「」の敷地内で、いんや、」の国で一番“安全”なところ……エレイズの私室だ

その口ぶりに首を傾げたフレア。

「安全？ そんな、まるで……」

自分が今、危険の中にいるような気がさせられる。

「説明は向こうでな

リアの表情、声色が固かつた。

城の最上階、最深部にある黒塗りのドア。エレイズの部屋はそこだ。

リアが戸を叩くよりも先に、本人がドアを開けて2人 正確には2人と1体 を招き入れた。

「座つて……長くなるから」

エレイズは先に部屋の奥にフレア達を進ませると、扉に触った。扉が銀の光に覆われ、その光がぐるりと部屋の壁を一周し、天井や床にまで広がった。

「盜聴防止」

フレアのきょとんとした顔を見て、そう言つとエレイズも椅子の1つに座つた。

「クーファ、出て来ても大丈夫」

その言葉を待ちわびていたかのように、クーファは黒コートの大きなポケットから飛び出した。

「ふう、いつもながら、苦しいつたらないぜ！」

エレイズは口の前で指を立てた。

「自然発生的な音漏れは防げない。声は低めて」

「お……おつ」

「待つてください。何で盜聴なんて……」

「状況が変わったんだよ

リアが真剣な声音で言つ。

「状況……？」

「たつた1週間で、一体何が変わるってんだ？」

クーファが大人しい声量で問うと、エレイズは苦い表情を見せた。

「変わる時はあつという間……早い話、これを見て」

エレイズが机に出したのは、政府からの令状であつた。实物を見るのはフレアも初めてであつたが、資料としては知つてはいる。法改正の通知などの目的で、軍の統括者、学校長、その他諸々の団体の責任者に送られるものだ。

上から下へと流し読み、フレアは絶句した。

「何これ！？」

声を抑える理性はあつたものの、驚かずにはいられなかつた。

それは主に、刑罰の変更についてだ。

「一般人だけじゃなくて、見習いも、平民に限つては召喚を違法とみなされる事になつた」

エレイズが概要を述べた。

「それって……」

「しかも、刑罰の厳重化。見て……。Sランク魔獣を無権利の者が召喚した場合、最悪死刑」フレアは自分の心配もあるが、今は別の事が頭に浮かび胸がむかついた。

「これ、従来みたく“治安維持”が目的じゃありませんよね……？」

上官2人は頷いた。

「平民って限定がある通り、平民中心の軍の弱体化、貴族の地位拡大が目的だ。そのうち下級も召喚禁止になるかもな」

リアが言った。

「莫迦だよね。味方を弱体化させたりして……。自らの首を絞めてる」

本当に、あきれ顔のエレイズ。

「でも鬼に角、今は君の身の安全を図る」

「ど……どうやって」

リアがやつと、彼らしい笑みを浮かべた。

「『ハイジを受けて合格しろ』

彼が突き出したのは『召喚士認定試験』のビデオ。その実施日は……。

「1週間後じゃないですか？！…」

「できる、できる、お前なら～」

軽く言うリアだが、フレアはまたもや選択不能の無茶振りか！ といつ心境だった。

「これしか道はない。

しかも、この日程を逃せば半年後……。調査が来たら、よっぽど無理しなきゃ隠し通せない。

君をあつさり下級兵に出来ればそれが一番楽なんだけど、腹立つ法律があるんだよね。入軍1ヶ月はどのよくな者も見習いとして扱わなければならぬって感じの法律……」

エレイズは溜息をついた。

「どうすれば後1週間で……」

泣きそつな声でフレア。

「私が個人レッスンしてあげる」

「そうですか……ってええつー？」

今度こそ大声を上げ、上面2人とそつき怒られたばかりのクーファにまで静かにしろと身振りで示された。

「永久召喚でも、常に近くにいなきやならんつて訳じやねえ。クーファ、お前はフレアが合格するまでこの部屋に幽閉な」

「え？ へ？」

おかしな声を上げるクーファ。

「それ以外に手はないんだ。  
フレア、クーファ、いいね？」

両者は頷くしかなかつた……。

ひひせひ、一癖も一癖もあつそつた同僚達。

魔法訓練塔（フレア、勝手に命名）にエレイズとフレアが入ると、そこにいた者達は驚き、大慌てで低頭した。いくら身分に五月蠅くない平民軍であつても、いづれにしつこくは流石に軍らしい姿だ。

「計られるのは知識7割に残りが一般魔法実践」

エレイズとフレアは、資料室にいる。見習いの召喚禁止令がその後伝わったようで、ガツカリしながら魔法書を返しに来る者が先日、顔を合わせた新入りも含め、何人かいた。

「召喚が出来たって事は、古語、読めるんだね？」

フレアは頷いた。

「さつき言った、知識は古語の現代語訳が中心だから。あと、召喚に関する基礎事項。下級召喚士資格だから、こんなもの」

「どうちも、大体……」

だよね、とエレイズは微笑む。

『「ひひ～、綺麗！～。』

余計な事を考へていいヒマはないのだが。

「じゃあ、問題は後者だけだ。

荒療治だけど、一週間で出来るのは何事もあらう。

フレイズは立ち上がる、一見適当とも思えるほど、それもひと冊の本を棚から抜き取つた。

「警備だの、何だのは全部私が断つておいてあげる。2日で読み切つて」

相当な量だが……。

「2日くらい、寝なくても大丈夫」

「はい…… そうですねえ」

徹夜は確かに必至だと思いつつ、フレアは部屋へその後すぐ戻り、読書に没頭した。

その頃、上宮に呼び出された者がもう一人いた。

「こつちは張り出されていないけれど、もう少しで公布されるであろう法令」

手渡された書類を読むのは、ジェイド。

「ふう、移民法……ですか。

しかし隊長、よくお気づきになられましたね。言葉の詫りも、身なりにも気を配つていたのですが

「私の目は誤魔化せないよ」

苦笑するジョイドに妖艶な笑みを投げて いる男は、セバスチャンといつ隠密部隊隊長。

女性も羨むような、艶やかな黒髪、柔軟な光の奥に厳しさを隠し持つ瞳。人形のように整った美貌には寒氣すら覚える。

「はつきり言って、君は即戦力であり、私が欲しいと思っていた人材の一人」

「それは、光栄ですね」

頭を下げつつ、恐縮、という雰囲気は一切ないジョイドだった。

「君が国外退去となつては、かなり困るんだ……。だから君には、政府に対する身元隠蔽が可能である唯一の部隊に入つてもらひ」

「隠密特殊諜報部隊……ですか」

「よく知つて いるね」

2人は互いを疑いこそしなくとも、腹の底を見せる気は毛頭無い笑みをぶつけ合つた。

「そして」

セバスチャンは、封筒をジョイドに渡す。

「初任務だ」

「これは早い……。拝見します」

ジョイドは中を読み、流石にセバスチャンをじっと見た。

「こんなことまでしてこらるとは」

「必要なんだよ」

「承りました」

ジョイドは退室し

「ちよつと面倒くさい事になつたなあ」

と、小さく呟かずにはいられなかつた。

「面倒な事になつてるけど、俺は移民じゃないし当分召喚の勉強する気もないから関係ないや」

張り出された令状を見て、誰もが顔をしかめる中、けろりと笑つたシユウ。それに対し、隣にいる同じ年頃の女、情報部隊たつた1人の同僚は見透かしたように笑つ。

「関係ない理由はそれだけじゃないでしょ？」

「嫌だなあ、イアリス。

俺はただの家出小僧だよ」

シユウが言つと、イアリスは肩をすくめた。すると、シユウはその顔を覗き込む。

「ほら、可愛い顔が台無し」

「この上なく余計なお世話だー。」

品が良いくせに時々、棘を出すシユウと氣の強いイアリス。すぐに言い合いとなるが互いを嫌つてはいるところより、やりとりを楽しんでこるとこ、う風である。

「とにかく、あたしには迷惑な話だー。」

シユウの言つた通り、きつそつだが可愛いこと、充分に言える顔をしかめる。

「この国の政府って、ほんと莫迦ー。」

「それは俺も同感」

憧れの大将軍の個人レッスン。……「んな贅沢あつていいの！？」

その夜。

「クーファって、何食べるの？」

部屋に戻ってきたエレイズ。彼女は仕事する時は別室の執務室などを使うため、クーファは時々フラリとやつてくるリアが相手してくれるだけであり、ヒマを持て余していた。

「メシか！ 何でもいいぜ。

腹減つても一辛いったら。寂しいしょお……」

「じゃ、これでいいね」

大将軍の食事とはとても思えないもの……その辺で買つてきた弁当を袋から2つ出した。

「今、フレアの奴はジーしてんだ？」

身体のサイズに合わせ、猛スピードで食べ進めながらクーファは思い出して言った。

「魔法書読んでる。

あの子なら、多分それで出来ちゃう」

「あんたはよお」

クーファは（彼にとつては）大きな鶏肉の塊を一口に飲み込んだ。

「フレアの事、どうして見遁つこむんだ？」

「あの子には……区別が付きづらいけど、2種類の魔力が混在している。1つは彼女自身のもの。これも、かなり強いものなんだけど、もう1つはもつとすごい。正体不明なんだけど」

ケーファは黙つて、暫く考えた挙げ句打ち明けた。

「あいつの親父、炎の魔法使いアークなんだ」

エレイズは驚いたらしく、クーファの半分以下の速度でノロノロ食べていたがとうとうそれを止めた。

「まさか、彼の魔力……ううん、有り得ない。本人が生存してるならともかく、死後、魔力を他の者に与えるなんて……。血縁者だろうとそんな事が」

「因みに、俺はアークの契約魔獸だった。  
只の偶然で処理できるか？」

「……血筋によつて、得意分野が偏る事は多いけど」

クーファは宣言するように持論を出す。

「偶然が偶然重なったなんて言い訳は納得できねえ、いや、俺はしねえ！」

アーラの死の事実関係が隠蔽されてるそりゃあねえか。…………何かあるはずだぜ」「

「うん。慎重に掘り下げてみるよ。だけビ、フレアには伏せておいて」

「……だな。試験じけいじやなくなる」

「その後もね。時が来たら、私から話す」

何か言いかけたクーファだが、エレイズの目を見てやめた。何か考えがあることは容易に察せられた。

2日後の朝。フレアは何とか、渡された資料を読み切った。5冊で、中には薄い物もあつたがなにしろ初めて見る代物。

難しいといつたらなかつた。

寝てもいいだろつかと思っていると、ノックもせずにドアが開かれた。

「あつ」

「不用心だな。鍵、閉めないと」

フレアが驚いたので、してやつたり的な笑みを浮かべたエレイズ。ここは怒らねば！ と、思つただけで終わつた。やはり、へなつとなる。自分でもどつかの親父かと、突つ込みたくなる。

「読み終わつた？」

「なんとかあ……」

「じゃあ夕方……5時くらい。訓練塔について

そう言つてエレイズが出て行つた後、フレアのすることは決まって  
いた。

目覚まし時計かけて、寝るつ！――

5時。フレアは、訓練塔でエレイズを待つていた。眠くて仕方がないのだが、そもそも言つていられない。早く来てくれないと立つたまま眠つてしまいそうだ……そう思つていると、待ち人は現れた。

先日の通り、大きなざわめきと敬礼。フレアも倣う。

「じゃあ、おいで」

「はい――」

目がぱつちりと覚めた。

そして顔も知らないド新人が大将軍に連れて行かれる光景を皆、た  
だ驚いて見送つた。

「できそう?」

ズバリ聞かる。

「試してみないと……でも、召喚の方が複雑、ですね？」

「うん、そうだね。フレアが受けるのは、下級認定試験だから、簡単だよ」

そう言いつつ、本のページを繰る。

「やっぱり、炎と相性良いと思つんだ」

「あ……クロウさんにも」

「言われた？ 彼の言つ事は、大抵合つてるからね」

「へえ……」

今回、2人は書庫ではなく訓練場にいる。

「ちょっと見てて」

エレイズが掌を前方へ伸ばした。その掌周辺の空間がいきなり赤い色に染まつたと思つと、大きな炎の玉が出来上がつた。

「イメージが大事。

本ばつか見てるから、貴族はダメなんだよ。書を捨て、何とやら」

フレアは曖昧に頷くと、促されるまま、同じよつとやつてみた。

さつき見た過程を思い浮かべる。

理論は頭に入れた。魔法とは、召喚以外は魔力の具現化である。血管と同様、普通は視認できないが魔力の流れる管が体中を張り巡らされている、らしい。それを手なら手、足なら足に集中させることから始まる。

「そうだな……自分の身体を人の形じゃなくて一本の川とでも考えてみて。流れ込む先が、その右掌」

想像する。

赤い魔力の流れる、川……。

「あつ！」

掌の周辺が赤く染まり始めた。

まだ、熱くはない。

「思い描いて……」

円盤のように赤い光が形になり始める。だが、球体にするのが難しい。

と、Hレイズが四苦八苦するフレアの肩に触れた。

その瞬間、円盤が球体となつた。

「今、一気にイメージが……！」

掌を下ろし、魔力の球体を消してからフレアが言つとエレイズは頷いた。

「ちょっと、手を貸したの。

魔法の1つだけ、イメージを共有するといつもの。情報部はね、まずこの魔法を覚えさせられるんだ」

「何で……ですか？」

「喋れなくなつても、生きている限り、知り得た情報を伝えられるでしょ？」

何となく、冷たいものを感じた。

そうだ、この先は死と隣り合わせの人生なのだ……と、今になつて実感した。

「今のイメージ、覚えられた？」

フレアが頷くと、エレイズは微笑む。

「じゃあもう一度、やってみて」

4日後。

「もう大丈夫だね。第2属の術が使えれば、誰も文句言わない」

「はい！」

フレアは頭を下げて

「ありがとうございます！ ハレイズ様のお陰です！」

と言ひ。

「ううん。君の実力だよ。後は、自分で精度を上げる事」

「はい」

試験当日、フレアは殆ど緊張はしなかった。午前中のペーパーテストの出来も上々だったように思える。

『実践も大丈夫！』

「受験番号0110番、前へ」

「はい」

10人が1つの広い部屋にまとめて入れられ、術を試験官へ見せる方式。下級試験だからか、10番目、最後のフレアよりに第2属、

炎の術を使った者はいない。

設置された円形の板で出来たターゲットを狙う。コントロールと威力を見られるわけだ。

フレアはもうこの5日間で慣れっこになつたイメージ、炎の球体を思い描き魔力を放つ。

どよめきが起つた。

炎の、人の頭より大きいくらいの球体は真っ直ぐに飛び出し、砲弾のような勢いで板どころかそれを支える鉄の棒までを破壊したのだ。

『あ、やば……っ。やりすぎたかも』

リラックスはしていたが、気合いは入つていたんだと自分の事ながら今更気付いた。

## やつと戻ってきた平穏(?)

それから一週間後。フレアはエレイズに呼び出された。用件は言われなくとも判っている……試験結果についてだらつと。

「失礼します！」

余り、結果については心配していなかった。それどころか、試験終了その日から一般職務に就いていたくらいの落ち着きであった。エレイズの私室に入る事の方が、よっぽど緊張である。

「入つて」

軽い返事に従つてドアを開くと、リアもそこにいた。

エレイズの正面、デスクの上にはクーファが偉そうに腕を組んで立っている。クーファとは2週間ぶりだ。

「判つてたとは思つけど、合格だよ」

「おめでとさん」

エレイズとリアにこう言われると、心配などしていなくともホッとした気持ちとなつた。

「ま、俺様を召喚したんだ！  
これ位は当然つてもんだよな」

「何あんたが偉そうなのよ」

フレアは思わずそう言つてしまつた程、クーファは偉そうに頷いたりしている。

クーファは構わず、パタパタと飛び上がりつてフレアの肩に乗つた。

「もうコンコンしなくていいんだな？」

クーファの確認に、エレイズが頷いた。

「ただし、ランクドリコンって事は内緒にしておいて。噂が城外にまで広まると、厄介だから」

との忠告も。

「ふう、有名なのも辛いぜ」

クーファがわざとらしい溜息をついて言つから、フレアは渋い顔をした。

「まあ、あんたがフレイム・ドラゴンだなんて言われても誰も信じないだろうけど」

「んなう」

「せこぜい、Dのロザードかな」

リザードは、ドラゴン族最下位の種族。サイズはクーファくらいのものから、数メートルの大型まで様々。

「オーラー、フレア、いくら何でもそりゃ、俺の心がギタギタに……」

エレイズとリアは揃って、噴き出すのを堪えながら小さくドランクドランクと小さい（背丈の）女の子の口喧嘩と/or/いうか、言こと命こ見ていた。

「ふーう、これで日常がやつてくれるわ」

自室に戻ったフレアは、ぱたんとベッドに倒れこんだ。

「何だ、適応が早いじゃねーか

フレアの頭の横に、ちよこんと立つてクーフア。

「へ？」

「大将軍の部隊に入つて、召喚士資格を得て過／＼日々を日常と呼ぶとはなかなか肝が据わってきたな！」

「うう……」

わらわと口から「日常」という言葉が出て来たが確かに、1ヶ月と少し前の自分が見たら異常と言つに違ひない状況にいるのだ。

「今日は見回りの番じゃないし……。訓練塔、行こうかな

ぐこつと上半身を起こし、それから立ち上がった。

「えー訓練!-?」

「何よ、クーフア。どうしたかった訳?」

「いやー、外に連れてつもらえたり……」

「ペットみたい」

フレアは思わず笑った。

「しつ、仕方ねえだらうが! 流石に単体でフリフリ外に出ると、  
立つてしょうがねえしそお」

「じゃあ、庭の方にでもいく?」

フレアは笑つて言つた。

「あたしもまだ、ちゃんと城内歩き回つたことないし。一度いいか

「おお!」

クーフアは嬉しそうに飛び上がった。

「いやー、お前が戻つてくるまでは、と室内にいたからもう、ガ  
ッチガチでよお」

「ああそつか」

何だかんだと忙しく、クーフアの状況を忘れていたのでちょっと申

し訳なかつたかなと反省したフレアだった。

城内をフラフラ歩くと、すれ違う人は皆、クーファについて驚く。エレイズの案で、召喚資格を得たから練習しているのだと答える事にしている。そうすると、誰でも納得してくれる。見習いの身分でこうしている者は少ないが、白い襟章の中級兵くらいになると、フレアとクーファのように口常から一緒にいる場合は多いようだ。

「あ、フレア」

「シユウ、久し振り！」

「あれ、そつちは？」

同じ年代の彼とは、入隊試験合格発表の日以来だった。

「あたし、召喚資格を取つたんだ。練習中つてとこ」

「へえ」

じつとクーファを見たシユウは、意味深に笑つてフレアに囁いた。

「ヒランクドラゴンなんて、やるね」

「え！」

彼は明るく笑う。

「ま、秘密なんでしょう？ 黙つてゐるから安心してよ」

「何で判つたの？？」

「俺、どうやら魔力探知が得意みたいなんだよね。ロザリア隊長……情報部隊の隊長はそれを見抜いて俺を入れたみたい」

「えつと、つまり……召喚獣の強さが見るだけで判るの…？」

「まあね」

尊敬の顔を向けるフレアに、シユウは苦笑した。

「……まではつきつと判るのは、その子の魔力がめちゃくちゃ強いからだよ。

ていうか、フレアの方が凄いんだって」

「やうだぜフレアー お前はこの俺様を召喚した、つひ直覚が足りねえぜー！」

クーファが言つ。

「うーん、だつて……こんな小さこと」

「オーラおーー！」

シユウはそんな2人を見て笑いつつ、声を低めて尋ねた。

「何で種？」

「クーラフア・ンドラ・フレイム・ドラゴンだつ！」

「クーフア、声大きい！」

シユウは目を輝かせた。

「うわー、第2属！ すごいなあ！

クーフアって呼んでるの？ 僕も呼んでいい？」

「ま、いいぜ」

久し振りに、然るべき感動の視線を受けたクーフアはかなり嬉しそうであった。

「あ、そろそろ戻らないと。イアリスに怒られる……じゃ、ばい  
ばい」

シユウは名残惜しそうにクーフアを見ると、急いだように廊下を駆けていった。

持つべきものは、おしゃべりで情報通の友人。

「しかし、こうしてみると、この城はあんまでかくないな」

「え？」

クーファがしみじみと呟つので、フレアは驚いた。

「充分広いじゃない。」

「おうおう、田舎者らしい発言だな」

ムッとしたフレア。

「他の城にいた事、ある訳？」

「おうよ。

ま、いたというよりその上空を旋回してたつて方が正しいけどな。  
お前、ガルブレイク城って知ってるか？」

「知ってる。英雄ガルブレイクが、神の如き力を持った召喚獣を操つて、単独で敵軍を一掃した伝説的戦い……って、まさか」

クーファは腰に手を当てて、胸を反らして得意げに鼻を鳴らした。

「そいつは、俺様の力さ」

「ええつーー？」

召喚獣に寿命がないといふ話は知つてゐる。だから、歴史にクーフアが登場してもなんら不思議はない……はずだが、やはり驚いてしまつ。

「もしかして、だからシコウはあんなに感激してたのかな」

「だらうな！」

まあ、あの歴史に關して書つと眞実と記述が微妙に違うな

「どう違うの？？」

「ガルブレイクの奴は確かに、召喚の才能はとんでもなかつたが俺を召喚してから2分も保たずダウンしてな。

『クララファンドラ・フレイム・ドラゴン、あとは頼む……』なんて言つて、終戦まで寝てたぜ。だから、あいつと俺が協力して敵軍を追つ払つたつてのは、でつち上げだ

「そ、そんなんあ」

フレアは普通の者がそつて、ガルブレイクを英雄として尊敬していた。この、当事者の語る事実は些かショックだった……。

その後、城内をだいたい一周してしまつたので、フレアは自室に戻つた。

明日の夜は、見回りの仕事があるので早めに寝るとしたのだった。

翌日、フレアはクーファを置いて魔法の練習をすることにした。下級レベルとしては群を抜いた威力であっても、あくまで下級。中級以上でなければ実戦では役に立たないといわれれている。

時間は充分に掛けられるので、先日見付けた本に従つて地道な手順を踏むことにした。

やはり大事なのは、頭の中に具体的な形を浮かべることなのだが、いきなり形にせず空間を光らせる事が出来たらその光を少しずつ広げていくようにする。

球体ではなく、ぼんやりした靄のよつなものがフレアの突き出した右手を中心に薄く伸ばされるように広がる。魔力の色はやはり赤である。クロウが言った通りに、フレアは炎の魔法と相性が良いらしかつた。

『血筋つて、関係あるのかなー』

と、少し思った。もし、自分がいつか「炎の召喚士」と呼ばれることがとなつたら、嬉しい。

靄がだいたい、フレアを中心に2メートルくらい広がつたところで、イメージを強くする。

一番簡単な形が球だが、それはあまり実用的でなく威力は期待できない。だから、フレアは様々な例を見比べた結果、目指す形を決めていた。

渦の形である。

言ってしまえば、炎の竜巻。安定させることができれば、効果範囲は相当に広い上、相手の攻撃に防がれたり破壊されにくい。

田を開じて集中した。

薄く広がっていた赤い魔力が、熱を発しあじめて炎となる。だが、中心のフレアには一切影響がない。靄が、フレアの正面に集まり始め、だんだんと渦を巻き……そこで消えた。

「あー、もう…」

その後、何回もやつたが、いつでも同じところで止まってしまう。力量が足りないのか、集中力に問題があるのか、それとも回数の問題なのか……。

「うーん、イメージを固定化させすぎているのかもねえ」

「そつか……えつ？」

フレアが、驚いて勢いよく振り返ると、ハリハリはシュウ……。

「あ！」

気付かなかつた。

「えつと、ハリハリはシュウ」と…

いたものは仕方ないので、フレアは驚くのをやめて話を聞いてみる。

「うん。完全にイメージが出来上がつてゐる所為で融通が利かなくな

つてゐるんだ。

もつ殆ど出来てゐるのに、自分でそれを否定しかねつてゐる

「……ええと?」

「100%じゃなくて、70とか80%で許してあげたら? つて  
コト。

俺の見たところ、フレアの魔力つて相当な強さだから。多少不完全  
で不安定でも、かなり実用的だと思つよ」

「えつ……「つん。

シユウ、得意そつだね」

「まあね」

そう言つた彼は、簡単にピンと立てた指先の上に金色の光でできた  
球体を浮かべた。それは少しもぶれず、宙を浮いてゐる。

「うわ、すごい!

小心翼翼ほど、コントロールが難しいのに。しかも光属性!..

フレアが無邪気に感動を示すと、シユウはちよつと得意げに微笑む。

「まあ、得意分野は色々だから。

俺、ひまだから練習みてあげよつか?」

「うん、ありがと!」

魔法訓練塔の、訓練部屋の中心に巨大な炎の渦が出来上がった。ぱっと消えたと同時に、フレアは笑顔で振り返った。

「出来たつ！ ありがと、シュウのお陰だよつ」

「出来る子は教えがいがあるよ」

「うわ……2時間も……。ゴメンね、付き合わせて」

フレアは時計を見て、しまつた、という顔をした。

シュウはそれを見て、安心させるように微笑む。

「最初に言つたけど、今日は仕事しなくていい日だからね。問題ないよ」

「仕事……か。情報部つて、どんな仕事してるの？」

「スパイから送られてくる情報の整理、近隣諸国の“噂話”的選別と真偽の調査。あと、地味な書類整理……まあ、新人はこればつかりだね」

「へえ、大変そうだね」

フレアの言い種に、シュウは噴き出した。

「他人事みたいに。

戦時に一番大変なのは戦闘部隊なんだから。戦時以外でも、情報部が戦闘部隊の協力を扇ぐコトもあるってウチの隊長が言つてたし

前半は当然の話なのだが、後半については初耳であった。多分、階級の高い……というか様々なところの訳が判っている人が行くのだろうなとフレアは考えた。だから、見習い期間の段階では話されないのだろう。

「炎属性の魔法なら、リア副官が詳しいんだろうな」

「えっ、 そうなの？」

初耳だ。頭髪の色がそれらしいと思つたが。

「アランク炎属性獣族の、馬型召喚獣が契約魔獣。すごく能力の高い召喚獣だね。あの人は、炎の騎士って呼び名もある」

「……く、詳しいね」

「情報部の資料を勝手に見る権限が出来たからね。他にも色々判るけど……。まあ、あんまり口外してると怒られるな」

「暇そつとしてたら、リア副官にアドバイスもらつたら？」

「そんな恐れ多い！」

シユウは本気で語りフレアを見て、思わずといった風にまた笑った。

「大丈夫じゃない？ フレア、あの人に気に入られてるよ。副官の業務は、セフィーロ副官がこなす事の方が多いみたいだし」

「それも情報部の？」

「これは、俺の観察結果」

フレアは曖昧な表情となつた。

「いやあ、後半はともかく……。

前半については、あたしに問題がありすぎるってだけじゃないかな？」

クーファの件を中心。

「もう？」

最近、驚くような事ばかりでしたらここか……。

その日の晩は、城内警備の担当であるから集合場所である2階渡り廊下へ行った。大きな窓がある渡り廊下は、城内のどこもそうであるように飾りといえば狼の頭を摸した燭台が並ぶだけ。自分が毎日を送る城の一部なのだが、真っ暗な廊下に狼が浮かび上がると、少しゾッとしてしまうのだった。

「遅くなりました」

「いえ！」

フレアはほんやり、今日の相方が来るのを待っていたが声を掛けられるとき背筋をピンと伸ばしてしまった。月明かりに浮かび上がる、綺麗な細面……クロウだ。

フレアは、この人はいつ休んでいるのかと思つ。時々、城内で見かけるがいつも仕事中。

部下に指示を出しながら歩いていたり、スタッタ歩きながらも書類に目を通していたり。そして、見回りも清掃も決して休まない。少年と表現したくなるほど、細いこの身体のどこにそんなエネルギーがあるのかと、感心してしまつ。

「リア副官からお聞きしました。資格取得、おめでとうござります」

「あ、ありがとうございます！」

クロウは柔らかく微笑むとすぐ」

「今日は南棟の1階から3階の見回りです」

と、どちらが次いか判らない調子で追加した。

「はい」

「そういえば、……異状があつた事はあるんですか？」

無言でひたすら歩いていたのに辟易してきた為、フレアは前々から思つていたことを質問する。

「ええ。僕は話を聞いたというだけですが……他国の密偵が見付かつた事があるそうです。

まあ、この場合、この軍とウォーレン大将軍の軍を攻略してしまえば他に畏れるものはありませんから。驚く事でもありません」

「最近は？」

「聞きませんね。しかし、貴重な情報などを大量に管理していますし内部密偵がいないと決めつける事は出来ませんから」

内部密偵といつ言葉に、フレアは思わず緊張した。いつもこれがみると、ソーシャはやはり軍なのだと実感する。……むしろ、ソシナ話

が無ければ大した緊張感のない日々。

学校に通っていた時の方が精神的に疲れていたかもしない。

「……疑われてる人とか、いるんですか？」

「僕は聞かされませんが。取り敢えず、今回の面接を通して入軍したあなたたちは全く心配されません」

「え？」

「エレイズ様の人を見る目は確かですので」

とにかく、エレイズは深い信頼を得ているようだ。上官の話を聞くといつもそれが伺える。

「見回りをしながらする話でもないのですが

と、断りを入れてクロウは話を変えた。

「来月から早くも、あなたを見習いから正規兵に昇格させる事をエレイズ様とリア副官はお考えになっています」

「ええつ？！」

ここは、真夜中の廊下であるという事はすっかり忘れて大声を上げてしまった。

「辞退は勿論、可能です」

「あ、あの……」

「はー」

「あたし、まだ軍の事これっぽっちも覚えてないんですけど」

クロウは頷いた。

「普通は1年以上を掛けでじつくりと覚えるものですから、特に説明などされませんので当然でしょう。もし、辞退の理由がそれだけというなら、心配は要りません。リア隊補佐官の僕が責任持つて説明します」

フレアは、これ以上クロウの仕事が増えても大丈夫なのかと余計な心配をした。

クロウは続ける。

「急で申し訳ありませんが、今週末までは返事をお願いします。出来る限り、リア隊執務室にておつになりますので」

「はー……」

そのあとは、大した会話も無く3時間が過ぎて交代の時間となつた。

「じゃあ、お疲れ様でした」

フレアが丁寧に語りつと、やはり

「お疲れ様です。おやすみなさい」

と、丁寧な返事が返ってきた。

「いいじゃねーか！ ょつ、出世頭つ！…」

「そんなこと言つとは、思つたのよね！」

翌日、クーファに昨晩の話をしてみると予想通り彼は大賛成をしたのだった。フレアが思うに、自分の召喚主が見習い兵というのが意識的にか無意識的にかは不明だが、気に入らないのだろう。

「まあでも、召喚成功と初級レベルの魔法使用可能つてところ下級兵の条件は満たした事になるのよねえ」

クーファは大きく頷く。

「むしろ、俺様を召喚したんだから飛び級で上級兵になつてもいいくれーだ！」

「だ・か・ら、あんたがランクドラゴンつて事は秘密なの…」

「それがなんだかなあ。Hレイズの奴、何を心配してんだ？」

腕組みして考え込んでいるクーフア。

「それは……」

「それは？」

「何でだろ」

「ほらな。今までならともかく、召喚士の資格を得た今、何の心配がある？ 単純に、物凄い才能の召喚士で通しても悪いこたあねえぜ」

フレアは思わず唸つた。

「でも、気安くHレイズ様に聞きに行く訳にはいかないし」

「戦時中でもねえんだ、暇してんだろー。俺が……幽閉されてた時も、毎食部屋で食つてたしよ」

「そういう問題じやないのよー。わっかんないかな

「わっかんないね！」

フレアは溜め息をついた。

「真っ赤な副官は？」

「リア副官？ うーん」

エレイズよりは小指の爪ぶんくらいは気安いが……。

「……………いつか聞いてみる」

「なるべく早くしなよな」

「うん」

クーファに急かされたものの、決心が着かないままズルズルと日々が過ぎる。だが、そうしていると下級兵昇格の件についての締め切りがやってきました。

「よし、下級兵になるつー。」

「よく言つたゼフニアーーも、あんまカッコイイ面倒じやねえけどな。  
下級つてとこがよ」

「これでも、とんでもない話なんだって。未だに信じらんない」

「グダグダ言わず、行つてこーいつ！」

フレアは緊張を既にしながら、リア隊の執務室に行つた。

「失礼します」

「どうぞ」

クロウの声が返つてきたので、ドアを開いた。

「ええと……」

何と切り出せばいいか迷つていると、クロウの方から

「どうするか、決めたのですね？」

と先を促してくれた。

「はつ……はい。

あの、あたし……正規兵にならせて頂きますー。」

クロウは微笑んで頷いた。

「その返事を聞けて安心しました。それで、正規兵に必要な軍の事を説明する役は当初は僕がする予定だったのですが。リア副官が請け負つてくださいましたので」

「ええつ?ー」

「明日の午前10時にまた、ここへ来てください」

フレアは驚くのをなんとかやめて

「せー」

と答えた。

リアに話を聞く機会が向こうからもつてくるとは思わなかつた。

予想だにしていなかつた大事に巻き込まれてこらしい。

翌日、午前10時。執務室へ行つたフレア。既にリアが待ち構えていた。

「よし、来たな」

何をするでもなく、椅子の背にもたれていたリアは勢いをつけて立ち上がつた。

「色々と昇級以外の質問もあるだろ？が。まとめて聞くから、ちょっと移動するぞ」

「は、はい！」

何でもお見通しらし……。

見習いの身分で、もはやお馴染みとなつてしまつたエレイズの部屋へ通された。

「あたしみたいなのが、ちよくちよく入つてて他の人達が怪しみませんか？」

フレアが率直な心配を口にすると、待ちかまえていたエレイズが小さく笑う。

「大丈夫。私、割と自室に人を呼びつけるから」

「あ……そつなんですか」

「先に、昇級の件を話すね」

エレイズは簡単に説明した。

「この軍の構成はもう判ってるよね？ 正規兵になると、全部で4つある部隊の仕事を部隊の枠を越えて任せられるようになつてくる。例えば、情報部隊の護衛役とか隠密部隊の人数調整とか……ね。特に、セフィー口の軍と合同で動く事が多くなるからそのつもりで。まあ、緊張する事でもないけど……」

また、正規兵は1番下が5人隊長という事になる。つまり、君には来月から4人の部下が出来るわけだ。一緒に入つた見習い連中の4人となると思うけど……もし、上下関係が嫌なら気にしないというのもアリだよ。各軍の隊長はセフィー口以外、私の事、呼び捨てだしさあ……

ちょっと不満げにリアを見たが、彼は素知らぬ顔。

「また、見回りなんかの仕事を取り仕切る立場にもなつてくる。城内図は、悪いんだけどなるべく早く暗記して。それから、テレパスの魔法を覚えてもらう。知ってる？」

フレアは頷いた。

「魔力での対話ですよね？」

「うん。見回りの時は、常に私にテレパスを送れるよつとして置いてほしい。で、何かあつたら即座に呼ぶようについて決まり。フレアなら、1日で出来るよつになるか」

フレアの事なのに、何故かエレイズが自信満々だ。

「これくらこだつけ?」

エレイズはリアを見た。

「ま、そうだな。後は、口で言つよりやつてみた方が早いな

「うん。ウチの軍、あんまり軍規とか厳しくないから、多少の事は『愛敬で済むよ。フレア可愛いし、その辺は大丈夫』

「ええつ?—」

『愛敬で済むといつに』も、エレイズに可愛いと言われた事にも「ええつ?—」であった。

「それから……『気になつてゐ事があるんでしょ?』

フレアは一気に、緊張感を持った。

「はい……。あの、どうしてクーファの事を……神経質と言つたら、言つ過ぎかもしませんけど、隠しておく必要があるんでしょ? もう、あたしは召喚士資格を得たわけですし。それと、以前から

将軍が仰ってる、『厄介な事』とは?』

エレイズは頷いた。

「当事者の1人だから……今から、極秘事項を話すよ。この軍では私と、副官2人と情報部、隠密部隊の隊長しか知らない話だ」

フレアは、予想だにしないほど話が大きくなつたようで反応が出来なかつた。

「ウラディスつて大将軍……判る?」

「は、はい」

貴族出身の大将軍で、実力で大将軍の位を得た内の1人。下級貴族なので、そんなに家柄が良いとは言えない。無論、平民と比べれば天と地の差だが。

「彼が、謀反を企んで動いている可能性が高いんだ」

「……は?」

「何年前から、彼がそれを意図して動いていたのかは判らないんだけど……。ウチの隠密部隊が先日、証拠となりうる情報を持ち帰ってきたんだ。彼は、実力で今の地位を得たわけだから、そんな事をする必要はないのに多額の賄賂を3人の能無し貴族大将軍に送つて。もう1人の貴族将軍……ラファインには手を出してないみたいだけど。まあ、あいつは清々しい程の清廉潔白人間だから無駄だと思つたんだろうね」

エレイズの発した清廉潔白人間といつ言葉は、悪口ではない。寧ろ、感嘆を込めているようにフレアには聞こえた。そして、そのラファイン将軍がエレイズ、ウォーレンと親しくしている唯一の高位貴族であると思い出した。

「あの、それがどう関係して……」

「謀反を起こすには、力が必要でしょ？」

「あ……、まさかー！」

フレアはエレイズの言いたい事を察して、そして顔色を悪くした。

「あいつは、恐らくこれから……どんな手を使ってでも優秀な人材をかき集め始める。特に、ラランクドラゴンを召喚できるような強者をね」

「……っ」

「お前が、クーラファンドラ・フレイム・ドラゴンを召喚できる実力を持つた者だとあいつが知つたらまず、狙つてくる」

リアが深刻な表情で言った。

「エレイズやウォーレン、それからラファイン、各軍の重役達は力ずくでも言つ」とを聞かせるのは難しい。しかしだ。まだ軍に入つたばかり、実戦の経験はなし。……なんていう黄金の卵を見付けたらそりやあ、ほつておかねえだる？」

フレアは頷くしかなかった。

「でもあたし、何を言われたって、そんな人に協力しませんし、この軍を離れようなんて考えません！」

「此の世には、禁術つてのがあるんだ」

リアの声がいつもより、低い。

「例えば、記憶の改変、精神の乗っ取りなどなど」

フレアは身震いした。

「だから、今は兎に角、君の力を隠す事が大事なんだ。それと、さつさと強くなつて高等魔術書の閲覧資格を得てもらいたい。君は今、下級魔術師だから。第3術書までしか閲覧権が無いからね……それだと、さつきリアが言つたような禁術への対抗魔術を知る事が出来ない。私が教える事も出来ないわけじゃないけど、それは違法だ。ちょっととした法に触れる事ならちよこちよこやつてるけど、こういうものは隠しづらい。私が全権剥奪にでもなつたら、それこそアウトだし。

判つてくれた?」

「……はい」

エレイズは、すっかり沈んでしまつてゐるフレアの肩に手を置いた。

「大丈夫。君が自分で自分を守れるようになるまでは、私達が君を守つてあげるから」

リアも頷いていた。

「ありがとうございます……」

フレアは一つ深呼吸して、気を取り直した。

「この事は、クーファに説明してもいいですか？」

「ううそりね」

エレイズは頷きつつ言った。

予想だにしていなかつた大事に巻き込まれてこるらしい。（後書き）

なんかシリアルになつてきてしまいました。  
悪い癖です。orz

導かれた結論には疑問もなべ。

「よお」

迎えに出て来たリアに軽く手を挙げて挨拶した黒髪に紫の瞳を持つ男。どこをどうとっても端正な顔立ちだが、表情の効果で気安い雰囲気に見える。リアよりも背が高く、引き締まった強さのつかがえるスマートな体つき。

「ジー」

「どうしてか、リアにはこつもの彼のこ愛想の良さとこつか、お気楽な感じがない。

「」の男 Hレイズと肩を並べる実力を持つ平民出身大將軍ウォーレンを相手になるとなると、リアはいつもこうだった。

「まーだ怒つてんのか」

呆れたよつとウォーレンはリアの顔を覗き込んだ。

「よく考えてみろよ！」

「あいつと2人きりになつて、口説いつと思わない男がいるか？？」

「たくさんいるぜ」

ふん、とやつぽを向いたリアは背を向ける。

「それではウォーレン大將軍、」此案内致します。  
くれぐれも間違つた真似をなさいませんよつ」

当てつけのように普段は使わない敬語で言つて歩き始めた。

「リアの奴、まだ怒つてんぜ」

エレイズの部屋に通され、椅子にビカッと腰を下ろしたウォーレン  
は彼女を見た。

「私も危うく、あなたへの信頼を失つといひだつた

ちよつと冷たい田でエレイズは言つた。……もう失つていそつた  
雰囲氣であるが。

「やう言つなつてー どうだ、あの時の続き……」

「リザを呼ぶよ

「勘弁ッー！」

反応は早かつた。リザとは、ウォーレンの面の面前である。

「で、本題なんだけど」

「変わつたガキがいるんだつて？」

エレイズは口止めをして、詳細を語った。フレアとクーファの事だ。

「まつ……そいつは驚きだな。

召喚未経験者が「ランクドラゴン」

「しかも、恐らく永久召喚だ」

「魔法書なら、ありつたけ読んだが。そんな例は知らんな」

「うわー

エレイズは少し残念そうに溜息をついた。

「理不尽だが、そのフレアってのがとんでもない才能を持つてた……で片付けるしかないんじやないか？」

「とんでもないといつても……

「ああ、その顔はわかる。

普通、1人の人間が持ち得る魔力量の限界を超えてる……「ランクドラゴンの永久召喚なんてな。

俺の契約魔獣が「ランクアクラードラゴン」なわけだが。その子の魔力は俺より何十いや、何百倍も強くなきゃならん。どうなんだ？」

「そんな感じはしない。

たしかに、強いことは強いけど。私よりも弱い。高く見積もつても、なりたての上級魔法使い

「何が何やら、だな。……つたく」

「会つてみる？ フレアとクーフア」

「……そうだな」

フレアはエレイズの部屋に呼び出される時の常より何十いや、何百倍も緊張していた。ウォーレン大将軍が来ているというではないか。

「リア副官……」

「んあ？」

「ウォーレン大将軍って、どんな方なんですか？」

リアはすると、顔をしかめた。

「魔法使いとしての実力は天下一品で、頭もサイコーに良い、が……」

「が？」

「女たらしのお軽いキャラ男だ。気を付けるよ」

「え……ええつ！？」

フレアが驚いている間に、エレイズの部屋の前に辿り着いた。リアが軽くノックした。

「入つて。リアは仕事に戻つていいよ」  
ちょっと不服そうな顔をしたリアだが、何も言わずフレアに軽く手を振ると去つていった。

「失礼します」

フレアが部屋に入ると、ドアを背にして座っていたウォーレンはぐつと上半身をひねつた。

「ふーん、本当に子供か……魔力も、うん、エレイズの言つとおりだな」

勝手に頷いたり、首を傾げたりしている。

「コレがウォーレンね、フレア。  
クーフア、出て来て良いよ」

エレイズが言つと、軍服のポケットからクーフアが顔を出した。

「へえ、お前がウォーレンか！  
ふんふん……ドラゴンの氣配がすんな」

「お、判るのか」

ウォーレンは少し目を驚かせた。

「俺の契約魔獣は、スウィンドーラ・アクア・ドラゴンなんだ」

「ほひ、あいつか！ 水属性とはどーも気が合わねえんだよなア」

「ふーん、そうなのか」

クーファの存在に一切戸惑わず、日常会話の調子で話し始めたウォーレンはやはり、ただ者ではないなとフレアは思った。

「見ても判らない？」

エレイズが言つと、ウォーレンはあつさり頷いた。

「だがあ前……ええと、フレア。妙な魔力だな？」

「……え？」

「なんつうか、2種の魔力が混在してるような。

誰か、とんでもなく強い魔法使いに魔力授与されたか？」

クーファとエレイズは顔を見合わせた。フレアはそれに気が付く。

「何か……」存じなんですか？ エレイズ様」

「クーファと以前に話したんだけど、君が持つ魔力と、ウォーレンがさつき言つた魔力は根っここのところが凄く似てるんだ。だから、突拍子もないことは承知で1つの仮説を立てた。それは、君の父親アークさんの魔力なんじゃないかって」

フレアは思わず、ぽかんとした表情でエレイズを見た。しかし、ウォーレンの方は納得した表情。

「成る程、アークさんか！」

「あの人なら……俺やエレイズの知らない魔法を知つてもおかしくない。SSランクの魔法書閲覧権を持つてた人だからな」

「え、それって？」

ウォーレンが説明する。

「SSランクの魔法書の閲覧権は、当然ながら俺もエレイズも持っていない。国家試験で最優秀成績を收め、魔法開発でも相当に優秀な成績を收めたと認められた者にのみ与えられる特権だな。魔法書なんて、閲覧可能なものを全て暗記してゐるようなレベルだ」

フレアは、それはそれは驚いた。

「……知らなかつた」

「お、俺もだ」

クーファも同じく、啞然とした顔をしている。

「だから、……どんな魔法なのかは判らないがフレア、お前に起つてゐる様々の不思議はアークさんが仕込んだ事と考えて差し障りないだろ。術者の死後も続く魔力授与、Sランクドラゴンの永久召喚」

ウォーレンはそう、結論付けた。

「父さん……そこまで凄い人だったんだ」

「ちなみに俺も今年、挑戦するがな」

と、ウォーレン。

「落ちちやえ」

「エレイズ、お前なー！」

「あ、でもウォーレンが受かれればアーヴィングの魔法書を調べられるのか。じゃ、前言撤回。フレアの為に頑張つて」

「俺の事はどうでもいいのか！」

「うん」

「ちよっと、待てよ」

クーファが、難しい顔(?)をして口を開く。

「俺は確かに、アークがその資格てえのを持つてたのは知らなかつた。けどよ、あいつの為人ならよおく判つてる。あいつは、決して戦いやらなんやらは好きじゃなかつた。

だから、そんなあいつが可愛い一人娘に、自分と同じ道を歩かせようと考えるか？ 母ちゃんと田舎でのびのび暮らしてくれつて願うような奴だとと思うぜ」

フレアは思わず息を飲み、エレイズとレインは顔を見合せた。

「理由、か。問題は、」

エレイズが首を傾げる。

「何か必要があつたって事だな。……自分が死んだ後を心配してた」

「まさか、ウラディスのことをそのままの顔から知つてた?」

エレイズの呟きに、全員がそちらを見た。

そして、脳裏に一つ……全く同じ仮説が浮かんだ。

「父さんを殺したのは、ウラディス?」

「その可能性は高い。陰謀を知ったからアーヴィングさんを殺したのか、逆に話を持ちかけたところ断られたから殺したのか。もしくは、計画の妨げになるからと殺されたのか」

ウォーレンが淡々と動機を挙げ連ねる。

「最初の可能性が高いね。

ウラディスの陰謀を知つたと同時に、いつか自分が殺される事も考慮に入れてフレアを守ろうとしたんだ」

「え? あたしを戦わせようとしたんじゃなくて……?」

「そうじゃない。」

多分アークさんは、自分に代わってクーファにフレアを守らせようとしたんだ。魔力の事もそう……。大きな魔力は、それだけで身を守るから

「凄い人だな」

ウォーレンが感嘆を込めて言う。

フレアはしかし、小さな声で呟いただけだった。

「そんな事するより、生きてほしかったなあ

部下を連れて見回り。正規兵としての初仕事。（前書き）

骨休めっぽい話ですね。

部下を連れて見回り。正規兵としての初仕事。

それから1週間後。くよくよと考えるのは性に合わないフレアは、すぐに気を取り直した。エレイズが保障した通り1日でテレバスを使いこなせるようになつて教えてくれたサラを大層驚かせた。また、城内図も殆ど間違いなく覚えたということで今日から見回りの代表を務めることになった。2人の新入り……つまり、同期と共に回る。

「あたしの事、呼び捨てでため口、でいいからね?」

フレアはそう前置いた。

「同期だしさ」

「いいんですか?」

ちょっと首を傾げたのは、小柄な青年。20代の始めくらいだろうと思われる。丸顔で、目もくりつとしているから平均的な身長なのだろうが、小さく見える。

「うん」

フレアがすぐ頷くと、その彼は小さく笑つた。

「じゃあ、そうするね。僕はロズ。よろしくお願いします、フレア  
隊長」

「うーん、隊長って慣れないなあ」

「俺はスペルグ。ビーザよろしく」

そう名乗った方は、ロズと違つて余り、隊長へのため口に抵抗を持つていないうだ。

ロズよりも頭一つは背が高い青年……年も、ロズより上だひつ。体格も、リア隊の者にしてはがつしりとしていて、よく日に焼けた顔は爽やかな印象。

「よろしく。……じゃ、行こうか。

今日は2階の東側一帯の担当ね」

フレンドリーな始まりであつたが、やはり初めて人の前に立つのでフレアも緊張している。まあ、何も起こらないだろう……と自分にこつそり言い聞かせるのだった。道さえ間違えなければ、大丈夫。間違えたとしても……初めてだから、まあ、確かにエレイズの言つたとおり“ご愛敬”で済むだろう。

「しつかし、すげーよな。俺達と同期でもつ、5人隊長なんてさ。召喚士資格も、持つてるんだろ?」

スペルグが歩きながら話しかけてきた。

「あ、うん……。何で知ってるの?」

召喚士資格を得たという事は、別に誰にも話していないのだが……。

「誰から聞いたつけなア。ほら、人の口に口は立てられぬって言つだろ」

「そつみたいね。エレイズ様が言つては、この軍で下級召喚士に任命されるより召喚士資格試験で下位召喚士の資格を得る方がずっと簡単なんだつて」

ロズは頷いた。

「ど」よりも……同じく平民軍のウォーレン大将軍の軍よりも、昇級試験が難しつて話だからねえ。こここの軍」

「年末に1回だけか」

「そつそつ。僕は挑戦も無理かな」

「俺もまだだらうな、うん」

フレアは2人の話を聞きながら、それは自分の事が噂となるわけだと思った。正規兵になつたといつ事はすなわち、下級召喚士に任命されたといつ事なのでそのロズが言つた昇級試験に合格したと同義なのである。

「嫉妬とかじやねえけど、フレア、ビツヤツてエレイズ様に認められたんだ?」

スペルグが言つと、ロズも興味深そうにフレアをじつと見た。

「ええと……。あたしにもよく判らなくつて。でも、魔力が強いとかどうとか」

「ポテンシャルか～。じゃ、俺らは眞面目に頑張るつきやないわな

「いや、フレア隊長だって眞面目に頑張つてるんでしょ」

「あ、わりわり。他意は無いよ」

慌てたようにスペルグが言うので、ロズもフレアも笑つてしまつた。笑つてから、すぐにここは眞夜中の城内であると思い出して2人も慌てて笑い声を止めた。

「じゃあ、お疲れ様でした。おやすみ」

「おつかれっした～」

「お疲れ様です」

3人は交替の時間となつたので、解散した、フレアはこのまま次の見張り担当者に結果報告をしなければならない。だから、次の見張り担当者達の集合場所である2階階段ホールに向かつた。

1人で深夜の城内を歩くのは、実はこれが初めてである。暗いし、少し寒い。また、燭台も全て狼の形をしており、その口から明かりが漏れているものなので余り安心できる明かりではない。慣れればどうということはないのだろうが、今はまだ静まりかえつた古城を

1人歩いているような、ちょっとした恐怖がある。クーファをポケットに突っ込んでくればよかつたかなと考えてから笑いそうになつた。それではまるで、ぬいぐるみのような扱いではないか。

そういう考え方をして気を紛らわしながら、2階の階段ホールに着く。先に来た代表者が待つていた。他の者はまだのようで、早めに来れたとフレアは少し安心した。

「2階東側担当、第1組のフレアです。異常なしです」

「了解」

答えたのは、フレアは見慣れぬ女性。

「あ、初めましてだ。私、リア隊第8部隊の隊長、アリー・シャ」

「リア隊第1部隊、5人隊隊長のフレアです。初めまして」

フレアがペコリと頭を下げると、

「あ、そつか！」

と言つて相手は近付いてきた。かなり背が高い女性である。フレアはぐつと見上げなければならなかつた。

「話には聞いてるよ。当代一の出世頭ね！」

「そ、そんな事は……。というか、誰がそんな事を」

「はは、リア隊長が言つてたよ~」

アリーシャは、暗がりでよく見えなかつたがそれでも随分と派手な容姿だなとフレアは思つた。軍の女性にしてはかなり濃いメイクをしていて、髪の色はこれまた派手な金。高いところで1本にまとめついて、はつきりした顔立ちが余計に気が強そうに見えてくる。

「あ、来た来た」

アリーシャは、じちらへやつてくる2人組に目をやつた。

「じゃあ、おやすみ！」

「お先に失礼します。おやすみなさい」

フレアが部屋に戻ると、クーファが枕元に丸まつて既に眠つていた。……どこからどう見ても、ペットのトカゲである。これが天下に名を馳せるクーラファンデラ・フレイム・ドラゴンであるとは誰も思わないことだらう。

女の子の休息。…… いんなのんびりしていいのかつり。（前書き）

小話つて感じでしょ うか。  
ガールズトーク（笑）

女の子の休息。…… いとなのんびりしててここのかっこ。

翌日、魔法の訓練をしていたフレアは最近、よく話すようになつた同年代の、1期先輩であるエマに呼ばれて振り返る。

「ねえ、フレア！」

「どーしたの？」

いつもは、フレアよりずっと、おじとやかな雰囲気のエマなのが、今日は大きな黒い瞳がキラキラと興奮の色に染まつていた。

「ウォーレン大將軍が数日間、滞在なさるんだってー。覚えるかなーあ」

「へーそつなんだ」

実は一週間前、慌ただしくやつてきて慌ただしく去つていた日に会つてこのフレアの反応はそんなものだつた。

「反応薄いー」

「あ、ごめんごめん！」

でも、何かあつたのかな？ この前も来てたのこ

「へーん……」

ぐぐっと首を傾げたエマ。長い髪がサラサラと流れる。いつも向

「エマって、ウォーレン大将軍、好きなの？」  
「えつ、すつ！？ いやあ、そんな、私なんかが……」  
「いや、そうじゃなくって」  
少々呆れたフレア。

「なんていうか、ファンなの？」

「あ！ そうそう……」

戦つてもお強くて、頭もよろしくて。とても端正なお顔で……はあ『うーん、女の子してるなア、エマって』

別に、フレアも色恋沙汰に興味が無いわけではない。ウォーレンのこと、たしかに格好いいと思つし。……しかし、エマのようになるとかといったら、ないだらうなと思つ。

「フレアって、あんまり男の人のこととか言わないよね？」

「うーん、そうだね」

「好きな人とか、タイプの人とかいないの？」

エマはこういう話が好きなのだ。というか、一期前……つまり、フレアたちが入るより前の入軍者たちには特に若年の者が少なく、1

0代の女といえばほんとうにヒマしかいなかつたのだ。それが今、フレアと仲良くなつてガールズトークのできる喜びを噛み締めているらしい。

「リア副官とか、クロウ隊長は？」

「うーん、リア副官はいい人だしクロウ隊長は綺麗だと思つけど」

騒ぎ立てる事ではない。

「クールなんだから」

「そつかなあ？」

ヒマは「ま、いいか」と、1人で結論付けるとフレアに両手を合わせてお願い、のポーズをとる。

「あのさフレア、ちょっとと、城内とかうひうひしてみない？ てか、付き合つて！」

「ウォーレン大将軍捜し？」

「えへへ……」

フレアは確か、2つくらい年上のヒマを見て、呆れたように腰に手を当てて溜息。

「ま、いいよ～」

「ありがと～」

2人で城内を歩く。同じ年代か、もしくは少し年上の男達がエマを見ると嬉しそうに挨拶していく。

「もてるね～、エマ」

「えつ、そんなことないよー」

本人の否定はさっぱり無視して、やつぱり可愛いもんなんアと自分で頷くフレアだった。

2人……というか、エマは運の良いことに庭園に望む外廊を歩いている時、ウォーレンとエレイズを見付けた。

「あつ」

エマがちょっと嬉しそうな声を上げると、先にエレイズが2人に気付いた。

「フレアとエマだ」

「ー」

2人は改まって敬礼した。フレアはともかく、エマはエレイズに顔と名前を覚えてもらっていたことに感動しているようだ。

「お、この前の」

ウォーレンも振り返つてフレアを見た。再度、低頭する2人。

「もしかして何か用事?」

エレイズが愛らしく首を傾げ、  
アは少し意地悪をしてみる。  
エマが慌てて言ひよどむ、と、フレ

「はいー。エマが是非、ウォーレン大將軍に」

ପାତ୍ରାନ୍ତିକ- ୧

「お目に掛かりたいと」

גַּעֲמָעָן .....

顔を真っ赤にして俯いてしまったエマ。

ほりまつー.

まごわらじでも無むれうな、女たらしのチャラ男（リア談）は、エマを上から下までよく見た。

「可愛い子ならいつでも歓迎だぞ」

「ふえつ、そんな、カワ……」

テンパつているエマ。フレアは大笑い。エレイズもクスクスと笑う。

「あ、やつこえば……」

フレアは聞いて良いか迷ったが、ダメなら、せべらかされるだけだと思つて質問した。

「わざわざ外で……何をなさつたんですか？」

「あー、俺がHレイズの部屋に入ると、Hレイズの可愛い副官が不機嫌になるから」「で喋つてたんだ」

ウォーレンがあつやり教えてくれた。

「リア副官、そんなに氣になさつてるんですか……」

「Hレイズに関するあこつの心配はもはや、病氣だからな、うそ

それからしばらく雑談した後フレア、そして幸せそうなHマが去つていくとウォーレンは物憂げにHレイズを見た。

「ものは次いでだから言つとくが

「何？」

「こつまで……過去に縛られたつもつなんだ

Hレイズは美しい瞳に、深い深い憂いを浮かべてからそれを閉じた。

「永久に」

初任務が言い渡された。主導権を相棒に奪われる気がする。

「うーん……

「何だよ、難しー顔しゃがつてー 似合つてねえぞ」

「五月蠅いなあ、もうー。  
これでいいのかなって……」

「は？」

クーファは首をひねりか上半身（せいつぶ）を横に折つてフレアを見た。

「そりや、あたしには何もできないけど……。  
ウラティスの事とか、気になるといふか、何かしなきゃいけない気がするといふか……」

クーファは、成る程、と言つてから頷いた。

「ま、確かに俺もエレイズやウォーレンの奴らは呑氣過ぎる氣がするな」

「まあ、エレイズ様の事だから何かしら理由があるんだろ？」「無策つて事はないと思つんだけだ」

「でたな、最近流行りのエレイズ至上主義」

「ヤナ言い方！」

フレアはほつん、と顔を背けながらも少々反省する気持ちも出て来た。確かに、最近、全てがエレイズ任せだ。軍に入るといつのは、そういうことなのか？ とも思つが。

「もしも、將軍達の考えが正しかつたら……あたしはビリするべきなのがな」

「そりや、ウラブディスとかいう野郎をぶつ潰す以外に無いだろ？ がよー！」

「でもそういうのって、トップの方の人が……」

そこで、ドアが叩かれたのでクーファは毛布の下へ飛び込み横畠でそれを確認したフレアはドアを開いた。

「久し振りだね～」

「サラ班長！」

フレアは田を驚かせた。

「突然だけど、明日出発の任務に来てもいいことになつたからー！」

「えつ」

「あんたはそろそろ実戦経験を積んだ方がいいっていう上の判断。セフィー口隊と合同出兵で、魔獣を使って犯罪を行つてゐるちょっとした組織の討伐。詳細はコレ読んでおいて」

数枚の書類が手渡された。フレアがそれを受け取るとサリは

「じゃ、明日はあたしも行くからね。みんなへねー

と言い、出て行った。

「クーファ、任務だつて」

「おう、聞こえてたぜ。……よーやく、俺の力が日の日を見るのは

だー！」

「た……戦えるの？ その、サイズで」

すると、クーファは腕を組んで胸を反らした。

「お前が試験やらなんやらでバタバタしてた時、エレイズに付き合つてもうつて“実験”したんだ」

「実験？」

「オウ。念のためにエレイズがガツチガチに防壁を張つた中で技を  
使ってみたわけよ」

「やしたら……？」

「やみつて、ビビビきして身を乗り出すフレア。

「エレイズいわく、100%近くじゃないのが信じられない威力！」

フレアは本当の本当に驚く。

「力、制限されてるんでしょ！？」

「だーから言つたろ？ 制限されてなかつたら、防壁なんて一切の効果なく、この城、いやこの地方を火の海にしちまうんだって」

「うわあ……」

しばらく、ポカンと口を開けていたフレアだが、こう言つ。

「じゃあさ、明日の任務頼むね！」

「任せときやがれってんだ！」

「一気に上級兵にまで昇級させてやる！――」

「いや、それは流石に……」

しかし、クーファはやる気満々。

「勝手な事はしないでよ！？」

「俺の方が、お前より実戦慣れしてるんだから大人しく見学しどけ、な？」

「うひ～」

どちらが召喚主か判らない。

集合時間の、朝6時より少し前にフレアは城の1階エントランスホールへ行った。“練習”といつ言い訳で片を付ける訳にいかないため、クーファはポケットの中でじつとしている。

数分で全員が揃う。ぐるりと見渡したサラは頷いた。

「時間通りね、結構、結構。

初めましてもいるから自己紹介するわね。

リア隊、第1部隊4班班長、サラよ。今回の任務の責任者を任せられたからよろしく」

全員が低頭した。セフィー口隊の者も皆、サラより階級が下の者らしい。リア隊についてはフレアは大抵顔を覚えている。同期の者も数名いるようだ。

「じゃあ行くわよ

先頭を歩くサラに続いて外へ出ると、人数分の馬が出されていった。

「乗馬は覚えやせられたよね?」

サラが新卒兵達を見て言つと、フレアも含めた全員が頷く。身体が小さいフレアには最初のつちはちょっとした苦役であつたが、最近少しづつ慣れてきた。

下級兵には専用馬などおらず、共用のものを使うのだがフレアはその中の一頭と仲良くなつっていた。今日も並んでいる、ジョンニーと

いつ黒い毛並みの馬。下級兵になつて増えた仕事の一つに馬の世話を  
があるのでが、その中で懐かれた。

ジョニーはフレアを見付けると血を近寄ってきた。

全員で20名の混成部隊は開けた旧街道を進んでいく。目的地には  
馬の足で3、4時間とのことだ。

優秀な戦士が良い上司であるとは限りない訳でしょ。

「ウラティアスは本当に動くと思つへ。」

「ああ、まあ間違いないね」

ウォーレンは瞳に聰明な色を宿して頷いた。

「セバスチャンが情報を掴み、ウチのプライドも確認した……。もはや、事実と言つても過言じやない」

「ふう、嬉しくない保障だな。

ラファインはなんて？」

「現王家を守るのが、自らの役目だと。まあ、つまりウラティアスとは敵対する気満々だ」

「ウォーレン、どうゆうつもつ？」

「は？」

エレイズは黒い瞳で紫の瞳を覗いた。

「あなたは、いや 私も、現王家には何の恩義も感じていない。  
國属戦士の名誉なんて言葉、無縁だし」

ウォーレンは頷いた。

「確かに王家を救つてやる義理はないが、……ラファインが孤立する事態は見過ごせないね。あいつにはかなり恩を受けてる仇で返すような真似は趣味じゃない」

「王派か」

ウォーレンは少し目を細めた。

「随分、率直な言い方だな」

「もう2極対立は始まつてると考えて良いと、あんたが言つたんだ。国王派と 貴族派とでもしようつか？」

「じゃあ、お前はどうある

エレイズはそれには直接答えず、懸念を口にする。

「問題は、アークさんがクーファを召喚出来るようにしておいたつて事だよなあ。

彼が、クーラファンデラ・フレイム・ドラゴンなくしてはウラティアスを止められないと考えた、ということだ」

「確かに、そう言えるな。

しかしなあ……。奴は貴族としては珍しく、実力と地位が同等な男だが、俺やお前より戦えるかといつと首を傾げたくなる。そんな奴に、Uランクフレイム・ドラゴン……」

「もつと調べないと。

うん、やっぱり私も王派だな

ウォーレンは、満足げに頷いた。

「可愛い部下に、親の仇かもしれない者達と手を取つて戦わせるなんて酷いし。  
それに……」

「？」

「カラディスは」の国を変えるんじゃなくて、壊す、そんな気がして  
きた」

ウォーレンはじつとエレイズを見てから、頷く。

「やつこつ勘はお前の方がいいからな」

「ラフAINとも近づいて内に話すこと」

「やっぱ、いいだらうな。

あこつとの間は京都に近づかるし、俺はまあ、その……」

「田原の行いの所為で、監視が厳しいんだよね」

「やつこつ」とだ。

取り敢えず、ラフAINを呼ぶのは俺が帰つたと思わせてからだな

「やつだね。仕込みは？」

「既に」

「その辺は、流石」

「惚れたか？」

「小指の爪の先程も」

「ちえつ」

＊＊

「リザ副官ー」

ウォーレンが城主を務めるコルドワーグズ城の執務室……本来、城主のいるべき室に副官のリザは「ここのところ缶詰め状態であった。

「何？」

苛ツとしたような声に、少々ひるみながらも重要な用件なので情報部隊員は

「失礼します」

と、中に入る。

不機嫌そうな顔で書類と戦つてるのは20代前半くらいの若い女。リザはきりつとした黒い瞳を入室者に向かた。

「阿呆将軍が何か言つてきた？」

「はい、その通りであります。

あと一週間はエレイズ大将軍のダークヒル城に留まる。また……こ

れは言えれば判るとおっしゃられたのですが、例の件は今日から頼む  
とのことです」

リザは大きな溜息をついた。きつく2つに束ねられた金髪を掴む。

「「」うちの苦労も知らず……つー いいわ、じゃあ次いでにベルに  
同じ事伝えとこて」

「かしこまりました」

リザは1人になると、天井を仰いだ。

「たく、この忙しい時に狙い澄ましたよつこいなくなりやがつて、  
あの×××将軍ッ！ 監査の連中が明日来るしをあ。もう、××  
×××、×××××！！」

乙女が吐くとは思えぬ暴言を吐きまくった。

「ローベルグ副官！」

わざわざリザに命じられ、ベルことローベルグ副官へ伝言に向かった  
者は、対リザの半分も緊張していない。

「なあに？」

振り返った男の顔を見て声を聞けば、それも納得。

顔も身体もぽっちゃりと丸っこく、どこをどうみても攻撃的とは思えない。そして、その見かけ通りの人物なのだ、ローベルグは。

「はい。大将軍からの伝言なのですが」

最後まで聞くと、ローベルグは苦笑した。平和的な坊ちゃん刈りの頭に手をやる。

「いのちの苦労は省みずだからなあ、あの人。

エレイズ殿からファイン殿のところへ逃げたいよ、ほんと」

「……はあ」

「まあうん、了解。さてさて、忙しくなつてきたぞ」

腹をぽよぽよと弾ませながらも、相当スムーズにローベルグは走つて行つた。

「てことです、ブライグさん」

「フフフ、実行か。ベル、スマートなイケメンになる心の準備はできてるな?」

「外見はともかく、喋り方がきついですねー」

「まあ、そこに立て」

副官に命令し、床に描かれた魔法陣を指したのは長い黒髪に白髪が交じつてきている年齢の男。ローベルグの上着に彼が2人分はいるのではないかと思える程に細い。だが、顔は優男と程遠い、軍人というよりも殺人犯で指名手配されていそうな凶悪な印象。彼はブライグ。ウォーレン軍に、ウォーレンが勝手に作った独自の部署、魔法研究室の室長。

人道的なものから人には言えないようなものまで、数多の魔法を編み出している。

これから使うのもその一つ。

外見を別の誰かの者に変える術……つまり、変身術といったところ。“ウォーレン”を用意して、監査の目を欺き、追求から逃れようという作戦なのだ。

「そういえば、ボクがいない説明は？」

「豚でも1頭、用意しどくから心配するな。フフフ」

「ちよつ、ヒドーー？」

ローベルグが人の好さそうな顔でビックリというか、心外というか、そんな声を上げるとブライグはさぞおかしそうに笑う。

「お前は1週間、有給使つて旅に出てる

「え、どこに？」

「そこはしちゃばつくれないと、捜しに行かれた時に面倒でしょう？」

「あ、そうでした」

ブライグはパンパンと手を叩く。

「んじゃ、やるぞ。緊張するねえ、記念すべき実験第1回だ」

—ええつ！？

ローベルグの悲鳴は気にせず、ブライグは床にかがみ魔法陣に手を当てて詠唱した。

「あ、あれ！？」大將軍、いつの間に帰りに？」

「もう、やだ！」

すれ違う兵がみな、驚いて“ウォーレン”……ローベルグを見る。このことを知っているのは上層部だけなのだ。

ローブルグがじきじきしながら、やつとのことで執務室にたどり着くべくやにやしたリザが迎えた。

「よくぞお帰りになられました、大将軍」

「リザーフ」

リザは極力近づいて、声を落とす。

「はいはい、そういうベルっぽい反応はダメよー。」

「あ……あひ

「ブツ」

リザは“ウォーレン”を執務室に引つ張り込むとドアを閉じた。

「あ～おかしい！」

「ひどいよ～リザ！ ボクだってやりたくてやつてるんじゃないんだからね？」

「わ～かってるって」

リザはしかし、本当に面白がってローベルグの腹を突きまくる。

「あはは、かたーい！」

「リザ、誰か入ってきたら一大事だよー？」

「ノックで判るわよ」

そして、嬉々とした表情でデスクを示した。

「さー 大将軍の仕事してくださいね～」

「あわわっ」

情けない声を出したローベルグは、リザによってデスクの前に押しやられた。元気よく、リザは執務室を出て行ったのだつた。

飛び級にも程があるやしょ「うむ……（焦）。

それから2日後。

「うんうん、監査の日は上手く謀魔化せてるみたいだな」

ウォーレンはエレイズの居城の一室で、ブライグの報告を受けていた。ウォーレンの魔力あつてできる事だが、この場所から「ゴルドワーグズまでテレパスを繋いでいるのだ。

「ウォーレン大將軍は少し見ない間に、低姿勢になつたと噂になる  
ぜ」

ブライグの声は、笑いを含んでいた。

「ま、丁度良いさ。その方が、奴さん達も俺に対して油断するだろうし」

「じゃあ、こっちの事は任せろ」

「助かる」

「それと、可愛いエレイズに手を出してエレイズ軍全てを敵に回さないようにな」

笑いながら忠告をしてブライグはテレパスを遮断した。

「今日の午後に、ラファイン大將軍が到着なさるようですが」

セバスチャンがエレイズの執務室に来て告げた。

「うん、了解……」

上の空とでも言いたくなる調子で答えたエレイズを、目を細め、首を傾げてセバスチャンは眺めた。

「何がありましたか？」

「色々ありますわ」

「……まあ、そうでしょうね」

エレイズは、深く溜息をつく。

「何人かのリア隊の上級兵から、フレアを上級兵にしてはどうかって提案が来てるんだ」

「それはそれは……。まあ、確かに彼女の力は異常ですね。しかし、それは余りにも目立つすぎるのでは？」

「私の懸念はそれなんだ。

ついこの前入隊した子を上級兵に昇級させたら、かなり目立つ。だけど、下級兵が一組織を一撃で壊滅させる力を持つドラゴンを召喚できるなんてのも目立つすぎる」

セバスチャンは頷いた。紫がかつた黒髪がサラサラと揺れる。それを耳にかけてまた、首を傾げる。

「いっそ、私の部下にしてしまいますか？」

「……それも考えたけど、彼女に君の隊の仕事は出来ない」

「人間的に？」

「そう、人間的に」

「実戦訓練をさせたのは、失敗だったのですかね」

「かもしれない」

先日の任務で、……言つてしまえば、クーファが調子に乗りすぎたのだ。リーダーのサラも吃驚の強大な力で、たつた一撃の炎で、問題の組織を建物ごと焼き払ってしまったのだった。

「あのね、仮説を聞いてもらつていい？」

エレイズは、疲れたように顎を両手の上に乗せたままセバスチャンを見上げた。

冷静沈着で通つているセバスチャンですら、危うく見惚れそうになつたものだ。

「……どうぞ」

「私が、クーファの力を見た時の話、したよね？　あの時は、そこ

までの力が無かつたように思えるんだ」

「それは、単純に召喚者が近くにいなかつたからでは？」

「それもあるかもしけないけど、もう一つ。クーファの力は、フレアが魔法使いとして力を上げるほどに強まつていくのかもしけないって」

セバスチャンは口元に、優雅に手を持つていくと暫く考えていたがやがて頷いた。

「可能性は、ありますね。調べてみない事には何ともいえませんが、召喚獣の魔力管理に召喚者の魔力が関係していくてもおかしくはない。いえ、そもそもおかしなことだらけなのだから……。アーク殿が、フレアの力が上ることにクーファの力が本来のものへと近付いていくようにしていたと考へても……」

「無理はない」

「はい」

「本来は、召喚時から……永久召喚であつても、召喚獣の強さは変化しないものなんだけどね」

2人はちょっとの間、黙り込んで同じ事について考えていたがそうしていても埒があかないでのセバスチャンは軽く一礼すると執務室を後にした。1人になつたエレイズはセバスチャンが持つてきた報告書をもう一度眺めると複雑そうな表情を浮かべた。いつも、単純な感情表現は余りしない彼女だが、それにしても複雑な表情だつた。

「だから言つたの!」……

フレアは、リアから現在、勃発している問題について聞きクーファをなじつた。

「いや、だつてよお。俺だつてあんなに力が出るとは思わなかつたんだつて!」

「それにしたつて、加減とか出来たんじやないの!-?」

「全力でやつても、限界値は高が知れてると思つてたんだよー。」

エレイズとセバスチャンが頭を悩ませていた問題である。リアは、思わず苦笑して渦中の少女とトカゲのようなドーラゴンを見比べた。

「ま、一応、口止めはしておいたから……」コトがそこまで大きくなることはない、はずだが。人の口に口は立てられぬつて言つしな」

「ですよねえ」

フレアは、同じコトを言つた同年代の部下を思い出していた。フレアが内密の内に受けて合格したはずの、召喚士試験のことをその彼らは当然のように知つていた。今回のクーファの「テタラメな強さについての噂もすぐに広まつてしまつた気がする。

「俺達の懸念は、実は一つだけだ」

リアは、話を改める。

「お前のその才能がウラティス一派にまで伝わって、連中がお前をあの手この手で利用しようとするんじゃないか、って」「ト」

「……はい」

この前の結論からすれば、ウラティスは……またはその仲間は父の仇である。洗脳されたとしても手を組みたくなどない。また、今までなら自分と力を制御されたクーファなど何の役に立つ？と思つていたが、今回の実戦任務でその疑問は払拭されてしまった。ただ、一度クーファが……ろうそくの火を消すくらいの気安さで息を吐き出すと、その灼熱の息で鉄製の大がかりな建物が全焼し、中の召喚獣は魔力に当てられて消え去り、人々も意識を失つたり、酷い者は当然ながら大やけどで死亡した。

「あ……あの」

フレアは困った挙げ句、言つ。

「リア副官は、そのお……」

「どうすりやいこと思うか、か？」

「はい」

無責任だらうか。しかし、自分一人で決めるにはどうしても重すぎる。

それは、相手も判つてくれているようだ。自分は上官に恵まれたとつくづく思う、フレアである。

「俺の個人的見解だが、もしもウラティスがウチの軍から優秀なを引っ張り出そうと考えてるんなら既に奴の手の者が紛れ込んでいてもおかしくない。また、紛れ込んでいなくとも精神をばれない程度に操られていたり、禁術だが何キロと離れた場所の会話を盗み聞きするのは不可能じゃねえ。つまり、お前のコトは知られていてもおかしくない」

「あ……」

「だから、じいつはエレイズにも言つてみるつもりだが定石通り……といふか実力通りにお前を上級兵に上げちまってウチの軍全体に説明しちまうのが良いと思う。包み隠さず喋つてしまえば、寧ろ噂は収まる。真偽が定かじやないから、みんなあちこちで噂する」

クーファも頷いた。

「てが、その方がスッキリするな。

それに隠し事を持つてると、こぞとこう時に面倒だぞ。特に軍の中ではな

彼は、よく考えれば何百年、いや数えるのもくだらない程、昔から軍やら何やらの中で人を見てきたのだという事をフレアもリアも思い出した。いつも迂闊な発言や行動の所為で忘れがちだが……。

「お前はどうだ、フレア？」

真つ赤な髪の上官と、真つ赤なドラゴンに見られたフレアはちよつ

と固まつてから、頷いた。

「リア副官の……それからクーファの、言うとおりだと思います。何人かは、もうクーファの事を知つてしまつた訳だし。それに、確かに隠し事はよくないし」

リアは大きく頷いた。

「よし。じゃあ、ここ3人は取り敢えず意見が一致つて事でエレイズに伝える。  
まあ多分……エレイズもそう考へてるだらうし、フレア、上級兵に飛び級する心の準備しとけ？」

最後は、冗談めかされていたがフレアは笑つてゐる余裕を持ち合わせていなかつた。

『てか……クーファの言つとおりになつひやつた！？』

自由でのんびり楽しくが売りの情報部隊だ。他隊は頭を殴まれる。

フレアの、上級兵任命は来週行われる事に決まった。フレアの決心、クーファとリアの意見をエレイズと他の3名の隊長達が了承したのだ。

「はーあ、フレアはもう上級兵かあ。格が違うねえ」

情報室で、隊長からフレアの話を聞かされたシユウは天井を仰いだ。「あら? 私も、あなたの了解があれば早く出世してもらいたいんだけど」

にっこり微笑みかける、情報部隊隊長であるロザリア。長い金髪をふんわりと頭頂部でまとめていて、表情も柔らかい。外出を殆どしない事で有名な隊長であるだけあり、深層の姫君も吃驚な白い肌。優しげな栗色の瞳を半分程閉じて、シユウを眺めるよつこじしている。

「それは困りますつて。隊長、事情知つてらつしゃるべせー

どこの隊よりも情報部内の上司と部下のやり取りはお気軽だ。シユウやイアリスといった新米中の新米でも同じような口の利き方をする。

「うーん、残念。そつそつ、ガーディにお菓子買つてきてもらつたんだけど、食べる?」

「あ、頂きます」

職務中に、焼き菓子を頬張っている隊も他にありそうにない。が、ディというのは、ロザリアの副官の名前である。ロザリアとは打つて変わった、真面目一本の老紳士。しかし、紳士的過ぎて女性の頬みを断れず、悪気のないロザリアの副官というよりパシリにされている。

「また、のんびりしてゐるし。」

そこへ入ってきたのはイアリス。ロザリアとシユウはすっかり、仕事よりもお茶会に重点を置いている状況であった。

「ガーディさんと私がセバスチャン隊長から怒られるですからね！ ホラホラ、働くつ

情報部と隠密部は共同で仕事を持つ事が多い。しかし、ロザリアが追いつめられないと仕事をしない性格で、几帳面で仕事は一日でも早く片付けるセバスチャンとかなりの齟齬をきたす。だが、文句を言つても全く効き目がないためセバスチャンのお小言はガーディと最近情報部に増えた、話の判る新人イアリスに向くようになつたというわけ。

「イアリス、苛々してる？」のクッキー、牛乳をたくさん使つて  
るからカルシウムが多いこと思つの」

「あ、頂きます……じゃなくって……」

一怒になると可愛くないよ、イアリス

「シユウ、お黙りつ」

頭を抱えるイアリス。

ロザリアは「これが本来の性質なのだが、シユウはそれに便乗しているといふとか悪ノリしているだけというのが判りきっているだけに苛々するのだ。

『2人揃つて、どうして情報部の仕事できる人つてこいつなの？？』

「とにかく、これ見てください」

イアリスはずいっとセバスチャンから受け取つてきた書類を、ロザリアに見せた。

「あら…… 大変」

ロザリアも流石にクッキーを食べるのをやめた。シユウも身を乗り出して一緒に眺める。副官でもないのに、隊長宛の書類を断り無く見るのはシユウくらいかもしない。

「まあ、判り切つてたことではありますね」

シユウの言葉にはロザリアとイアリスも頷く。

「でも、形として出て来たのは初めてだからやつぱり大事よ。ロザリア隊長、隠密部と共同で諜報部隊を組織することになりましたから、御指示お願いします」

「うん。じゃあ、シュウ、行ってみる?」

「はーー」

「あと、ガーディに行つてもらおうかな。じゃあシュウ、その旨セバスチャンに伝えてきて」

出行行くシユウの背中を見送つているロザリアを見て、イアリスは何だかんだ言ってこの人は流石だと思うのだ。セバスチャンが各隊2名ずつの4人部隊を作ると言つたことをイアリスが説明する前に、書類の内容から任務内容と必要人数を導き出したという事だ。それから、他の隊の者が見たならシユウを選んだのは、いい加減な判断だと思うだろうが、違う。シユウの実力は、副官のガーディと並べて何ら遜色ないのだ。本人が病的なまでに、自分の実力を隠しているものだから情報部でも知る者は少ないのだが。

フレアは、ひたすらに何をしているかと言うと過去のリア隊任務記録を読みあさっていた。また、クロウに時間がある時は彼の講義。上級兵として動く為のイロハを学んでいるのだ。

「はあ、100人隊の隊長だなんて……」

フレアはがつくりと頭をうなだれていた。

「いいじゃねえか! 部下は多けりや多い方がいいだろ」

「良くないわよ。あたしより、ずつと戦歴の長い人だって中に  
はいるんだよ？？」

「それを言つなら、エレイズやリアだつてそつだろ。あのクロウつ  
てのも若いし」

「うん……それは確かにそつなんだ、けど」

上級兵とは、すなわち100人隊以上の隊長の事なのだ。また、部  
隊長も全員上級兵なのだが現在、欠員が出たわけではないのでフレ  
アがいきなり部隊長に任命される事はない。班長は中級兵であり、  
フレアはそれをすつ飛ばして100人隊長となるわけだ。前回の任  
務で大変そうだなあと思った、サラの仕事よりもよっぽど大変で複  
雑な仕事をする事になつていぐ。クーフアは、

『ま、どんな仕事でも作戦も計画も関係無しに俺様がぶつ瀆せばい  
い話だろ？ 心配ないない！』

などと言つていたが。そう言つ問題でもないようだ。任務遂行が勿  
論、最重要事項なのだが任務の中で下位兵に経験を積ませてやると  
いうのも大きな目的の一つであるという。また、その任務の中で、  
言つてみれば今回のフレアのように現在の地位以上の実力がある者  
を見付けたらそれをチェックしておくのも隊長の仕事だそうだ。自  
分の事にだけ構つてゐるわけにはいかないというわけ。

## 大將軍達の話し合い（前書き）

時系列が狂つて、済みません……。投稿順を間違えたので、苦肉の策でした。

## 大將軍達の話し合い。

時間は、前日に戻る。

ダークヒル城に、ラファイン・ディオ・バーフォンハイム大將軍は時間通りにやつて來た。しかし、それは彼の狙いであつてエレイズやウォーレンの勧めでもあつたのだが、彼の簡易な服装を見る限りこれがこの国きつての大貴族バーフォンハイム家の長男だとは思われないのである。黒い質素なロングマントの下は、大した飾りもないが上品な白いシャツと革製の乗馬ズボンという出で立ちだった。

それでも、顔を見れば“ああ、これは高貴な人なのだな”と誰もが感づいてしまうような雰囲気がラファインにはあつた。流れるような黒髪は、品良く整えられていて茶色がかつた黒い瞳は温和そのもの。一見するとほつそりした優男であるが、魔法にも武術にも優れた立派な大將軍である。

「お待ちしております」

そんなラファインを迎えたのはセフィーロ。敬意など知つたこっちやないリアではなく、セフィーロを迎えた方が良いとエレイズは判断した。とはいっても、ラファインはこれまた大貴族には珍しく身分やらに五月蠅くない人物であつて、彼自身が他人に対して低姿勢なほどである。

「わざわざ済まない」

にっこりセフィーロに微笑みかけた。セフィーロの方は仏頂面で（

不機嫌なのではない。彼は表情を作るのが大層苦手なのだ（一礼する）

「それでは、」ちりへ

とエレイズの執務室へ案内した。

「エレイズとウォーレンは、どうするつもつなのか聞いているかい？」

ラファインが廊下に人気が無かつたから、セフイー口に小声で質問すると相手は首肯した。

「お一方共に、有事の際は国王陛下の御為に兵を動かされる心づもりでいらっしゃいます」

「そうか」

どうやら、ラファインの緊張のようなものが解けたらしい。2人の友と、戦う事にならずに済み、ほっとするのは当然の事である。

セフイー口がドアをノックすると、エレイズの返事が返ってきたのでドアを開いた。

「やあ、久し振り」

「本当に。ウォーレンはともかく……エレイズは、1年振り以上か

エレイズは、そうだねと頷いてからセフイー口を見た。

「じゃあ、戻つて大丈夫だよ」

「失礼します」

「さてと、こここの3人は取り敢えず同じ事を考へてるわけだが」

ウォーレンが2人を見た。

今、3名の大将軍は執務室の小会議テーブルを囲んでいる。

「セフィー口に聞かされた時は安心したよ」

ラファインは目元を緩ませた。

「まず、事実の確認をしておこつか」

エレイズは紅茶を口に含むと、告げた。

2人とも頷いた。

「判つている事のうち、確実な事はかなり少ない。

ウラディスがこここの3名以外の大将軍を抱き込んで、反乱を起こそうとしている事。その為に、国内どころか国外からも優秀な人材をかき集めている事も確認できた。また、これは昨日はつきりしたばかりの、セバスチャンの持ってきた情報だけど王城内の文官にもウラディスに与する者がいるようだ」

ウォーレンはそんな事だろ？と思つた、といつ表情であつたがラフAINは明らかに憤慨してゐるようであつた。

「その代表的な者が、ダグラス」

「宰相ダグラスだと！？」

思わず叫んだラフAIN。ウォーレンも流石に目を驚かせた。

「何故だ？ 現状に不満があるから起こすもんだろ、反乱つてのは……。宰相なんて地位に何の不満があるってんだ？ ラフAINに睨まれそうだが、率直に云つとこの国を動かしてるのは王じやなくてあいつ、ダグラスだ。こんなにも重用されてる文官は、他にいないぞ」

「推測しかできないから、動機については放つておこう」

エレイズはそう斬り捨てた。

「兎に角、事は我々が最初に見当を付けたよりもどんどん大きくなつていつている。ウラディスは最近、自らの軍の大変革を行つた。身分で雇つていた貴族連中を下級兵に引き下ろして、平民だろ？と移民だろ？と武力、ただそれだけで人選を行つて軍の上層部を固めている」

「それで、どう動く？」

ウォーレンは言った。

「残念ながら、向こうが行動を具体的に起さない間は動けない」

エレイズの言葉にラファインも頷いた。

「証拠とはいっても、我々の身内が集めたものばかりだからな。でつち上げと言われば、それまでだし……また、逆に我々が反逆者扱いわれては話にならない」

「そういう事。

だから、今できるのは見張る事だけじゃないかな。結局。そして、一秒でも早く連中の動き出しを確認して、対策に移る。

嫌な話、ウラディスの居城はそうでもないけど、その味方に付いた大将軍達の居城はラファインのところと、向こうを張る程、王城に近い。大貴族と呼ばれるのがいるしね。だから、第一の防衛線はあんただ」

エレイズはちょっととラファインを見た。当然、とこう風に相手は頷く。

「だが、限度があるだろ。それに、王城内にだつて敵はいる。中から始められたら事だ……やはり、出来る者を王城内に忍び込ませておく方が良い」

「だが、暗殺をするならともかく、止めるとなると……。実行者より相當に力が上でなくてはならない。そうすると、各軍の上層部だが……それでは顔がばれている」

そして、ウォーレンとHレイズは顔を見合せた。

「おー、Hレイズ」

「……多分、同じ考え方」

「何だ？ 説明してくれ」

置いてけぼりのラフアインは困ったよつたな顔をした。

Hレイズは、ざっと説明した。……フレアの事を。

「成る程……。しかし、いくら実力があらうとも20に満たぬ少女なのだから、些か重すぎる役目ではないかな」

「すぐに、という訳じゃないんだし。まだ、当分は動かないでしょ？」

これはウォーレンに意見を求めたのだが、彼はすぐさま頷いた。

「むこうさんも、俺らが敵に回る事は前提の上で動いてる。どんな手を使つつもりかは断言できんが、俺達の力を越えたといつ確信を得るまでは動かないだろ？」

この国の3強を敵に回すんだ。準備には相当な時間を掛けてくるぞ。長丁場になるな」

「だから、やつを黙った子を上級兵にして鍛える期間は充分に見る。

賛成してくれないかな」

「……任せよう。どう考へても、お前達2人が今の状況をよく考へている。私は正直、まだ……そんなに好いていなかつたとはいへ朋輩と呼んだ者達が主君を裏切らうとしている現状を信じたくない気持ちが強いようだ」

「ま、ある意味、その面倒くささがお前だからな」

ウォーレンは莫迦にするといつよりも、愛情を込めて自嘲的な溜息をついたラファインを見た。

新たな任務に吃驚したんだけど、2人の同行者にも吃驚だわホント。

フレアの上級兵任命式当日。式とはいっても、大袈裟なものではない。集められるのは上級兵のみだから隊長達も含わせて50名をやや割る。それでも、今まで見上げると首が痛くなるような場所にいた人々が自分一人の為に集まっていると考えると、右手と右足が同時に出ていた。

ここは、氷晶の間と呼ばれるダークヒル城の最奥部。名の通り、壁一面は涼やかな青色で教会の如く並ぶ長椅子は氷のように透明な素材で出来ている。床もまた、ガラス質の為、初めて足を踏み入れる者はその輝きに戸惑うかもしれない。氷晶の間は、たつた1つの公式行事用の場所である。上級兵以上の任命式から、大会議や…前回のラファインの場合は親しい間柄であつたからエレイズの執務室を利用したが…大将軍またはそれ以上の地位の者の公式訪問を受ける場合も使われる。

フレアも、初めてここを訪れる者の例に漏れず、まさか土足厳禁と言われるのではないかと考えて立ち止まってしまったが、それを感じ取つたらしく半笑いのリアに背中を押されて中へ入つた。

既に、氷晶の間の奥にある壇上にはエレイズが控えている。彼女も、他の者も全員…当然フレアも…軍服を着ている。

「んじや、達者で」

リアは、半笑いしたままセフィー口の隣…最も壇上に近い副官用席についた。フレアは1人になり、ゆっくりと前へ歩き始める。クーファは連れてきていな。実は、今日の事で一番時間を掛けた話

し合いがクーファをどうするか、であった。フレアと同時に紹介してしまったという意見もあるにはあった。しかし、やはり、永久召喚の件は伏せておこう、クーファはフレアの契約魔獸ということにしておこう……というので話が纏まつたのだった。

「これより、上級魔法兵任命の儀を行つ」

エレイズが告げた。慣習に則つて、厳肅な空氣で全てが行われる。

「魔法戦闘部隊第一部隊第4班所属フレア、前へ」

「はい」

壇上に上げられるフレア。

「レミュエル王家に仕えし大將軍にしてダークヒル城城主エレイズ、この者を100人隊隊長である上級魔法兵へと任命する」

膝を着いて低頭したフレアは間をおいて立ち上がる。そのフレアに、エレイズから魔法杖が与えられる。

これは、まさに慣習以外のなものでもない。太古の魔法使いが、身分の証のために持ち歩いていた木の棒。太さや長さは様々であるが、今フレアに手渡されたのは小枝くらいの細さであつて、フレアの腕半分くらいの長さ。木を削つて創られたものであるから表面は多少ざらついてしている。

それから、フレアの新たな所属が発表される、実はフレアも『聞いてのお楽しみ』とエレイズのこの上なく愛くるしい笑みにはぐらかされて聞いていないのだ。

「今日より、魔法戦闘部隊第一部隊第4班所属フレアは魔法戦闘部隊第零部隊所属とする」

俄に、ざわめきが起こつた。リアとセバスチャン以外が全員、- - あのセフィー口でさえ - - 目を丸くしていると言つて過言でない。

第零部隊というのは、簡単に言つてしまえばスパイ専門部隊。王城に潜入させる為にフレアを上級兵にしたのだという過程を知るのは、決定を下したエレイズとセバスチャン、事前に話を受けたリアのみ。フレアは、周りが驚いている事に驚いているようなものであつた。何が起きているのか、第零部隊というのが何なのか、さっぱり判らないのだ。しかし、今この場でそれを質問する訳にはいかないので説明された通りに杖を捧げるよつにして膝を着き、頭を垂れる。

「副官……」

「判つてゐる。説明するから、クーファとエレイズの私室に来い」

リアは式の後、疑問だらけの表情で自分を見たフレアに言つた。

「わ……判りました」

\*

「第零部隊つていつのはね」

エレイズはすぐにやつてきたフレア、それからクーファに説明をした。

フレアはただ驚き、クーファは怪訝そうにエレイズを見つめる。

「なりたてほやほやの、素人上級兵を就ける役職じゃねえよな。何が狙いだ？」

そもそも、俺様の力は屋外の戦闘向きだぜ」

エレイズは頷いてから、先日のウォーレンとラファインそれからセバスチャンとのやり取りについて説明をした。

「つまりだ。フレアを上級兵にした理由の一つは、これ以上、尾ひれの付いた噂を巡らせるより事実を突きつけた方がましだという事。もう一つがそれって事か。

王城に誰か優秀な連絡係、そもそもっていざといふときにはウラなんとかの手の者を相手に出来る部下を潜ませたい。ところが、ウォーレンとラファインって奴のところの実力者の顔は王城の連中に知れてる。で、フレアしかいない、と」

「全部説明してくれたね」

エレイズは言った。

「そして、これは正式発表を終えた命令だからね。行つてもうひとつ……王城に」

フレアは思わず、息を飲んだ。

「あたしと、クーファだけで……」

すると、エレイズは小さく笑んだ。

「そんなスバルタは、流石にしない。2人、君と一緒に行ってもらう事が決まってる。

どちらも、よく知ってるはずだ」

そこで、タイミングを計ったかのようにノックがされた。

「失礼します」

まず、優雅に一礼したのはセバスチャン。そして後ろに……。

「ジヨイドさん！？」

「やあフレア……いや、フレア殿。お久しぶりですね」

「やめてください……え、まさか」

フレアは大きくエレイズを振り返った。

「彼が、1人。もう1人も来るはずなんだけど」

「彼女が時間通りに何かを成し遂げたなら、奇跡です」

セバスチャンが美しい顔を微妙にしかめて言った。その後、不満そうな……しかし、穏やかである声が聞こえた。

「ぎりぎりだけで、締め切りを遅れた事はないわよ」

こちらも、セバスチャンと同じく、フレアが今日の式典で初めて顔を見た情報部隊隊長ロザリア。そして背後には彼だ。

「いやあ、おもしろい揃い方をしたね」

「シユウー。」

一風変わった新人三人衆が見事に揃い踏んだわけである。

位が上がつていいくにつれて、果たして「これは適職だったのかと考えてしまつ。

「「」こちらとの連絡のやり取りはショウを中心に宜しく。光属性の蝙蝠を召喚出来るんだつたね？」

エレイズが見ると、彼は深く一礼して応じた。

「王城及び、近辺の同行についてはジョイドとフレアで協力して探りを入れてもらいたい。明日にでも行って貰うわけではないから、今日から一ヶ月程度フレアは隠密部隊で研修を受けてもらう。その間に方策など決めて……ジョイド、君になら任せて大丈夫だよね？」

「おや、随分と高く買われているようですね。  
しかしあま、ご期待には添えるかと」

エレイズはにつこつ微笑んだ。

「じゃあ、情報部の2人、残つて。他は即座に対応について

「御意」

セバスチャンが代表して答へ、全員が丁寧な一礼をすると退室した。

「シユウ、王城に入るに当たつて……どうする?」

「どうやる、とな？」

聞き返したシユウだが、何の事を言われているか見当が付いているようだった。

「君の出生を明らかにしておく？ それとも、謎の家出少年で通す？」

「うーん、後者が希望なのですがね。

顔見知りも王城には多いかもしません。他人の空似で通せない事もありませんが……妙に勘ぐられても面倒ですか？」

シユウとフレイズが揃って首を傾げたところ、ロザリアが口を挟む。

「偽装身分証明書なら、2日あれば製造できませんよ。何なら、フレアちゃんと同じく君のモノも」

シユウは声を立てて笑う。

「ボク、隊長のやうに大好きです！」

「私も好き。じゃ、その方向で行く？ 名前は別に偽装にする」とはないね。幸いどれも珍しい名前じゃない」

「それと」

シユウは、再び首を傾げた。

「どうやって、王城に雇われればいいんです？」

まだ聞いてませんけど」

「セバスチャンが既に手を打ってくれてるんだけどね。  
重臣……文官の1人を買収した。その者に君達3名を紹介させると  
いつ手筈」

「幾りで？」

田をきらきらせるシユウ。

「うーん、乞食が大貴族になれるくらい」

「そりや凄い」

「裏切られる心配はありませんの？」

ロザリアの質問に、エレイズは愉快そうに笑った。

「セバスチャンが、只、金を払つ訳がないじゃない」

「？」

「しつかり、命も握つてゐから」

ロザリアはちよつとあきれ顔をして、シユウはさぞ楽しそうに笑つた。

それから、一週間経つた。フレアは、隠密部の資料室に缶詰め状態である。もともと書物を読むのが苦痛でないタチだから、まだましだった。もしこれが文字嫌いの勉強嫌いであつたら……ストレスで大変な事になつていていたかもしれない。

「ジェイドさん……まだ、あるんですかあ

そんなフレアでも、精神的にへとへとになつてきた。

「一ヶ月の時間があるからねえ。あと3日はこここの住人でいてもらひよ」

「うひうひ

「それで、セバスチャン隊長による口頭試験があるからね

「セツ……セバスチャン隊長ですかっ！？ そんな、顔見ただけで緊張してテストどうじゅ無いですよ

フレアが率直な感想を述べると、ジェイドは大笑いした。

「はははは、いや、失礼。

まあ確かにねえ。あの人の外見は、喜ばしい方の意味で一種の凶器だから」

「そりですよ。エレイズ様は、最近ちょっとだけ慣れてきましたけど……」

「美人は3日で飽きるというね」

「こやこや、3日じゅあ無理です。3週間は必要ですって」

フレアは自分で頷きながら言った。そして恐らく、男性であるという事もあってセバスチャンに慣れるといつ事は出発するまでにはなりそうもないなと思われた。

「隠密部隊って……」

「ん？」

「なかなか……その、凄い事してますね。あたし時々、リア隊の任務でも何だか残酷だなあとか思う時があつたんですけど……そんな事言つてられないんだなつて思つちゃいます」

「だらうつね」

ジョイドは頷いた。

「まあ、君みたいな純粋で可憐い女の子はそこまで慣れてしまう必要は無こさ。ただ、驚かず、困惑わずに僕の指示に従つてもうれるようになつていて貰いたいと……それだけのためだからね」

フレアは複雑な気持ちで頷いた。

「まあ、そなんじょつけど……」

だつたらあたし、居る意味はあるんじょうか？」

「恐らく、僕とシコウを合わせたよりも君の方がずっと戦力になるからね。相手が武力行使に出た場合、君を頼る事になるわ。そして、それは間違いなく起こる事であるとフレイズ様もウチの隊長も見て

「いらっしゃる」

曖昧に頷いたフレア。

ジョイドの言つ通りだとしても、それはそれで負担と感じてしまう。自分に少し嫌気が出て来た。身を守る為に入つたといえる、『軍』。そもそも余り、戦いに向いていない性分だったのだとこの所、実感し続いているのだった。数々の任務で、クーファの力に頼るだけではいけないと自分で鍛えた魔法を使って戦う機会も増えてきた。その時、その時は夢中だから他のことを考えている余裕も無い訳だが、戦いが終わると微妙な不快感が胸にこみ上げてくる。

『そういうば、クーファ……父さんも戦いは好きじゃなかった、つて言つてたつけ』

だとしたら、アークは何の為に戦つていたのだろうか？ 話してみたかった……。

「どうかしたかい？」

「あ、いえ……何でも無いです」

ぼうっと考え込んでいたので、ジョイドには何か思い悩んでいるように見えてしまったようであった。ちょっと心配そうな顔をさせてしまった。

「軍人なんだから、戦いには慣れないとな、つて」

「ああそつか……」

「はい？」

今度は、ジョイドの方が考え込むような顔となる。

「いや、ね……。フレアはまだ“その段階”なのかと思つて」

「はあ」

「僕は随分前から、人を殺しても貶めても、何の罪悪感も感じなくなつてしまつていてね。隠密部隊としては褒められた性分かもしれないと、軍を一步でたら、恐るべき性分だよね。  
戦いに慣れても、人殺しには慣れない方がいいよ」

フレアは思わず相手の顔をじっと見たが、特に感情は見いだせなかつた。

周りはみんな敵だらけの王城に潜入したと思つたら…… IJの人は？

任務開始……つまり、王城への出発の日となつた。

「私やウォーレンが行く事は殆ど無いだらうけど……ラファインはよく王城に呼ばれるからね。何か困つた事があつたら彼に言つて。意図するところは我々と同じだから」

エレイズはそう言つて3人を送り出した。

移動には、そのラファインが用意してくれた馬車が使われる。当然、フレアは馬車に乗るなど初めてで感心しつぱなしであった。また、ラファイン当人が同行する。

『はあ……何といつか』

これが、レミニュエルでも5本の指に入る大貴族バーフォンハイム家の長男かと感心した。どうしても貴族に対して偏見を持つていたフレアなのだが、流石エレイズとウォーレンの友人である。見た目通り爽やかな好青年だし、全く上からの態度を取らない。

「君達を危険地帯に送り込む事となつて、本当に申し訳ない」

といつのが、そんな彼の第一声である。

「私は、頻繁に……とまではいかないが、王城に出入りをするから何か問題があれば遠慮無く教えて欲しい。出来る限り協力する」

「それは助かります。あなたと交流があるとなれば、王城勤務の貴族達の風当たりも弱まるのでしょうか」

ジョイドが言って、フレアは

『その心配があった!』

と思い出す。普通の学校ですが、異物のように扱われる農民だ。王城にて生活するとなると、一体どうなることやら。

「それから、シユウとこつたかな?」

ラファインは少し首を傾げ、さつきからお喋りな彼にしては珍しく黙つたままのシユウを見た。

「はい」

「君とはどこかで会つた事がある気がするのだが……?」

フレアが驚いてシユウを見やると、彼は苦笑とも何ともつかない表情を浮かべた。

「いやいやあ、他人の空似つて奴ですよ。平民の俺なんかが大貴族のラファイン殿と、今回のような事でもないのにお世通りする機会があるわけがありませんで」

「そうか……失礼した」

まだ何か引っ掛かっているかのように、不思議そうにシユウを見ていたラファインであるが、その話題にはもう触れない事にしたよう

だ。

その後は、注意すべきことなどを言い含められている内に王都中心街に入った。ランカスト通りと呼ばれる王城を中心に四方へ延びている大きな通りの1つをバーフォンハイム家の馬車が進んでいく。中心街の住人には貴族が多いし、ラファインは珍しい程に誰にでも好かれる大貴族であつたから馬車に向かって手を振る子供やわざわざ立ち止まつて礼をする大人達で馬車の周りは埋め尽くされる。

「流石ですね」

ジェイドが微かにからかいを含めて言つと、ラファインは苦笑した。

「私などよりも、エレイズやウォーレンの方がよっぽど」のような歓迎に値する人物のはずなんだが

フレアは思わず大きく頷いて、しまつたと思つたがシュウにちょっと笑われただけで済んだ。

「身分というのは持つていても持つていなくても、良識ある者にとっては悩みの種になるというワケですね」

シュウは外の群衆を見やりながら呟いた。

フレアは馬車を降りて、王城を見上げた瞬間にクーファが以前エレイズのダークヒル城について、広くないと言つていたのは正しいなと思い知つた。右から左へ首を動かしても全体像が掴めない敷地。

大袈裟でなく、ダークヒル城がまるごと入ってしまいそうな庭園が城の前に広がり、門から王城までは馬車で通れるように広い道が整備されている。驚くほど広い庭なのに芝は綺麗に刈り揃えられているし花の位置や種類、色まで整えられている。庭師は一体、何名雇われているのだろう。

見上げるようないい門が開くと、左右から衛兵が近付いてくる。銀に光る鎧で武装し、長槍を持っている。

「ラファイン・ディオ・バーフォンハイムだ。コーネリア殿紹介のジェイド、シユウ、フレアを王に謁見させる為、連れてきた」

「はっ、『苦勞様であります』

億劫そうに近付いてきた衛兵であつたが、ラファインの顔を見た直後、嘘のように姿勢を正して恭しく一礼した。

馬車がそのまま門を抜けて、王城の手前で止まる。

たくさんの尖塔が見える純白の王城には、大きな窓が惜しみなく開けられている。中はきっと、相当に明るいのだろう。木製の一枚扉には、王家の紋章が刻まれている。それを門前にいたのと同じ格好をした衛兵が2人がかりで開く。

「案内は結構」

ラファインは慣れているのだろう。付いてこようとした衛兵にそう言つと、さつさと歩き始めた。3名もそれに続く。

中はまた、豪華絢爛であった。外壁と同じ色の内壁で、壁には金色に光る豪奢な燭台があつてそれはだいたい1メートル」と取り付

けられている。足下は大理石で、歩く度に固い足音が響く。ひつきりなしに、文官や武官、また小姓や侍女が廊下を通り過ぎ、その度ラファインに入り口の兵同様、恭しい礼をしていく。しばらく歩くと、目の前に巨大な赤い一枚扉が現れた。ここが、謁見の間である。見張りに立っていた、鎧ではなく文官の正装……白い重ねを纏つた2人が大儀そうに領いて扉を開く。

「ラファイン・ディオ・バーフォンハイム、参りました」

膝を着いて頭を下げたラファインに後ろ3名も随つ。

「面を上げよ、ラファイン」

「はつ」

「ゴーネリアから話は聞いてある。ジョイド」

「はい」

「シユウ」

「はい」

「フレア」

「はい」

名前を呼ばれた順に顔を上げる。フレアは、王の顔など見るのは初めてであった。

『大したことなさそなむじさんだなあ』

という印象を受けた。エレイズに会つた時は背筋に電撃が走つたかのような衝撃を受けたし、ウォーレンと顔を合わせた時も心臓が悪くなりそうな緊張を覚えた。ラファインを見たときも、何と立派な人かと溜息をこぼしそうになつた。……ところが、その3人の仕える王の印象は余りにも薄いといつが、悪い。

申し訳ないと心から思つが、醜男だし、身体もたくましいとは程遠い。自分で歩いたことはあるかと聞いてみたくなるほど、不健康そうな中年太りした体型。

だからか、それとも持つて生まれたものの違いか……王の至近に立つ男の方がフレアの気を引いた。

黒いローブを着て、フードを田深に被つている人物。誰かの影をそのまま切り取つてきたかのように、真つ黒でそしてがりがりに痩せている。

「ヨナ、この者達の配属はどうなつていたか」

「はい。

3名共に、ヨーゼフ様の側近部隊に配属といつ事になつております」

「そりが……。あれは、この国唯一の王位継承者であるからな。新入りとて、一切の間違いは許されぬと思え」

フレアは王、ランゴバール・アーサー・レミコエルの言葉よりやは

リヨナといつらしいう者に気を取られたので低頭が一拍遅れてしまつたが、誰も気に留めていないようであつた。

氣の詰まるだけで何の収穫もない謁見は終了した。ラファインと共に3名が謁見の間を出るとそれにヨナも続いた。

「ヨナ、久しいな

ラファインが目元を和ませると、相手は深く礼をした。王に対するものよりも、丁寧かもしだれない。

「お久しぶりです、ラファイン大將軍。例の件でしたら、場所を移す必要がありませんよ……。私の自室が最も確実なのですが」

「それで構わない。君達も一緒に来てくれ

ワケの判らないまま、フレア達はヨナに続いて王城内を急ぎ足で進む。

「ヨナ参謀長、アレウス将軍がお話しをと……」

「お待ち頂いてくれ

「参謀長、来週のハロルド侯の面会についてですが、ロイズ様が幾らかご相談があると

「後ほど伺つ

そんなやり取りがひつきりなしに行われていた。

「相変わらず、君は忙しそうだ」

「はい。本来ならば、宰相のすべき仕事まで私に全て回ってきているものですので」

フレアは少し妙な反応をしてしまったかと焦った。

ダグラス宰相の話なら、エレイズから聞いていた。問題の人物の1人だ。

「宰相は不在なので？」

ジェイドが質問すると、ヨナは痩せた肩をすくめた。

「ウラディス殿のサトウール城を訪問したきり、一週間近くお戻りにならない。その理由というのが、國土防衛の為の内密な話し合いというのだから聞いて呆れる」

見た目とは違つて、ずけずけと物を言つタイプらしい。

待て、聞いて呆れる……？

もしかして、ヨナは事情を知るこちら側の人間なのだろうか。フレ

アは少し首を傾げてヨナを見つめた。

既に彼は前を向いていたので、視線は合わなかつたが。

使えなさそうな王だったけど、息子はやつでもないみたい。

「お入りください」

ヨナが示した部屋は、重役の物とは思えない。つまり、かなり狭い部屋であった。必要以上に広いとされる部屋でありながら、参謀長の部屋は小さいようだ。

「贅沢を好まないと申し上げたところ、大喜びで小さな空き部屋をあてがわれたのです」

まるでフレアの内心を読み取ったかのようにヨナが説明した。

「少々お待ちを」

ヨナは4人が部屋の奥に入ると、扉に触れて短く呪文を唱えた。これはフレアも知っている術。魔法による外からの干渉を妨害する、一種の結界だ。

これから始まるのは、結界が必要な話というわけだ。

「先に、あなた達に私の立ち位置を説明しておきましょう」

ヨナは3名の新参者を見渡した。

「大体、予想はついているでしょうがウラティアスの件を知り、ラフ

アイン殿やヒレイズ殿、ウォーレン殿の側について動いています

「やつぱつ……」

フレアは思わず声を出した。

「参謀長という地位にあるため、多忙ではありますが、あなた達3人のサポートはさせて頂くつもりです。特に、外部との連絡を取る場合は私を頼つてください」

話を聞いているのだろうか、特にショウを見て言つた。

「王城内で、ウラティスの事を知り、尚かつ反ウラティスの立場であるのは私と、あとは1人だけです。何か、この件について話す時にはくれぐれも注意してください。官僚だけではなく、使用人達にも気を付けてくださいますよう。それらを情報収集に使つている官僚もいますので、たかだか使用人と油断せぬようにしてください」

ジョイドは当然の様に頷いていたが、フレアには驚きであった。

「反ウラティスは、ヨナ参謀長ともう一人だけという事でしたが……その逆は？」

ショウが尋ねると、ヨナは少し表情を硬くした。

「実を言つと、多いのですよ」

「一。」

「一」覧になつた通り、ユリュエルの国王陛下は聰明とは言つ難い

フレアは何とか頷くのを堪えた。ラファインの性格はよく聞かされている。

「それを余り、自覚していらっしゃらないという方でしてね。正直、ウラディス派と申しましようか……その、ダグラス宰相のお陰でいわれのない窮地を抜け出した者が多く、かなりの信頼を受けています。また、ウラディスが3名の貴族大将軍を抱き込んでいるという事も大きい。この王城には、その血縁者がかなり多く蔓延つて……失礼、登用されていますので」

「それでは、そろそろラファイン殿はお戻りになつたほうがよろしいですね」

「ああ、……そうだな」

ラファインは頷いて立ち上がる。

「あなたがたは、これからヨーゼフ様のところへ。使用人が案内しますので」

ヨナはフレア達3人にはそう指示した。

王子ヨーゼフは、フレアやシュウと大して変わらない年齢であるが、王の政務を補佐しているといつ。

「では、くれぐれも気を付けて」

ラファインは顔色を少し心配に染めてフレア達を順に見てから、去つて行つた。

その背中を見送る間もなく、1人の使用人がやつてきてヨナに恭しく一礼すると話を聞いていたようであつた。

「「」案内致します。こちらへ」

と、フレア達に頭を下げた。

「では、私は仕事がありますので、ここへ

ヨナは先程の倍とも思えるような急ぎで廊下を突き進んで行つた。  
相当に時間が押していたと見える。

王子がいるのは、王の謁見室とヨナの部屋があつたのとは別棟である。広く、明るい渡り廊下を抜けていくと雰囲気が随分と変わる。先程までいた棟には、どちらかというと文官が多くヨナと同様、仕事に追われて駆け回つている印象が強かつたのだがここには武官が多い。その者達も静かに警備に立つていて、ゆっくりと巡回していたりと慌ただしさが無い。

「すみません」

立ち止まつたのは、謁見の間よりも幾らか控えめな大きさの一枚扉。銀の装飾の黒い扉だ。

そこに、厳重な装備をした3名の衛兵が近付いてきた。この中は、彼らが一挙一動を見張るようである。新入りの武官など、客人よりも寧ろ疑るべきものなのかもしれない。

中に入る。

そんなに広くないな、というのがフレアの第一印象であった。王の謁見室が余りにも広かつたので感覚がマヒしているのかもしれなかつたが。

正方形の部屋で、黒い絨毯が床を覆つていて。正面に大きな窓があつて、午後の日差しが強く照りつけている。

その窓の手前に座つているのは、フレアの想像とは似ても似つかない……つまり、全くといっていいほど王に似ていない姿があつた。

「初めてまして」

にっこりと微笑んだのは、フレアと大体同じくらいの年頃の少年であつた。さらさらとした黒い髪は肩に付くかどうかの長さで、綺麗に切り揃えられている。黒い瞳は少女の様に大きく、印象的。ほつそりした顎のラインで、身体もまた細い。しかし、弱々しい印象ではない。兎に角、魅力的な少年であつた。

慌てて3人が低頭すると、軽い笑い声が聞こえた。

「大丈夫ですよ。余り、気になさらず。  
あなた達、一端、外に出てください」

「しかし……」

3名の衛兵が戸惑うが、ヨーゼフは微笑んだ。

その笑みは、上品ながら充分に人を従わせる力を持っていた。

「心配は要りません」

「……はつ

未練ありげに3名が出て行くと、殆ど同時にヨーゼフ王子は椅子から飛び降りた。啞然とする3人に微笑みかけ、

「どうぞ、座つて」

と。

「僕は、全て知っています。ヨナから色々と聞いていますので」

余りにも率直に教えられて、フレアはともかくジョイドやシュウで

さえも口の利き方を忘れたようになってしまった。

「ヨナ参謀長のおっしゃった、もう一人とは……ヨーゼフ様御当人  
だったのですね」

ジョイドがやつとの事でそう言った。

「はい。ですが、頑張つて知らない振りをしているので、皆様も……まあ、ヨナにしつこく言われていると思いますが気を付けてくださいね。父にも黙つているというのは、ちょっと問題のタネになりかねないので」

「何故、国王陛下にお伝えにならないのです？」

シュウの質問に、ヨーゼフは苦笑した。

「父上は、表面上、僕を大切にしていますが……それは、王家の血を絶やさないというためだけ。生きていれば、僕なんてどうだっていいのです。

国政で父が必要としているのは僕のサポートではなく、渦中の人、ダグラス宰相です。ですから、ウラディス殿とダグラス宰相が手を組んで国家転覆を企んでいるなどと申し上げたところで……」

肩をすくめた。随分と、気安い言動の王子である。

そういうえば、ヨーゼフは服装も相當に気安い。生地などはかなり高級感が漂うが、ぱっと見はヨナの黒衣と殆ど変わらない。

「僕個人としては、今日からでも皆様に近衛兵第一部隊となつていただきたいくらいなんですが、流石に周りの目が気になります。折

角今まで、勘ぐられないと云してきましたのが無くなってしまいますから。

そして、一つ怖いのが僕もヨナも大体でしか王城内の宰相派を確認していないところです。さっきの3名は、いつでも僕の至近で警護に務めてくれる人達なのですがその中に僕や父上を殺そうと画策している者がいないとも限らないわけです

「誰が敵か判らない、と云つてた。それは、言つてもなくかなり危険な状態である。

「もしかしたら、王城内で宰相色に染まつていらないのがここにいる四名とヨナだけかもしない。つまり、僕は常に暗殺の危機にさらされているんですね」

「……どうすればいいんでしょう」

フレアは思わず言つた。

「だから、嫌かもしぬせんがシユウ殿とフレア殿は僕と年が近いですでの、お友達になります」

「……はい?」

フレアだけではなく、シユウまでも首を傾げた。

ジェイドだけは納得して軽く笑つ。

「成る程、我が儘を通されるわけですね」

「そう。僕は外出もままならず、近くにいるのは大抵20や30は

年上の無骨な戦士。だから、ヒマなんですよ

ヨーゼフは微笑んだ。

「そんな僕が新しくやつてきた、年頃の近い2人を側に置きたがつても不思議はないんです」

「な……成る程」

確かに、と思つたフレアであつた。

この広いだけの……殆ど見ていないが、そう断定したくなる……王城に友人もなく1人ポツンといたとしたら、ヒマどころか寂しくて自分だつたら気が狂うかもしれないなと思つた。

「また、あなた方はコーネリアの紹介ですがラファイン大將軍の推薦もある……という事になつています。まず、疑われる事はないでしょ」

風変わりな王子、暗躍する者達。

そして、言つた通りにヨーゼフの我が儘は通されて翌日からフレアとショウは王子の話し相手という名目で側近に加えられた。

「僕はお二人やジエイドさんが羨ましい」

ヨーゼフは笑う。

ପାତା ୧୦୨

ショウはもう、お気軽に話せるようになつてゐるようだ。

「まあ、簡単に言えばこの国の殆どの男がそうであるよ」エレイズ大将軍のファンなんですよ

何とまあ、俗っぽい言葉を使う王子だろうか……

「あ、フレアさん、王子のぼくないとか思つてゐでしょ?」

「いやね……おはよ」

見抜かれた。

「小さい頃、よく王城を抜け出して、城下町の子供と遊んでたんで  
すよ」

「「はい！？」

また、2人揃つて、仰天の声を上げてしまつた。

驚かせた事を楽しんでいるヨーゼフ。

「流石に、今はやつてませんよ？ でも、僕が子供だからつて油断してたんですね。騎士の方に、頼んで……いやあ、あれはタチの悪い命令だつたかな？ 兎に角、こつそり裏門から出してもらつたんです。」

「いいですねえ。引きこもりに碌な支配者はいませんから。王子の治世になるのが楽しみですよ」

「けづけ言つシユウである。しかし、ヨーゼフはちつとも眞に留めない。どこか

「やつやつ。父は、世間をよく判つてないんですね」

などと言つからフレアはどうしたらいいか判らなかつた。

「いじんな時間に申し訳ない」

大体、一週間が経つた頃。1人、一般職に就いたジョイドは深夜、ヨナに呼び出された。

「いえいえ。何か起きましたか

どちらの部屋でもなく、庭園の隅で一人は顔を合わせた。自分達の周囲を結界で覆っている。

「あなたは、エレイズ軍隠密部隊……つまり、セバスチャンの部下なのでしたね？」

「ええ」

「それを見込んで、お願ひがあります」

ジェイドは口元だけで微笑んだ。

「秘密の任務は得意ですよ」

「ダグラス宰相の尾行をして頂きたい」

「ほう。何か、引っ掛かつてらっしゃる？」

「ええ。私はてっきり、ウラディスの城との往復を続けていいだけだと思い込んでいたのですが……もつと、他の目的地があるのかもしないと思いまして」

「それは、何故？」

「……のところ、私はウラディス達4人の大将軍の城を監視し続けていたのですが全く、ダグラスが現れないのですよ。別の場所を密談に使っているのか、全く我々の予想していない者とも手を組んでいるのか……」

ジエイドは頷いた。

「敵の全容は把握しておぐに越したことはありませんからな」

「そういう事です。宜しく頼みますよ」

「では、数日……3日程、私が不在になる間に訳の用意をしていただけですか」

「それは、既に」

ジエイドは微笑んで一礼すると、闇の中に消えていった。

\*

「ロザリア隊長……」

情報部の執務室に入ったイアリスは思わず息を飲んだ。

そこには、本当にまれにしか見ることの叶わない仕事モードのロザリアであった。全身から、これが戦士であつたなら殺氣と呼びたくなる気配が溢れ出して目は爛々と輝き口では何かぶつぶつと呴きながら片手で書類のページを繰って、片手は物凄い速度でペンを走らせる。

しばらく、じっとその光景に立ちすくんでいたイアリスにロザリアは気が付く。作業が一段落したのだった。

「あ、イアリス。なあに？」

瞬間的に、いつもの彼女に戻つて柔らかな微笑みを向けた。

「は、はい。

エレイズ様から、調査命令が幾つか出でます。どれも、国外の不法組織でウラデイスとの接点をジエイド……王城潜入中の隠密部隊の者が見つけ出した組織です」

ロザリアは頷いて、自分がさつきまで戦つていた敵資料を見やる。

「「」の関係だね。うん……A部隊の者を誰か探してきてくれる？」

「判りました」

「あ、ガーディ副官…」

イアリスは一度よく、A部隊長官であつて情報部副官のガーディを見付けた。

「おお、どうした？」

振り返つたのは、温和な田元の初老男性。背はそんなに高くないが、ぴしつと伸びた背筋とキツチリした服装は有能な印象を与える。若い頃は中々に美男だったのだろうなど、イアリスは思うのだった。

ロザリアに説明したのと同じ事を伝え、それから隊長がA部隊を動かす予定である事もまた伝えた。

「承知したよ。隊長は今、何をしているかな」

「私が執務室に入った時は、本気モードでしたけど一段落ついたみたいですね」

「それなら直接行った方が早いな。じゃあ『苦勞様』

紳士的に微笑むとガーディは執務室の方へ向かった。

敵の実体が明らかになり始めた。

「失礼します」

「やあ、ヨナ」

恭しく一礼して、ヨーゼフの私室に入ったヨナに彼は明るく手を挙げて挨拶した。フレアとシユウは頭を下げる。

「幾らか、お耳に挟んでおきたいことが。2人にも聞いていただきたい」

そして、お馴染みともなった結界を張ると3人へと近付いた。

ヨナが話したのは先日ジエイドに任せた任務と、その後のエレイズ軍情報部隊が行つた調査結果。

「1つは聞いたことがあるな」

ヨーゼフは無表情で言つた。

「アルド……彼が、闇属性魔具の流れを管轄しているといつても過言ではない……だよね？」

「はい、仰る通りです」

「闇属性？」

フレアが耳慣れない単語を繰り返すと、ヨナが説明をしてくれた。

「魔法の属性は、光・炎・水・氷・雷・土……といわれていますが。正確には、これに先程言いました、闇属性が加わります。しかし、闇属性の魔法というのは9割方が禁術ですから一般の魔法使いが触れる事はありません。というか……使用したとなると、まず法に抵触します。フレアさんの様に、優秀な魔法使いであつても知らない事は珍しくありません」

いや、あたしは優秀でもなんでもないです……と言いかけたが、話を滞らせても仕方がないので口は噤んだまま頷いた。

「魔具というのは、少量のきつかけとなる魔力を流してやれば、その魔具に込められた呪文が……例え使用者のキヤバを上回つていても発動させることができるもの、でしたっけ」

シユウが言つと、ヨーゼフは頷いた。

「模範解答だね。

これで判つたと思つけど、ウラティスは相当に厄介な連中と手を組んでいるよ。ここにいる人達の足下にも及ばないダメ魔法使いであつても、魔具を使用すれば実力をかなり底上げする事が出来る。シユウ、内密にウォーレン殿と連絡を取りたいんだけど……ライトバットを使わせてもらつてもいい?」

「判りました」

ライトバットとは、シユウの契約魔獣であるBランク光属性獣族蝙蝠型の魔獣。戦いよりも、偵察や探索、また情報伝達に向いた魔獣である。呪喚者の言葉を、どんなに離れていたとしても一方的ではあるがそのまま伝える事が出来るのだ。

「じゃあ、今すぐこでも頼むよ」

シウウは頷くと、短い呪文を唱えた。

小さな物音と共に、小さな煙が上がって金色に光る蝙蝠が現れた。かなりサイズは小さく、フレアの片手にも乗りそうだった。

「コルドワーフズの、ウォーレン大將軍のところへ行つて。本人を確認したら、連絡を」

軽い、超音波のような鳴き声を上げると蝙蝠は窓から飛び出した。そのスピードは相当なものだらう。フレアは、光属性はスピードも持ち味であったのを思い出した。

「ウォーレン大將軍に、何を？」

フレアが尋ねるとヨーゼフは説明する。

「僕が知る中では、彼が闇魔法や魔具に関して最も詳しいんだ。とても頭のいい人だしね。この手の話しを相談するにはうつてつけだと思って」

「やつぱり、そなんですか……」

エレイズが……今となると、随分昔の事に思えてくるが入軍時、ウォーレンの知識ならばクーファの謎が解けるかもとまで言つていた

のを思い出した。

「残りの2組織に関しては、更に調べを進めないとね……。出来ることなら、不法組織だ。ウラティスと手を組んでどういつされる前に、摘発してしまえると良いんだけど」

「その方向で手を打つてみましょ」

「うん、任せたよ、ヨナ」

フレア達は、いつしたやり取りを見ていると現国王よりもヨーゼフの方がよっぽど決断力に優れた施政者に見えてくるのだった。

「組織壊滅を行うのであれば、王国軍ではなくエレイズ軍、ウォーレン軍、ラファイン軍のうちどれかに依頼しよう。その方が、次いでに調査も行いやさしいよね」

「はい」

ヨーゼフの考へにヨナは深く頷いた。

「それについては、じゃあ、俺がロザリア隊長に伝えます」

シユウが言った。

「でも、ええとライトバットが……」

フレアが指摘すると、シユウはやうとこつ風に笑った。

「大丈夫。俺とロザリア隊長はホットラインが繋がってるから

「……？」

情報系の魔法には詳しくないので、フレアには全く見当が付かなかった。

\*

「どこへですか、エレイズ」

その夜、ロザリアはエレイズの元へシュウからの伝言を届けに来た。

「君の可愛いうさぎは便利だよね」

「ふふ、そうですね」

彼女の脇には、ちょっと金色に光る可愛らしいうさぎが一本脚で立ち上がりつて耳を動かし、2人の話を聞いていた。無論、このつぶらな瞳の長い耳を持つ愛すべき姿の生き物も魔獣である。光属性の獣族ウサギ型。Aランク魔獣であるが、例外的に人の言葉を聞き取るだけでなく話す事も出来る。また、聴覚に優れており耳を澄ませば、例えば王城の一角にいたとしてその中で交わされる言葉の全てを聞き取れる。それが耳元で囁いても聞き取りにくい程の小声だったとしても。それから、もう一つの能力が離れたところに召喚された同じウサギ型魔獣との通信。シュウはこの能力を利用してロザリアと連絡を交わしているのだ。ちなみに、シュウが召喚したのはBランクのアイス・ラビット。姿は雪山の白うさぎそのものである。

「エナなら、上手く国王を説得するはずだね。準備はしておいでい

い

「そうですわね。ラファイン大将軍にもお伝えしておきましょうか？ ウォーレン大将軍には、ライト・バットを行かせたようです」

「うん。頼んだよ」

エレイズは頷きながら言った。

## 王城内での初任務。……コスプレっすか？

それから、一週間。ヨナが国王へウラディスと手を組んでいると  
される組織の一斉摘発を認めさせた。当然、ウラディスの件について  
は黙秘しての事。ヨナは2組織について意識的に過大評価をして  
例の3軍以外では対処が難しい可能性がある事を回りくどく重ね重  
ね強調した。これが功を奏し、1組織にはエレイズ軍、もう1つに  
はラファイン軍に出兵の命令が出された。

「ウォーレン大将軍は、信用無いからねえ」

話を聞いたヨーゼフは笑いながら言つた。

「僕はある意味で、一番信用できる人柄だと思うんだけど。父上は  
嫌いみたいだ」

「それ……どういう事ですか？」

フレアがちょっと心外そうに聞く。ヨーゼフにとつてエレイズはウ  
オーレンよりも信用に足らないと評されていると聞こえる。

「ああ、『ゴメン、『ゴメン』

その意図を感じ取ったかヨーゼフは苦笑した。

「別に、エレイズ大将軍やラファイン大将軍が信用に足らないって  
言つてるんじゃないんだ。僕が言いたいのは、そうだな……あの人  
は頭が良くて様々な事を画策して動いているように思えるけど、結

「局のところ一つしか考えてないんじゃないかつて事」

「……それって？」

疑問の答えに再び疑問をぶつける形となつたが、判らないものは仕方がない。

「実は、何度か顔を合わせた事があるし、喋った事もあるんだけど。あの人は自分の部下や友人、……つまりエレイズ大将軍やラファイン大将軍にとつて利になる事しかしようとしないんだ。

その点、エレイズ大将軍とラファイン大将軍は大人だから。エレイズ大将軍は形だけ、だらうけど国の為にも尽力しようとするし。ラファイン大将軍は言うまでもないよね？　この国家に属するもの、全部大切に思つている」

「あ、要するにウォーレン大将軍ならピンポイントでやつて欲しいことを迷わずやつてくれるって事ですね」

シユウが簡潔にまとめる、ヨーゼフはそういう、と嬉しそうに頷いた。

「僕は、エレイズ大将軍とだけは話した事が無いんだよなあ。やっぱり、近くで見ても噂通りの美人なの？」

本当に俗っぽい王子だなと思いつつ、フレアは大きく頷いた。

「初めて顔を合わせた時なんて、魂抜けそうになりましたよお」

「ああ、それ、判る」

「え、シユウも…？」

「何でそんなに驚くかな」

「いや、シユウって普通の人興味持つものに興味無もんつだなあつて」

「ええーっ。ロザリア隊長の不思議ちゃんオーラが移つたかな。俺、結構普通のつもりなんだけど」

セヒで、ドアがノックされた。

「お楽しみのとひ失礼します」

「ジユイドさんー」

フレアとシユウは、声を揃えてしまった。当初の計画とは違つて、フレアとシユウが王子の話し相手という仕事を主に務める事となつてしまつた為、ジユイドとは最近、殆ど顔を合わせていなかつた。

「どうしたの？」

ヨーゼフは興味を持ったように、じつとジユイドを見た。

「ヨーゼフ殿、少々ガールフレンドを貸して頂きたく参りまし  
た」

丁寧な文面に、巫山戯を混ぜているところが彼らしい。

「あたしですか？」

「やう

フレアが立ち上ると、モーゼフはちょっと笑つ。そして  
「貸してあげるナビ、僕の大事な彼女に手を出さないでね」  
ヒジロイドの冗談に便乗した。

全くもつて、俗っぽい……。

「御意」

わざとひじへ眞面目に応じるヒジロイドもヒジロイドである。

「どうしたんですか？」

「当初の予定通りの仕事をしようつか」

「あ……はい」

第零部隊の仕事とこう訳だ。

「まあ、昼間つから話しえつつ内容でもないから今晚、薔薇園の辺りにいてくれるかい？ 田中参謀長も含めての話し合いをしたい」

「薔薇園ですか」

フレアは、頭に地図を思ひ出させてほつとした。

「ボクと参謀長の密会場所になつてゐるんだよ」

「……なんか、その言い方嫌です」

ジェイドは声を殺して笑つた。

「それと、わざわざ呼び出した理由だけぞ」

「あ、…………そりですよね」

これだけなら、あの場で話しても全く差し障りない。

「ちょっと付いてきてくれるかい」

ジェイドに従つて黙々と歩いてゐる内に辿り着いたのは、昼間はまず人が訪れない被服室。

「そこに、衣装を既に押し込んでおいたから」

「へ？」

「あと、仕事内容もね。じゃあ頼んだよ」

フレアが首を傾げながら、被服室に入るとそこには革製のやけに立派な鞄が置いてあつた。近付いて開けると、まず目に付いたのは暗号文。一ヶ月で必死に覚えたもの。そして、それは取り敢えず置いておくとして……。

「あ、……成る程」

ジェイドでは出来ない情報収集だなど、納得した。

鞄には王城仕えのメイド服が入つっていた。

着替えてから、よくよくメモを見る。メイドの仕事内容から何からなにまで丁寧に書かれている。これを本当の新入りに見せてやりたい。おしとやかな行動が酷く苦手なフレアなのだが、仕事だからそもそも言つていられない。兎に角、怪しまれても元も子もないのだから……。

フレアの仕事は、重要だが単純なもので誰がウラティスとダグラスの陰謀を知り、また加担しようとしているか調べる事。それを上手く使用人達のお喋りから推測する訳だ。

潜入には成功したんだけど、いきなり正念場。

被服室を出ると、いきなり掴まつた。

「あら、あなた……見ない顔ね？」

30代くらいの女性。フレアと同じ、つまりメイド服を着ている。

「はい、昨日から入りました、アンナといいます」

王国で最も多い名前らしい。

「そうだったの。私はカイラ、メイド長よ」

「ああ！ 宜しくお願いします」

緊張している新人の物まね、というタイトルが付きそうな対応をした。それに相手は騙される。

「緊張しなくていいわ。じゃあ、早速手伝つて」

「はい」

いきなりトップ（－？）に接近成功してしまつた。この人ならば、多くの情報を知っているのだろうが、逆にこの人に疑われてはまずい。慎重に。

フレアは「覚えが早い」と褒められながらてきぱきと掃除やら、

お茶の支度やらをカイラの横で手伝った。覚えが早いというより、無論、言えたものではないが、先に情報として知っていたのだ。驚く「」ではない。

「ちょっと休憩しましょつか」

「はーい」

すっかり、カイラの可愛い妹分的ポジションを獲得した。

2人で休憩室に入つたところで、仕事開始。

「そうだ、カイラさん」

「何かしら」

「メイド長さんつて、やっぱり……大将軍様なんかがいらっしゃった時に対応を任せたりするんですか？」

「そうね。失礼があつてはならないから」

頷きながらカイラ。

「あ、あの」

ここはセルフティーの真似をしてみる。

「ウォーレン大将軍がいらっしゃつたり？」

「ふふ、ミーハーねえ、アンナちゃん」

「えへへ」

照れてみせるフレア。無論、あまりウォーレンに関心はない。

「そうねえ……でも、やはり平民出身のウォーレン大将軍は余りいらつしゃらないわ。エレイズ大将軍なんて、あの日以来……」

「あの日？」

フレアは、思わず食い付いてしまつた。

ウォーレンの100倍は関心がある話。カイラは、純粋なミーハー心ととつてくれたようだ。

「まあ、秘密の話でも無いから。

エレイズ大将軍が珍しく王城にいらつしゃつた日があつたの。まあ、驚くような事じゃなくて……大規模な軍事会議が行われていたんだつたわ。だから、他の大将軍様達もいらつしゃつてた。

それで、その日ね……偶然なのか何なのか、それまでも病に臥せつていたエレイズ大将軍の婚約者が亡くなつたの」

「婚約者なんて……いらつしゃつたんですか」

フレアは思わず、ぽかーんと口を開けてしまった。

「元気な時に、何度か見かけたのだけど。それは素敵な殿方だつた

ものよ。確か、お名前がユーハ。そつそつ、それで

「失礼します！」

そこへ、何人かの同業者が入ってきて話しあは中止された。

「カイラさん、ちょっとお願ひしても……」

「どうしたの？」

「急遽、ウラティス大將軍がいらっしゃる事になつたそうです」

「まあ、大変。アンナちゃん、良い機会だから一緒にいらっしゃい

「は、はい……」

フレアの緊張は、カイラの予想とは全く別のものだったのだがこれも都合良く解釈されたようだ。

「ふふ、前準備を手伝つてもうつだけだから」

「新入りさんですか？」

「あ、はい。アンナです……宜しくお願ひします」

「かわい～！ え、いくつですか？？」

「今年で17です」

「若い！」

きやつ、きやつという効果音がピッタリくる調子で大騒ぎの2人。

「エリザです」

「ハンナです」

長い髪の方がエリザ、ショートカットの方がハンナという雑な覚え方をしたフレアだった。

「ああああ、急いで！」

とカイラに急かされた一同だった。

「想定外が起こったね」

ヨーゼフが少しだけ心配そうに言ひ。

「そうですね。ウラディスの実力はなかなかのものです。フレアと接触した場合、彼女の強い魔力を知らてしまう危険があります」

シユウも頷きながら言った。

「一般兵に紛れ込ませるよりも自然かつ安全かと思つたんだけど。後者については判らなくなつたな」

ジェイドが息を吐いた。

「まあ、ど新人に賓客の対応なんてさせないでしょ」

ヨーゼフが言って、2人ともそれなりいと切に思った。

ウラディイスは特にヨーゼフの知るところ、莫迦な男でないしダグラスという頭までついている。妙に魔力の強い使用人を、単なる偶然で受け流す程お人好しとは思えない。調べられたら、そして警戒がなされたら厄介な事この上ない。

カイラの指示でエリザ、サーリヤがテーブルの支度をしている間、一番下つ端であるフレアは床の掃除をする。元々綺麗だから必要な気もするのだが、そんなことを言うわけにもいかない。

「アンナちゃん」

「はーい?」

「もう大丈夫よ。掃除用具、下げてしまつて頂戴」

「判りましたあ」

フレアは雑巾とバケツを引き下げながら、全く別の事を考えていた。ヨーゼフ達と同じ事……つまり、万が一ウラティスと接触する事となり正体がばれたらどうしようという心配についてである。

『まあ、この分なら……』

客人が来る前に、部屋から出されるだろう。それならいい。

しかし、偶然というものはあまりにも突然と皮肉を好む。

フレアが豪華な客間を出ようとした時だった。

「おや、失礼。急ぎ過ぎましたかな」

「……！」

危うくぶつかりかけたその人こそ……。

「まあ、ウラティス大将軍！」

エリザが思わず声を上げた。

「どうなさつたのです？　案内の者は……」

カイラも田を驚かせる。

「いや、そこまで一緒にでしたが。ダグラス殿を呼びに行つてももうつたのですよ」

「はあ」

フレアは表情を変えない努力をして、相手を観察した。

年は30代の後半くらいだらうか。予想に反して、高慢な貴族という空気は無くどちらかというと鍛えられた武人そのものといった容姿。背はそこまで高くないが、どこか威圧感を感じる。顔立ちは美女というのどころないが、引き締まった顎のライン、鋭い瞳はなかなか好感持てる。

「君からは随分とお若い……ん？」

ウラディスはフレアを見ると、顔を少ししかめた。

『勘付かれた……？』

「変わったメイドもいるものだ」

当然カイラ達3名は首を傾げたものだが、フレアは背中に汗をかいていた。

「一度、戻つた方がいいですか？」

「いいえ、どうぞお座りになつてください。今、支度が終わつたと

カイラは気を取り直して愛想よく笑つた。

「アンナちゃんは、戻つていいわよ」

「は、はい！  
失礼します」

逃げるよ<sup>う</sup>に出て行<sup>つ</sup>たフレア。

「彼女は新人？」

ええ。つい最近入ったばかりですわ」

不思議な事もある

不思議な思いをしているのは、メイド3人も同じであつた。

噂大好きのメイドさんは味方に付けると非常に便利。

その夜。

フレアは結局、ウラディスと再会する事はなく済んだ。しかし、見して疑われていたのは明らかである。

今は、エリザと清掃業務に勤しんでいる。

「驚いたわね～」

「はい。吃驚しました」

フレアは差し障りのない、正直な感想を述べる。

「あれが、ウォーレン大将軍だつたら更に良かつたんだけどね

「人気ですねえ、ウォーレン大将軍つて」

「あら、アンナちゃんは興味ないの??」

「そんな事はないんですけど……」

ちよつと首を傾げてみせた。

「やうこえば、ヒロザセ」

フレアは、ひょっと強引に探しを入れてみる事にした。裏があると思われないよう、なるべく噂好きなだけの女の子を装わなくてはならない。

「ウラディス大将軍とこえば……あの」

「どうしたのよお、声なんて潜めて」

そつ言いながら、ヒリザは興味津々とこつた様子でフレアに近付いた。やはり、ゴシップ大好きのようだ。

「あたしが言つてたつて事、秘密にしてくれますか?」

「うんうん」

まあ、噂が広まつたらそれはそれで良い。

「ウラディス大将軍とダグラス宰相が手を組んで何かしようとしてる……って噂を街で聞いた事があるんですけど」

「ええ? 何かって? ?」

「よく判らなかつたんですけど、国家の存亡がどうのうへ

「おお! とこやない。」

皿を丸くするヒロザ。

「あ、でもね

エリザの方も声を潜める。

「確かに、最近ウラディス大將軍とダグラス宰相が面会することが多いのよね。それから、ガザン將軍って判る?」

「えつと……はい」

將軍というのは、名前の通り大將軍の一つ下の位。城は持たず、王城に仕えて大体1000名程度の軍を指揮する。

「ここの前、ダグラス宰相と真剣に話してみると、見ちやつたのよねえ。それから……」

サー・シャは続けざまに5名の將軍、それから有名な文官の名前を挙げた。

「言われてみると、なーんか怪しいわね!」

「ですよねえ」

怪しいビーハの騒ぎでないと知っているが、それは勿論口に出さず單につわさ話に夢中になっている体で何度も頷いたフレア。

……大収穫ではないか。

それから後、仕事が終わって解放されるとすぐに待ち合せ場所の薔薇園の一角に向かった。こいつ言ひと、ロマンチックな気配があるが、隠密の仕事の話をするのが目的である。それに相手はジェイドだし……いや、失礼。

「ユカリです」

この「丁寧な呼びかけは、ヨナの声であった。その方向に行くと、既に2人が待っている。

「遅くなりました」

「どう? 収穫はあつた?」

ジェイドがまず、確認する。フレアは頷いてから、ヒリザが上げ連ねた名前を伝える。

「才能あるよ、フレア」

「ビ……ビも」

「それと、ウラディスとは接触しましたか」

ヨナに、フレアは頷く。

「一瞬でしたけど……多分、只の娘っこじゃないって気付かれました。

「まずかった、ですよね」

「やつになってしまったからにほしょうがないけどね」

ジェイドは顔をしかめる。

「でも、君の方もウラティスの魔力を覚えたんじゃないかい？」

「は、はい」

「だつたら、次からは自然と避けるよつに努力してほしい。  
それと、……不自然なところは無かつたかい？」

フレアが首を傾げると、ヨナが続ける。

「一瞬では判りにくかつたかもしませんが……。例えば、様々な  
気配が混在していたとか」

「……あ、そういうわれてみると」

あの時、漠然と感じた不自然の正体が解つた。

「確かに、強い魔力というだけじゃなくて……個性が無かつたとい  
うか。側にいるだけで魔力が感じられるような人ほど、その独特の  
感じが強くなるのに……何といつか、雑踏の中にいるみたいにじち  
やじぢやした魔力でした」

ジェイドとヨナは顔を見合わせて頷いた。

「……何か？」

「お陰で確信できたよ」

「彼は、闇魔法を用いて他者の魔力を奪い取り、自らの魔力の最大値を底上げしています」

フレアは目を大きく見開いた。

「そんな事が…」

「その闇魔法に関してはウォーレン大将軍の情報ですから、まず間違いはありません。

問題は、時間を掛けねば掛けるほどウラティスの力が強まってしまう事です」

ミナに顎をつつ、ジエイドは苦い表情を浮かべた。

「かといって、こちらからは動けない。  
だから、我々の仕事だよ。フレア」「

「……？？」

ジエイドは真面目な顔で言う。

「王城地下が、大書庫となつていてる事は知ってるね？」

「は、はい。国内で発刊された書物は全て保管されていると……。  
それから禁書も」

言いながら、フレアはジエイドの意図が判つた。

「対抗策を、そこから探すんですね」

「そう。城内見取り図はヨナ殿が既に用意してくれた」

「ポートのポケットからかなり詳細な地図を出して、フレアに見せた。

「それで、君のメイド業に裏業務をもつ一つ加えさせてもらいたくてね」

「は……はい」

「「」の地図を見てもらえれば判る事なんだけど」

ジェイドは指を軽く打ちあわせて、小さな光を発現させた。詠唱破棄で光属性の魔法が使えるこの人は一体、何者なんだろ？とフレアは思わず考えてしまった。

「地下への階段が、王の寝室から通じるものしか無いんだよ」

「あ……」

「だから、君には王の寝室への抜け道を探して欲しい。王城や貴族邸といったところには、まず間違いなく主の部屋に通じる抜け道がある……いや、逆だな。主が有事の際に外へ、人知れず逃れる為の抜け道があるものだ」

「それを探すんですね」

「そう。ボクも隙を見付けてやつてみるが……王國軍はエレイズ軍と違つて一日の束縛時間が長いし、やはりボクは警戒を受けている。ヨナは知つての通り、日中の仕事を抜け出す事が出来ない……國家

の保全について話し合っている宰相が外に行つてばかりだから

最後の一言は、たっぷりの皮肉が込められていた。

調査完了。薔薇園で仕事の話ついでになんだかね。

翌日、フレアの仕事は廊下掃除から始まった。

「めんどうでないね~」

と言つ、フレアの教育係になつたエリザだが、フレアにひとつでは待つていまつたといつばかりの仕事である。

しかし、他意があるように見せてはならず自然にきょろきょろしながら、なきなが難しい。隠密部隊の資料のお陰で、隠し通路などの探し方は大体判つているが。

『ほんつと、何でもやるんだよなあ、隠密部隊つて』

思い出しながら、半ば感動する。

最上階、王の寝室や執務室、資料室などがあり、また高位の文官……9割方が貴族出身……の寝室、執務室がある階。部屋数が多いが、造りは割と単純で掃除も余り苦ではない。

「あ、お早う御座います!」

エリザの少し嬉々とした声にフレアが顔を上げると、ヨナの顔が見えた。フレアもエリザに倣つ。

「お早う御座います。余り、無理をなさらないよつこ

微笑んで歩き去っていくヨナ。最後の言葉は、フレアに言ったのだろうと思われる。だが、そんな事エリザには知る由もない。

「いいわよねえ~ ヨナ参謀長」

「語尾にハートマークが付いていそくな。

「使用者を気遣つてくださる、官僚なんて他にいらっしゃらないわ」

「そう、ですね」

「どうか、あの人は女性受けが良いのかとフレアはほんやり考えた。

だが、そういうえば初対面時は深くフードを被り、最近長く居合わせた時には辺りは真っ暗……という事で初めて彼の顔をきちんと見た気がする。確かに、なかなかの美青年であった。意外にも、というと失礼だらうが。

「へえ、フレアはそんな事してるんだ」

ヨーゼフはヨナから聞かされ、楽しそうに笑った。

「でも、あの子には軍服よりメイド服の方が似合つただらうなあ

「あれ、ヨーゼフ様?」

シユウがちょっとからかうように見ると、相手は軽く笑った。

「別に、必要以上の興味はないよ」

「ホントですか～？」

……王子と側近の会話として、どうなのだろうか。ヨナはそう考えていた。

「それでシユウ殿」

ヨナは本題に入るように促した。

「ええ、エレイズ様とラファイン大将軍の件ですね。どちらも討伐成功、幹部をこうそり生け捕りにして連れ帰ったそうです。王様にはスケープゴートをお見せして。また、彼らの帳簿やらなんやらという記録も押収して……これは燃えてしまつた事にしたそつですけど……現在、じつくり調べてると」

シユウはロザリアのライト・ラビットから送られた情報を簡単に伝えた。

「証拠が上がれば、調査団をウラディスのところへ送る事も出来るのですが」

「そうすれば……連中の動きだしを待つまでも無くなるかも知れないね。国家防衛に熱心な大将軍が国家の敵に早変わりする

ヨナとヨーゼフが続けざまに言つたが、シユウは首を傾げた。

「そんな簡単に行く気がしないんですね。……カンなんですけど。

ダグラスはかなり抜け目ない性格であると思えますよ。彼が闇魔法組織とウラティスの繋がりに絡んでいたとしたら、手を打たせているはずです」

「確かに考えられますね」

ヨナも同意した。

「現実問題、ウラティスよりもダグラスの方がずっと厄介な相手だね。彼の弱みを握れればなあ」

ヨーゼフの呴きは、誰もが思うところであった。しかし、その厄介な相手は地位と名誉という分厚い防壁にきつちりと守られている。並大抵の攻撃は寧ろ、跳ね返される危険さえあるのだ。

「どうしてもやはり、十分に備えて待機……が一番のようですねえ」

シウウは天井を仰いだ。

\*

その3日後。フレア、ジョイド、ヨナは再び薔薇園に集合していた。今回、2人を呼び出したのは他でもないフレア。

「見付かりました」

余計な事は差し挟まず、单刀直入に切り出した。

「一週間で片付けば上等と思つていたけど。早くて良かった。流石だね」

ジョイドが褒める。

「じゃあ、折角慣れてきたんだううナビ可憐にアンナは身内の不幸で里帰りだ」

「でもって、一度と戻らない訳ですねえ」

何となく、良くしてくれた先輩達に悪い気がしたが任務なのだと割り切る。

「ビーナスだつた？」

「2階の、衣装室の奥でした。確かに、あそこなら敵軍や反乱軍が攻め寄せてても真っ先に駆けつけたりはしないでしょうね。名曰上、衣装室ですが日常は殆ど使われないようでしたし。入れたのは偶然みたいなものでした。

そこから、今度はこの薔薇園の最奥部に繋がっているんです。ここは裏庭に当たりますから……まあ逃げあおせられるでしょうね」

「王族つて狡いよねえ」

ジョイドが冗談か本気か解らない調子で言った。

「じゃあ、薔薇園から衣装室、そして国王陛下の寝室……それで地下図書館が最善かな」

「これが、陛下の先一週間分のスケジュールです」

ヨナが見せた紙には、分刻みで詳細に王の政務スケジュールが書き出されていた。

「決行はいつにしましょつか」

ジェイドは少し首を傾げながら、スケジュール表を眺める。そして、にせりと笑つた。

「3日後にパーティが開かれるね」

「はあ。知らないものはしょうがないんですけど、こんな状況でパーティですかあ」

フレアは思わず言った。

「この時間帯ならいいかな。マーゼフ王も出席なさる？」

ヨナは頷いた。

「なら、その警護としてシュウにもパーティ会場に入つてもらい王の動きを報告してもらえればより安全だ。貴族や文官だらけのパーティのようだから、皿を盗んで魔法を使うのは造作ない事だ」

ジェイドは自分で頷きながら続けた。

「ボクとフレアで行くよ」

「はい」

「例の召喚は？」

「フレイム・ラビットですね？」簡易召喚出来るようにしておきました

した

フレアはコートの裏側を見せた。そこには、入軍当初にリアが新入り達に見せたのと同じように……とまではいかないが、相当な数の魔法陣が縫いつけられている。その内、最も新しいのがBランクフレイム・ラビット。ウサギ型魔獣の特性を利用して情報をやり取りする為に、フレアは数日前にこの魔法陣を引っ張り出した。フレアが、余りにも可愛いと大はしゃぎしていたのでクーファが少々不機嫌になつていたような……。

「ミナ参謀長は出席を？」

ジョイドがそちらへ向くと、相手は苦笑した。

「私のような陰鬱な人間が華やかな場に出て行く道理もありますまい」

「なら、あなたには資料の持ち出しを手伝つていただきたい

「ええ、出来る」とであれば

ジョイドは手筈を説明し始めた。

## ウォーレン大将軍からの緊急連絡。

「ウォーレン大将軍……どうなさいたんですか？」

ローベルグが、追加資料を渡す為にウォーレンの執務室に入つたと  
ころで首を傾げた。いつも、何を見ても飄々としている彼の顔が青  
い。

「まさか食あた……」

「お前と一緒にすんなつ」

ウォーレンはクシャツと髪を掴む。

「つたくよお、全世界の美女を虜にする“何かに思い悩む美青年の  
図”が台無しだらうがつ」

「……そんな余計な事考えてるなら、大丈夫ですね」

ローベルグはそつ、ちよつと冷たく言つてスクに資料を置いた。

「それで、何が？」

ウォーレンは、口には出さず先日ラファインの軍が没収して秘密裏  
に回収した闇組織の記録を突き出した。

「これは、この前のですね……」

少しの間、目を通したローベルグはすぐさまウォーレンの表情の意味を理解した。

「「」れ、どうするんです！？」

彼にしては珍しく、大きな声を上げる。

「同じ事をされたら、一巻の終わないとさえ言えますよー。」

「解つてゐる。だから考へてるんだろうが……。あれ程の実力者を無力化した上に、死に追いやつた術という事になる。困つた事になつたぞ……しかも対抗策が解らん」

「「」の話、エレイズ大将軍には……」

「絶対、教えるなよ。いや、頼む……黙つておいてやつてくれ」

ローベルグはかなり、驚いてしまつた。彼を知らぬ者よりはずつと、ウォーレンという人物は情に厚く、身内や友を大切にする者だと解つてゐる、のだが。それでも、彼の合理主義的物の見方がここまで覆される事は珍しい。

「いいな、ベル？」

「……解りましたよ。ですが、それとなく王城潜入組には伝えるべきですよ。

もしかしたら、王城地下の秘密の書庫に対抗策が見つけ出せるかも

しませんしね」

「じゃあ、その連絡はお前がしてくれるか。

あと、……ウチの内部にもこの事を一切漏らすな。万が一エレイズの耳に入つたら……」

「そうします」

ローベルグは、のほほんとした平生の表情を少し厳しくして自身の仕事部屋に入った。

ウォーレン曰く、戦中より戦前、戦後に役立つ副官であるローベルグの主立つた仕事は書類の管理やぼんやりとしたイメージである彼とは結びつきにくい、軍師の仕事である。ローベルグの部屋は一面、兵法の書物や過去の記録書類、それから現在仕分け中の書類で溢れかえつて、書庫のような有様なのだ。

ローベルグは便せんを引っ張り出すと、意外な程に綺麗な字で何やら書き連ねると封筒にしまって呪文を唱えた。封印呪文であり、対応する解除呪文を掛けない限り封筒は開かないし、誤った開き方をすれば燃えてなくなる。

この解除呪文はヨナが知っている。

それから今度は、鳥形魔獣を召喚した。役割にぴったりな、小さな鳩のような魔獣。Cランク光属性の魔獣で、方向記憶能力に優れている上に光属性らしく移動速度がとんでもなく速い。ローベルグが愛用する情報伝達手段が、以上のものだ。

\*

ローベルグの鳥は、間違える事なくヨナの私室の窓に辿り着いた。幸運にも、部屋の主はそこにいたので鳥にすぐ気が付いた。

『ローベルグ殿か……』

窓を少し開き、鳥を中に入れてやると脚に紐でくくつけられた手紙を外す。鳥はその後も飛び立たないとこ見ると、返事をもらつてくるように言いつけられているのだろう。

ヨナは手早く、封印解除の呪文を唱えると手紙に目を通した。

読み終えたヨナは、ウォーレンに負けずと顔色を悪くする。顔色が悪くなるだけではなく、彼の薄い唇は解りやすい程にわなわなと震えた。そして、

「エレイズ大將軍には決して知らせないでください……」

最後の一文を口にして、無理矢理といつていよいよ笑みを浮かべる。

「出来る事なら、私にも知らせないで欲しかったな

呟きながら、了解の返事を手短に書いて鳥の脚にもつ一度紐でくくりつけた。待つていましたとばかりに鳥は窓から高く飛び上がりいく。青い空に白い鳩が浮かぶ明るく、健やかな印象の光景は丁度ヨナの心と正反対であった。

もう一度、思わず文章を読み返してしまつ。

『あれは病気では無かつたといつのか』

だとしたら、彼を闇魔法で死に追いやった者がいて、そして彼を最終的に殺したのは自分達の無知だといつことになる。

ドアに鍵を掛け、カーテンを閉めるとヨナは椅子に崩れ落ちた。

誰もが、ヨナの事をいつでも冷静で理知的、機械的に物事を処理出来る魔法使いだと思っている。しかし、彼だけは彼が他でもない人間だということを知っている。人間の彼にとって、今回、ウォーレンが光を当てた問題は些か辛すぎた。冷静でなどいられるはずもなく、今も顔を上げる事が出来ない。ところが、この姿を誰にも見せる訳にはいかない。唯一、この感情を共有できる者として浮かび上がる的是エレイズであるが……彼女はこの話を知らない。知らないといいと、ヨナも思う。彼女を女と莫迦にしているのでは決してない。あくまでも、合理的に考えた結果、今彼女の動きを止めたりその方向性を変えてしまつような出来事が起こらない方がいいと、そう思うのだ。

『神というモノが存在するなら……それは情けやあわれみという言葉を知らないのだろう』

ヨナは深呼吸して気を取り直す事を成功させると、立ち上がった。ヨーゼフ達に知らせなければならない。恐らく、フレアとシュウは彼のところにいるだろうから、そのどちらかにジョイドへ知らせてもらえればいい。

語られた、限りなく眞実に近いと思われる推測。

「失礼します」

ヨナの予想は、ぴったり正解であった。いつものように、ヨーゼフとフレアとシユウがごく普通の友人同士のように長机を囲んで紅茶を飲みながら歓談に耽っていた。

「ヨナ、どうしたの？」

そう尋ねるヨーゼフの声が、不安というか心配に染まったのを察して、ヨナは表情を取り繕えていなかつたらしい自分に苦笑した。

「好ましくない知らせです」

その言葉に、フレアとシユウも背筋を正してヨナの次の句を待つ。

「先程、ウォーレン大将軍の副官、ローベルグ殿から連絡がありました。ラファイン大将軍がお持ち帰りになられた資料の中に、気になる部分があつたという事です」

ヨナはつらつらと続ける。一見すれば、ほんの数分前までは精神的に酷いダメージを受けたように俯いていた男と同じ者だとは思えない。しかし、付き合いの長いヨーゼフにはその目がいつもより落ち着きが無い事が判つていた。

「フレア、シユウは当然ながら面識は無いのでしょうかが4年前まで大将軍はもう1人いらつしゃいました」

「ユウ大将軍ですよね」

ショウが言い、ヨナが頷くとフレアは思わず声を上げた。

「えつ、ユウ!-?」

「……?」

全員の視線が一気に集中してしまったので、やむを得ずフレアは先日、メイド長カイラからその名を聞いたのだという事を説明した。

「ヨウまで来たら、隠す事もありませんか

ヨナはちゅうと溜息をついた。

フレアが言わなければ、ユウとユレイズの繋がりについては黙つているつもりだったのに。それから、もう一つ黙つているつもりだった事があるが、こちらも話す事にした。

「それだけではなく、ユウは……私の兄なのですよ」

「……!-?」

フレアとショウは紅茶を噴き出しそうになつたのを我慢し、咳き込んだ。

それはつまり、もう少しでユレイズとヨナは義姉弟になるといふだつたという訳だ。世界は狭いというか、何というか。

「でも、亡くなつたんですね……」

フレアが言つと、ヨナは沈痛な面持ちで頷いた。

「今回、発覚したのはその死因です。

我々はずっと彼は精神的な病を患い、自殺をしたものと考えていました。考えていた……というより、事実、そうとしか判断できない状況だつたのですよ。

彼は死ぬ2年前から、様子がおかしくなり始めました。私とは正反対に、明るく社交的で……誰からも好かれのような性格の持ち主で、祝宴や舞踏会の折には場の中心となれるような人でした。しかし、ある日を境に突然、人に会うのを拒むようになりました。私やエレイズ大將軍が何とか説き伏せて様子を見に行つても、……どう言えば伝わるのでしきうね。沈みきつて……不信に充ち、次の瞬間にも誰かが自分を殺すのではないかと戦々競々とした有様で。兎に角、我々の知る“ユヒ”はそこにはいなかつた

「実際に、そういう病はありますよね？」

シユウが言い、ヨナはうつそりと頷く。

「まず、それを疑いました。しかし、具体的な治療法もありませんので。兎に角、医師のアドバイスに従い、私とエレイズ大將軍は手を尽くしました。しかし、良くならぬどころか悪化する一方で……。仕舞いには、具合の悪いときは私やエレイズ大將軍でさえ近付く事を拒み、飲食も拒み……」

話しながら、ヨナの顔はどんどん暗く沈んでいき、感じやすいフレアも真っ青になつて自分の腕を抱いていた。ヨーゼフは何か思い出すように遠い目付けて黙つており、シユウは唯一人、冷静に話しの

行き着く先を推理しているようだつた。

「その頃から、ヘレイズ大将軍は10分と離れず付きつきりで看病するようになりました。既に大将軍としての地位を持つていた為、私や彼女の副官達は何とか止めさせようとしたのですが、まるで何かに取り憑かれたように決して何者の言葉にも耳を貸そうとしなかつた。ウォーレン大将軍やラファイン大将軍が訪れても、同じ事。我々は、彼女まで壊れてしまうのではないかと不安で絞め殺されそうでした。

ですから……そんな時、王城で軍事会議が行われる事となつて、我々はこれ幸いと半ば無理矢理ヘレイズ大将軍を引っ張り出しました。これが、いけなかつたのでしょうか？

ミナの声はからからに乾いていた。

「その日、1人になつた兄は窓を割り、その破片で自らの首を裂いて死にました」

沈黙が部屋を支配する。

「だが、そうしていても仕方がないと考えた。それは、シユウであった。

「それで？ もしかして、原因は闇魔法か何かだつたのでしょうか？」

フレアは吃驚したようにシユウを見た。彼女はすっかり世界に入り込んで、今にも泣き出しそうになつていたのだ。

感情を一切感じさせないヨナは、静かに頷いた。

「そういうた闇魔法の研究資料が、出て来た訳です。恐らく……いえ、間違いなく彼はその魔法に殺された。実行者はどう考へても、ウラディスまたはダグラスでしょう」

「同じ事を仕掛けてくる可能性が高こうって話だね？」

ヨーゼフが言ひ。

「はい。

そこで、フレア」

「あ……は、はい」

「明日に、ウォーレン大將軍からその魔法の資料が送られてきます。ジエイド殿とそれを確認して王城地下の書庫で関係資料を探して頂きたい」

ぎゅっと唇を引き結んで、フレアは頷いた。

対抗策があつてほしい……いや、なくてはならない。きっと、誰か大切な人がそんな殺されたをしたなら、自分はその後……恐らくまともに生きていける気がしない。誰にも、そんな思いをさせたくない。

「もう一つ、いいですか」

シユウが口を開く。

「その大会議の招集を提案したのは、誰ですか」

疑問というか、確信を持った問いかけであった。

ヨナはその質問の意図に気が付いて、はっと息を飲んだ。

「大会議の招集権があるのは、王、軍師、それから……宰相」

「あなたではない？」

「当然です。王でもないでしょ……ダグラスか？」

思わず、吐き捨てるような物言いをしてヨナは一同を驚かせた。

長年の疑問が解けるかもしない。だけど……。

「時間を掛けて、反抗勢力となつたる者達の戦力を裂いてきたんだ」

ヨーゼフは呟く。

「ウラディスラフがもうじき、大きな動きを始めるといつと……その前にこちら側の3人の大将軍、その有力な部下が危険だね」

フレアは思わず身を乗り出した。

「どうすれば……？」

「そういう可能性がある、といった事は誰もが判つてゐるが、

シウウも難しい顔で首を傾げる。

「そのユエ大将軍は、実際的な力関係で表すとどの辺りに？」

「彼に腕を並べる力を持つた魔法使いはいませんでした。……強いと言つならば、彼も亡くなっていますがアーヴ殿くらいで」

ヨナの答えにフレアは厳しい表情でそちらを見た。

「これも推測ですけど、父さんの死にもウラディスラフ側の者が絡んでいるだろ」と考えてます」

固い声色で叫げた。

「それは？」

「ウォーレン大将軍の考えです」

「成る程……確かに、考えられますね。ヨーゼフ様、」

彼が皆まで言つ前に、ヨーゼフは言つ。

「その調査をしよう。僕に動かせる兵は無いのが不自由だけど……。エレイズ大将軍かウォーレン大将軍に掛け合つてみてくれる？ 謀報部隊を組織してくれないかと。調べて欲しいのは、アーク殿の任務記録。それからロンバルディア城の魔力分析をしてほしい……。あのレベルの魔力ならば10年以上、残滓が残っていてもおかしくはない。特に」

少し躊躇つようになフレアを見たが、

「そこが彼の死んだ場所ならば」

と言つた。

「何故、ロンバルディア城でアーク殿が亡くなつたと？」

事務的な感情と、興味を半分ずつ持つてシウが質問を投げた。

「うん……。もし僕が誰かを暗殺するならば、呼び出したりなんて間抜けな事はしないだろうなと思つたんだ。その証拠が出たら、真

つ先に疑われるからね。

一番良いのは、“たまたま居合わせた場所”で目的の人物が死亡する事だ。それで、10年前に行われた戦争とも名の付くロンバルディア城の大規模任務を思い出した

「……その頃、王子様はお幾つですっけ

シユウが微妙な顔で突っ込むと、彼は微かに笑った。

「シユウだって知つてたんじょ？ 過去の資料はヒマにまかせて、何度も何度も見てたからね」

「……あつ

フレアは立ち上がつた。

「そういう話しをするなら、クーファ連れて来ます！」

「そうか、彼はアーヴ殿の契約魔獣でもあつたのか！」

ヨーゼフは目を大きくして頷いた。

「ロンバルディア城だと……？」

クーファは首を傾げた。

「何か覚えてない！？」

全員の注目を集めた真っ赤な、小さいドラゴンは腕を組んで考え込んでいたが口を開いた。

「そいつは、俺が召還後数分で帰された戦いだな」

「何ですって！？ だって、とっても大規模な戦いだつたんでしょ！？」

クーファ、大活躍じやない！」

「いや、そつとも限らない」

シユウが口を挟んだ。

「ロンバルディア城は、ダークヒル城よりも小さな城だつた。国境近くに位置する、一種の防壁的な役割を持つた城だつたんだけど。その時ロンバルディア城で行われたのは、一種の内乱……国内の問題だつたんだ。そこでもしも、クーファが本気を出して暴れたら、ね？」

「隣国にも……文字通り火の粉が飛ぶ？」

フレアの納得した声にシユウは頷いた。

「だから、最初の威嚇程度でクーファは下されたんだよね？」

クーファは感心したようにシユウを見た。

「アークの説明そのまんまだ！」

「ここで、アーヴ殿の身は更に危険になつた訳だ」

ヨーゼフが言った。

「もしも、クーファが召喚されていた状態ならば、誰一人として彼に手出しは出来なかつたもの……」

「クーファを召喚した状態でない上に、戦いで消耗していた彼を戦いに紛れて……もしくは戦後、落ち着きと油断が生まれた時間を狙つて暗殺が執り行われたということですか」

と、シユウ。ヨナはそれに続けた。

「後者の可能性の方が大きいでしょう。戦中は、誰もが……つまりはアーヴ殿も気を張りつめさせていますし寝返りや敵の謀りにも気を配っていますから。あの戦いは、アーヴ殿のいらっしゃった国王側が圧倒的な勝利を收めました。また、ウラティス大将軍も同じ陣営側に」

「一つ確認するけど、それ以降君は召喚された？」

ヨーゼフの問いに対し、クーファは首を横に振る。

「それが最後だ」

「よし、後は確認だけだ。あれ以降、ロンバルティア城は放つて置かれている。証拠の品や痕跡が見付かれば儲けものだ。調査をよろしく」

「もし、連中が動く前にそれが証明できればウラティスを罰する……」

…とまではいかなくとも身柄を拘束する事くらいはできますね」

フレアにヨナはゆっくりと頷いた。

「それに、アーク殿は国王に目を掛けられていたとは言えませんが、民衆にはとても人気が高い魔法使いでした。ウラディスが彼の暗殺の実行犯といかなくとも、それに関わっていた事が国民に伝えられればアーク殿を今も慕う多くの人々は決してウラディスの思想を支持しないでしょう。國への反逆者にとって、國民の信頼を得られないというのは大義名分を失う事です。もしかしたら、無血のうちに事態を收拾できるかもしません」

ヨーゼフとシユウが、それを望むように頷く中フレアはそれに一拍遅れた。それに気付いたのは、クーファだけであったが。

子供だったので、意味はある。（前書き）

シコマスといふか、くわこ話です（苦笑）。どうも済みません。

子供にだって、意思はある。

「フレア、何考えてる?」

血室に戻つたといひ、クーファはじつとフレアの顔を見た。

「えつ、何が? いや、大変な事になつたなあつて」

「違うだらうが。無血の解決が、気にくわないか?」

フレアはギクリとしたようにクーファを見た。

それから、苦笑する。

「やな奴だよね~、あたし」

膝を抱えて、それに顎を乗せる。その姿勢のまま自嘲的な笑みを浮かべて心中を吐露した。

「父さんを殺した奴らを、あたしは殺してやりたいて思つてゐたい。

今、気付いたんだけどね……」

「フレアよお、」

「昔はそんな事、ちつとも考えなかつた。出来るとも思わなかつたから。

だけど今は……出来そつだなつて考えちゃつて。やつすると、止ま

らなくなつた。

判つてゐるんだけど。ウラバテイス達との戦いが起つて事は、国で内乱が起つて事で、それにはあらゆる軍の人達が駆り出されて戦つて。ヨーゼフ王子や、シュウ、ヨナ参謀長があんな風に無血の解決を望む気持ちはよく判るんだよ。あたしだつて……。だけど、正直な気持ちでの時、領けなかつた

泣いてはいない。しかし、彼女の瞳はまるでガラス玉になつたかのようにいつも輝きを失つて単調に部屋の風景だけを映す。唇は話す度に震え、黙つてゐる時は真一文字に引き結ばれる。

「なあ、フレアよお」

クーファはぱたぱたと飛んで、フレアの真正面に浮かぶ。

「俺、最近考えるんだけどな。お前は色々なもの背負つすぎ……つてこうか、周りがお前に色々なもの背負わせすぎだぜ。俺はよお、時々……本気で今俺といるのがアークのような気がしちまつ。それくらい、お前は強くなつたし頼もしいよ」

「……クーファ？」

「だけど、それを反省もしてんだ。だって、お前はまだまだガキなんだもんない。

戦つた回数だつて高が知れてるし、俺がいるから命を掛けるような場面に遭遇した事も未だに無い。それなのに、一人で何でも出来るし、決定できるだなんて嘘だろ？よ」

「でも、仕方無いんだよ。だって、どれもあたしの問題で……」

クーファはぎりつとフレアを見て、いきなりバックして勢いをつけ  
ると……。

「イターッ……」

フレアはのけぞつて額を押された。

「何がしたいのよ。体当たりなんかしてさあ

抗議すると、クーファは大儀そつに頷いた。

「俺とお前が初めて会つた時も、こうなつたんだよなあ。ま、あれ  
はアクシデントだつた訳だが」

「何が言いたいのよ

「お前は、その時から1歳だつて年取っちゃいないガキのまんまだ  
つたなあと思いついたわけだ！ お前の身には確かに、俺を永久召  
喚するなんてファンタジックな展開に引き続き色々な事が巻き起こ  
つた訳だが、どれもこれも……巻き込まれただけだ。お前がやりた  
くてやつた事は数えるほどもねえ。

だから、やつと選ぶ段階に……いや、場面にきたんだから堂々と選  
べ！ ガキの選択でかまわねえよ。誰が呆れよつと、反対しようと  
この俺様、クーラファンドラ・フレイム・ドラゴンが最後までお前

の味方でいてやらあ！

それに、俺は思うぜ。幾らアーチが細工してようと、お前に何の力もなけりや俺を召喚なんて出来なかつたし、出来たとしても途中で色んな事を投げ出してたつてよ。

お前なら、どんなファンタジックでも起らせるぜ！」

フレアは驚いた顔をしていたが、笑つて俯いた。

「あんた……ファンタジックの意味判つてる？」

顔を上げたフレアは、クーファと皿が皿ひと皿に出して笑い始めた。

「なにをお？？」

「あーー、おつかしい！ これ、前にもやつたよねえ」

「ブツ……確かに。」

つまり、お前の突つ込みのセンスは向上してねえつてこいつたな！」

「何よお、あんたのボケだつて向上してないじゃない！ 別の言葉にしなきこよね」

「おうつ！？ お前なあ、俺だつてファンタジックの意味くりい……まあ、ええと……

「判らないんじやん」

「あ～」

フレアは一頻りわらうと、頷いた。

「でもありがとうね、じゃあ、選ぶよ」

「おう！」

「戦う、戦わないはまだ決められないけど……。だけど、あたしウラティスと話さないといけないと思つ。聞きたい。本当に父さんを殺したのか、それはどうしてなのか……。あと、この国をどうしたいのか」

クーファはちよつと笑つた。

「国は次いでかよ」

「わ、悪かつたわね！　しょーがないでしょ、あたしは子供なんだから」

ふんつと鼻を鳴らす。

「おうおう、別に悪かねえぜ。子供に正直さは大切だな！」

「何か莫迦にされてるー。」

クーファは遠慮無く大笑いし、フレアもつられた。

偏屈な王妃様と常識者の軍師殿。一方、計画スタート。

「ヨーゼフ」

「はい、父上」

常日頃、フレアやシュウに気兼ねなく悪口を言つてはおぐびにも出れば、ヨーゼフは父王の前で膝を着く。

「今日の午後開催するパーティーの目的の一つは、お前の婚約者を見付ける事もある。あまり、いつものような無礼な行動はとるな」

「……気を付けましょう」

交わされた言葉はそれだけで、互いに何の未練もない様子でヨーゼフは踵を返しヨナを伴つて退室した。

この父子に、家族の情は存在しない。今は亡き王妃とは文字通りの政略結婚、それ以外のなにものでもなかつた為、その子に愛情は向けられにくかつた。王妃が王と上手くいかないからと息子を代わりのように愛し、息子と過ごす時間の半分も夫と過ごせなかつたという事も例え愛した妻がそうしていたのでなくとも、王の矜持を傷つけ、夫婦の溝を広げるには充分だつた。

母にだけは愛されたヨーゼフであつたが、まだ7歳の時分にそれも終わる。産後から何かと体調を崩しがちであつた彼女は当時、王都に渦巻いていた流行病に命を奪われた。だから、ヨーゼフは親子の絆というものがよく判らない。母が自分に抱いていた愛情は、い

きすぎた庇護愛であつたと思つ。また、自分を愛さなかつた王への復讐心から強引に息子への愛情をひけらかしていたとき、昔を振り返つた時にヨーゼフは考える。

幸いにも、 - - これは父親の望むところではなく更に父子の溝が深まる要因になつたのだが - - 友人には恵まれ、寂しくつまらない子供時代を過ごしたのではない。だから、憐れまれる筋合いはないと本人は断言する。

だが、彼が真っ直ぐ育つたかといふと……。彼の意識しないところで、彼はしつかりと屈折していた。庇護を何より嫌うようになり、自分に媚びへつらうような者も徹底的に見下すようになつた。それをしないのが世間一般で無礼、と呼ばれるとしても自己を飾り、隠す者がヨーゼフは嫌いである。

そんな彼が、ヨナと共に退室した時に口にした言葉はヨーゼフのそんな気性を誰よりも理解する彼にとつては予想済みの言葉だった。

「パーティに集まる連中なんて、能無し貴族の能無し娘ばかりに決まつてゐる。喋つても面白くないだらうし、顔だつて化粧を剥がしたらどうなつてゐることか!」

「……ヨーゼフ様」

「予想済み……と思つたが、少し予想以上に機嫌が悪い。

「自分の失敗を繰り返す気なのかなあ」

「……いえ、恐らくその失敗を起さない為にヨーゼフ様の田でお相手を選ぶよ」とパーティを開かれるのでは？」

「貴族娘なんて、見るまでもない。宝石とドレスが貰えれば、何でもいいんだから」

「……そう仰うぢにどうか」

「ヨナは僕がそんなつまらない相手と結婚すれば良いことと思うの？」

「そりではなく。

言葉を交わせば、面白いと思う方もいらっしゃるかもしれません。頭から毛嫌いする事はせず、義務的にでも構いませんから積極的な風を装つてくださいませ」

すると、ヨーゼフは笑った。

「判つてゐるじゃないか」

「……？」

「装うしかなって事をさ。それより、僕はパーティの裏で進む事が楽しみで、パーティなんかに構つてゐる気持ちの余裕が無さそうだよ」

ヨナは呆れたと同時に、安心した。

この調子で、自分もパーティを抜け出してフレア、ジェイドと王城地下書庫に侵入すると言い出しそうでハラハラしていたのだ。実は、

ヨーゼフはヨナに（無理矢理頼み込んで）教わって、魔法がかなり使える。兵達のように戦えるレベルではないが、ある程度ならば自分の身は自分で守れる。だからヨナも、こぎとこうときの武器にならじょじょがないと思いついたのだが……最近後悔氣味である。

「僕も何かしら手伝える気がするんだけどな～」

「おやめ下さい。ヨーゼフ様に万が一の事が起つましたら、彼らの努力が水泡に帰します」

とこうせんの会話を、じいじのところひつひつと繰り返している。

「フレア、用意はいいかい？」

「はい」

フレアの肩にはクーファ、そして足下には赤茶色のモ並みであるフレイム・ラビットがいる。何かあれば、ショウのアイス・ラビットからこのウサギに情報が送られてくる。先程、早速、王がパーティ会場に到着したとの知らせが来たので一同は薔薇園の隠し通路から二階衣装室まで行き、そこから王の寝室への隠しドア付近まで行って待機していたのだが、そのドアへ近付いた。

「鍵は？」

「閉まつてます」

フレアが少し顔をしかめると、ジェイドはふと笑う。

「「」の前、強制解錠の呪文を教えたね？」

「やります……」

何となく、悪党っぽくて使わなくて良いなら使いたくない魔法だつたのだが……。仕方ないので、ジェイドに従つて鍵の部分をピンと指さす。

「アンロック」

声と同時に、ガチャリ……と音がする。フレアが何でも無さそうにドアを引くと、何の抵抗も無しにドアは開く。当然のように、2人は魔力探知で何らかの結界が張られていないか確認済みである。

中は、随分と豪華な部屋だつた。王のプライベート空間など当然見たこともないから、少し驚きである。王族の部屋として、初めて見たのがヨーゼフの部屋だったのがそもそも原因か。彼の部屋は、高級感漂つもの、基本的にシンプルな部屋なのだ。しかし……。

「うーん、どうでもいいけど悪趣味だ」

ジェイドが半笑いで、地下への入り口を探りながら呟いているが、その通りだとフレアも思った。

金を基調とした家具の数々、天蓋付きベッドも無駄に豪華。ふかふかとしたカーペットはきっと、毛皮だろう。

「おい、これじゃねえか！」

フレア、ジョイドに協力して部屋の中を探っていたクーファが少し控えめな声量で2人を呼んだ。

「うん、そうみたいだ

「お手柄じゃない！ クーファ」

「へへへ、ビワよ、褒めろ褒めろ！」

しかし、フレアとジョイドはクーファを褒める間も惜しんでカーペットをざかし始める。

「クーフアちよつと、あっち行つてて」

「え……え？」

完全犯罪！？ 良心が……とか言つてゐる場合じやないね。

「出て来たね」

「しかし、ここのまま行つて大丈夫か？ 誰か見に来たり……」

「大丈夫よ」

クーファの懸念に対し、フレアは断言した。

「何かあれば、ここの子通してショウが教えてくれるし、部屋には復元魔法を掛けるから」

「お前……たくましくなつたなあ」

\*

「じゃ、ヨーゼフ様。俺はあつちでぼーっとしてまーす」

ショウは、貴族の戯れなどに付き合つていられるか、とでも言つてうにせつたと壁際でじつとしている警備兵に混ぜつて行つた。

ヨーゼフは少し名残惜しそうだったが、彼が本気で嫌そつたので強引に引き留めるのは止めた。

『あ～ああ、ショウは行つちやつしヨナもいなし……。早く終わらないかなあ』

そんなヨーゼフの溜息には構わず、既に何人かの公爵だか伯爵だか何だかの令嬢がとびっきりの色目を向けてきている。適当に笑つて受け流して、敢えて政治家達に難しい話をふつかけていく。こうすれば、大抵の令嬢様方は寄つてこないのだ。

今回も、つまらないだけの会合だなと思いながら適当に知恵者振りを発揮していると……意外な事に面白そうな展開となつた。

「あら？ シュウじやありませんこと？」

ヨーゼフはその高い声に思わず振り返つた。シュウに声を掛けたのはそう……確かに、エルミール伯爵の長女、カナリエ・ミラ・エルミール。

「はい、確かに僕はシュウという名ですが。カナリエ様とはお初にお目に掛かります」

「まあ！ 兮談はよしてちょうだい！」

どんどんと人が注目していく。エルミール家はかなりの財力を持つ貴族社会では有名な家。その令嬢カナリエは、人に命令する事に慣

れた高慢さが可愛くないとヨーゼフは思うのだがそれ以外は評判がとてもいい。……要するに、かなり美人だ。長い黒髪は見事なまでに巻かれていて、かなりのボリューム感。きつそつだが、目はぱつちりと大きく、唇はふつくらとして愛らしい。

「名前も顔も同じ、別人がいてたまるものですか！　まさかわたくしをお忘れになつたのではないでしょ？　余り面白い冗談ではなくつてよ、シユウ！」

叩きつけるように、言葉を浴びせかけるカナリエにシユウは苦笑を浮かべていた、完全に、困ったように周囲をキヨロキヨロ見回しているが……助けが入るはずもなく。それどころか、周囲はざわめく。

「シユウ……？　まさか、行方不明のトーラス公爵の「令息？」

「まさか、でも年齢もおかしくない」

「というか私は見たことがある……間違いない、本人だ！」

「シユウ・ローレンス・トーラスというと……カナリエ殿の婚約者ではなかつたか？」

「それが嫌で逃亡したという噂を聞いたぞ」

「しかしそれなら、何故こんなとじゆうで兵に混じっている？？」

これらの会話は、『く小さな声で交わされたものだったからカナリ

Hには全く聞こえなかつた。しかし、仮にも情報収集が仕事であるシユウにはしつかり一語一語聞こえていた。

シユウは内心で舌打ちする。

これでは、何もかも台無しである。

『だから、この役目は嫌だつたんだ……』

\*

Hの寝室から一同が、地下へと続く階段に足を踏み出したところでフレアは早速、復元呪文を唱えた。これは、限られた空間内の物品……生き物以外をもとあつた場所に戻す魔法。だいたい、覚えたての魔法使いで5分前、慣れた者が使うと1時間程度前の状態まで戻すことが出来る。フレアはしつかりと時計で確認し、自分達が部屋に入った時間から逆算して25分前に戻した。30分以内で済んで良かつたと、こつそり安心していたり。

「Iのまま、まっすぐ地下に続いてるんですよね……？」

フレアが言つと、先頭を歩くジロイドが頷いた。

「何も無いといいけどね」

「それって……？」

「まあ、兎に角、警戒用の魔力網は常に張つておいて。ボクもそうするけど」

「はい」

魔力網というのは、フレアも隠密の仕事を学んで始めて知った魔力の使い方。攻撃用魔法のように、具現化させる事なく魔力を薄く広く自分の周囲に広げて未知の魔力が存在しないか確認する手段だ。今は、ジェイドとクーファ、それからフレア・ラビットの魔力しか感じられないで危険は無いと考えられる。

その頃、ヨナは魔力で強制的に気配と足音を消してヨーゼフの部屋に近付いた。衛兵が2人構えているが低音で囁くように唱えた催眠魔法で眠らせる。そして、ヨーゼフから渡された合鍵を使って易々と中へ。再び、内側から鍵を掛けると魔力の流出を防止する結界に物音を遮断する結界を重ねて作業に取りかかる。

ヨナにジェイドが頼んだ役割というのは、空間移動用の魔法陣をヨーゼフの部屋に用意する事だった。空間移動の魔法は、相當に難易度が高く、しかも動物は召喚獣を含め移動させる事が出来ない。静物を移動させる場合も、自由に転送場所を選択する事は出来ず、対応する魔法陣から魔法陣へと転送するしかない。今回はだから、地下でフレア達が転送魔法陣を描き必要な魔法書を、ヨーゼフの部屋にヨナが描いた魔法陣へ送り込むという形をとる。

何故、パーティが始まった後にひつそりとヨナは不法侵入のような真似をして魔法陣を描かなければならなかつたかというと、その魔法陣は相当な大きさになり目立つからだ。パーティの前となると、日頃は放つて置かれるヨーゼフの元にも使用人達が訪れて着替えや日程の確認をするため人の出入りが多くなる。また、出席する貴族が事前挨拶に訪問する事もあるため隠し通すより、今から描いた方が楽なのである。

『充分に警戒はしたが……。もしも、誰かが見ていたら免官は確實だな』

ヨナは作業を続けながら、そつと苦笑するのだった。

「わたくし、ずっと捗していましたのよ！ シュウ！…」

感極まつたように抱きつぶカナリエ。シユウはあからさまにぐつたりとしていた。

「どうしてこんな事に？ 何か、事情があつたのなら何故わたくしに話してくださいなかつたの！ わたしたち、婚約者同士でしう、一心同体じゃないの！」

叫び続けるカナリエから、シユウは何とか逃れる。

「カナリエ、俺は自ら望んで家を出たんだ。貴族生活なんて、真つ平ごめんだつてね！」

一旦、声を上げると何が何だか解らなくなってきた。

「いいかい？ 君達はそうやつて、女はドレスの裾を持つて男はその手を引くのを仕事のようにして生きていて楽しいのかもしね。宝石やら金貨やら、を溢れんばかりに手に入れて、使用人達に世話を焼かれる毎日を理想とするのかもしね。でも俺は違う！ 俺が欲しいのは自由だ。金品も使用人も家柄も、婚約者も決まつた将来も安定もいらない！ 俺は、自分で自分の生き方を決めて生きていくと決めたんだ。

ここでこうして、君と再会してしまつたのは想定外の不運だつたけど。だけど、もう関わらないで欲しい。君ならどうせ引く手数多だらうしね、何も俺なんかに固執する必要はないじゃないか。公爵家

は、この国にトーラスしか無いわけじゃない。君に相応しい結婚相手ならまだ他にいる。

さあ、判つたかい？ もうあっちへ行つて、俺の事などすっかり忘れて相応しい相手を捜しにいきなさい。ほらー。」

シユウは、感情を爆発させてから失敗に気が付いた。しかしう遅い。周囲の、好奇の視線はより一層強まって、どうじう訳かカナリ工は涙ぐんでいる。

「酷いわ、シユウー。わたくしは、わたくしはこんなにあなたの事を……」

「……は？」

「あなたはわたくしが好きなのは、あなたの身分だけだと思つていいのね。」

どう違うんだと、叫び返しかけてシユウは固まつた。

『……俺とした事が』

どうやら、カナリ工の性格といつか気持ちを完全に理解出来ていなかつたらしい。常識で考えていた。公爵家に嫁ぐ事で、将来の安定と強い後ろ盾を手に入れるいわば政略結婚を強いられて嫌々ながらその義務に従つているのはお互い様だと思っていた。……まあ、シユウはその義務から逃亡したわけだが。ところが、どうも違つらしない。

「なら、言います。わたくしは本来、カーローン公爵家の縁戚関係を結ぶ為に、アルバート様のところへ嫁ぐはずだったのですわ。

ですが、わたくし、あなたを初めて見た時……なんて綺麗な人なんかしらと思って、父様に無理矢理お願いしたのですわ、あなたの婚約を！」

「なつ……」

「わたくしは、ずっと、シユウを愛しているのですわ！」

シユウは、もう、崩れ落ちそ�だつた。

当然、感動の為ではない。

「何で……」

大きな溜息をつく。

「何で……」

キッヒ、……感情のコントロールを再び失つて相手を見た。

「何て迷惑な話だッ！？」

周囲が一気にざわつく。

全員が、……恐らく、シユウの表情をつぶさに観察していた友人ヨーゼフ以外は……ここで若き2人のフォール・イン・ラブシーンを見られると期待していたのだ。ところが、待っていたのはカタルシス（破局）。

「な……そんな」

シユウは心の底から、「やつちまつた」と後悔した。作戦上、常にこの会場にて王やダグラスを見張つていなければならぬのに、自ら居心地を最悪にしてしまつた。薄ら笑いを浮かべて流していれば良かったのだと今更気付く。だが、もつ遅い。

「どうしてそんな酷い事が言えるの、シユウーー！」

カナリ工を憐れみ、シユウを批判する声が溢れ出したところで助けが入る。

「それならば」

高らかに声を響かせた、シユウの救世主？ パーゼフ。

「貴女のお相手に、僕が立候補しても構わないようですね。いかがです、カナリ工嬢？ 一曲、踊つてくださいませんか」

客達の関心は、ものの一秒で切り替わつた。もはや、シユウは蚊帳の外の人間となり視線は一気に見事麗しいヨーゼフ王子に注がれた。

「えつ、そんな、わたくし……」

いきなりの事で、混乱に陥つたカナリ工を半ば強引に連れて行くヨーゼフはシユウに軽くウインクを投げるのを忘れない。シユウは心からのがどうを声に出わらず、口を動かして伝えると会場の反対側に逃げたのだった。

\*

ヨナは魔法陣の準備を終えると、次の仕事に向かう。先程、眠らせた兵はまだ目覚めていないので、樂々と部屋を出て鍵をきつちり閉める。それから兵を起こした。

「あなた達」

「は……」

「ヨ、ヨナ殿……」、これはそのう

我知らず（当然だが）の内に眠っていた事に気付いた2人は大慌てで、慈悲を請うようにヨナを見る。ヨナは静かに微笑んだ。

「お疲れのようですね」

喋りながら、素早く片手で印を結び始める。

「まあ退屈でしそうし、眠つてしまつ気持ちも判ります」

「ま、まことに申し訳ありません……」

2人は自分達の失態を許される事に夢中で、長いローブの袖下で動くヨナの左手などには気付かない。

「何事も無かつたのですから、咎めはしませんよ。結界もきちんと張られたままですしね」

「け、結界……？」

魔法使いでない衛兵であった為、馴染みのない言葉だつたらしい。

「国王陛下、ヨーゼフ殿下のお部屋には我々魔法使いが侵入者感知の為の結界を張っています。まあ、侵入を物理的に防ぐ効果は持たせんので、あなた達が必要な訳ですが。それでも結界に異常が起きたかどうかはこの場にいなくとも判るのでですよ」

「はあ……」

「では、これで」

ヨナが立ち去りかけたところで、一人が呼び止める。

「やついたら、ヨナ殿は何故こちらこ……」

ヨナは振り返らず、小さな笑みを浮かべ、左手をぎゅっと握った。それと同時に、一瞬だけ衛兵2人の意識が遠のいたようになると再び、正気に戻った時、その顔には疑念の1つも無かった。ヨナは確認する事もなく、とっくに角を曲がって姿を隠している。

「あれ？」

「おかしいな、何で前に出たんだ、俺達は？」

2人の衛兵は、互いに近く並んでいつもより一步前に出ていた事に首を傾げつつ通常の位置に戻った。

『ふう、彼らが魔法使いでなくて助かった。術に掛かりやすいことだ』

悪人のような言葉を心の内で呟きながら、ヨナは足早に薔薇園へ向

かつた。

図書館で資料集め……なんて生やせっこものじゃなー！

「！」の中から探すんですか……」

フレアはぽかーんと田の前に広がる光景を見つめた。地下書庫……とこりが、これは立派な図書館である。しかも、とびきり大きな天井まで届く本棚が、先が見えない程遠くまでびっしり並んでいる。その棚の中は当然ながら隙間なく本で埋め尽くされている。まだ装丁に傷1つ付いていないものから、色褪せたものまで。

「まあ、国内で出版された全ての書物が保管されているんだから当然だね」

ジョイドが何食わぬ顔で言ひ。

「でも、見るのは半分以下でいい。闇魔法が禁術とされておらず、普通に闇魔法の載った魔法書が出版されていたのは随分と昔の事だから。現代語のものは無視していいよ」

「古書の中から探せばいいんですね」

「そりゃ。じゃあ、手分けして資料集めだ」

フレア、ジョイド、そしてクーファは3手に分かれた。

入り口近くははどうやら、比較的新しい本で埋められているらしくフレアはさっさと通り過ぎていく。

『古語、古語……』

上下左右をじつと見ながらなので、かなり時間が掛かるがだいたい5分ほどで最初の通路を半分ほど進んだ。そこから、少しずつ古びた本が目に付くようになってくる。

だが、どれも一般的な魔法書ばかりで中にはフレアも見たことがあるような、ありふれたものもある。分類などは無いのかと今更、改めて眺めてみるも、どうやら単純に手に入つた順番に並べられているらしい。規則性は見当たらない。魔法書があつたと思えば隣に兵法書があり、政治学の書があり物語があり……。

『司書を雇うようにモーゼフ様に言おつかな！ 全く

絶対に、綺麗に分類別に並べ直すべきだと思った。

そして、30分は経つただろうか。全員が入り口に集まつた。フレアとジェイドは本を何冊か抱えており、クーファはそれらしいものがあつた場所に2人を案内した。本を何冊も運ぶのは、彼の腕力では無理だから。

「割と集まつたね」

ジェイドが感想を漏らす。

「ええと、7冊ですか。え、これで集まつたほう?」

「うん。闇属性魔法というのは、正式な書物に残されたり、書物にされていても大衆に出版されていない場合も多いからね。ここにあるのは、あくまでも一般販売された本だけだから」

「成る程……」

「だが、情報量つづと結構なものだろ? 分厚いのも多いぜ」

クーファが、自分の持つて来れなかつた10センチは厚みのある本を示す。

「じゃあ、転移を行おうか。ヨナ殿のことだから、準備はもう完全だろ?」

ジェイドはそう言つて、あらかじめ用意していた魔法陣を広げた。そこに本を全て乗せる。それから呪文を唱え、それが終わると本はすっと消えて行つた。

「うそ、転送完了。あとは無事に出るだけだ」

ジェイドに、フレアは頷いた。

「一応、シユウに連絡しましょつか」

「そうだね、状況確認もかねて

「はい」

フレアはフレイム・ラビットに今の状況と、返事が欲しい事を聞かせた。フレイム・ラビットが一瞬、強い光を放つた。情報を送ったのだ。

\*

「今、集めた資料を転送完了したところです。そつちの状況はどうですか？ 戻つても大丈夫？」

フレアの声が、アイス・ラビットから聞こえた。

シユウはラビットが通信があつた事を示すと、慌てたように見えぬよう努力してじつそりベランダに出たのだった。

「大丈夫。まだまだ、莫迦騒ぎは続きそうだよ。何かあつたら、また知らせる。ヨナ殿からは、全て滞りなくつて伝言がきてる」

シユウは、アイス・ラビットにそう歌を込んだ。

それから、一息ついて外を見やる。

『今日はとんだ災難だつた……』

まさか、あの娘に会つとは。家出のきっかけの一つなのには。

ちらりと中へ目をやると、カナリエはコーデフと一緒に踊り終えて、別の貴族男性に誘われている。シユウは酷い男という設定になつた

が、喜んだ者達も多いようだ。家柄も悪くないし、容姿もかなり良い。王子は単に、可哀想な姫君に恥をかかせぬよう紳士的にエスコートしたのだなと誰もが理解していたから、自分にチャンスがあるかもと考える男連中が次々に現れているようだ。

そして、気品高く振る舞う同じ年とは思えない元婚約者を見つつ自分はやっぱり、ちょっと物を知らないくらいの……驚いた可愛い表情が似合う、多少安っぽい印象の女の子がいいなと考えるのだった。

\*

シユウがのんびり、考え方をしている間、ヨナは静かに自室に戻るところだった。彼は、相當に疲れていた。元より、魔法の知識はとてもなく多いが魔力のキャパが痩せぎすの見た目に違わず、同じくらいの知識を持つ大抵の魔法使いより少ない。転移魔法陣をセツトし、警備員達を幻術で嵌め、他にもすれ違う度に同じように自分の姿を記憶から抜き取つて薔薇園ではフレア達が出て来たところで警備員と鉢合わせないように結界を……相當強力なものを張つた。魔法使いでない者は勿論、ヨナよりも実力が低い……つまり、大抵の魔法使いも今夜は正気を保つたまま薔薇園に入る事は出来ない。入つたとしても、気分が悪くなつて一歩や二歩で踵を返し、中で見たものの記憶など残らない。そういう結界魔法。ヨナは、あらゆる魔法の中で結界魔法を一番得意としている。

自室に戻ると、ふと鏡を見て苦笑する。疲れている事もあるが、何と暗い印象の顔立ちだつと。

「ンプレックスといつほどではないが、まさに光のような兄に相対して影、闇のような自分が嫌だと特に子供の頃はよく思っていた。しかも、魔法使いだから闇といつ言葉を普通の人間よりもずっと嫌悪する。

光は最高属性。光の魔法使いといつづなは、全ての魔法使いが憧れるところだ。しかし、闇の魔法使いは残忍な、悪の魔法使いと同義だ。

影のようと言われる度に、闇の魔法に手を染めている疑いを掛けられているような気がしてきたものだ。だが、今、闇の魔法を打ち砕くために奔走していると思うと酷く満足だつた。闇のようなヨナにとつて、闇と戦い、それを打ち砕く事は積年の望みだ。それが叶えば、自分も変われるような気がする。

\*

翌日。ヨーゼフの元に、フレア、シュウ、ジハイド、そしてヨナが集まつた。

「先に皿を通してもらつたけど」

ヨーゼフが、丁寧に長机に積まれている本を示した。

「幾つかは、古代語で書かれているし……」Jの國の古代語とはまた違つ言語が使われているものさえある

「同は田を驚かせた。

「Jの國で出版された本なのに?」

フレアがその驚きを声にすると、三十九少し考えてから

「じの本でしょ、もしかすると、他国の古代語ではなく、暗号文かもしれません」

と、彼は、職業上、あらゆる国の書物を読みあさつて、ため大抵の言語には通じて、それを知つて、三九〇ページ前後の一串を手にとつて渡した。

三九一ページを繰つて、三十九、「やはつ」と呟く。

「」のよひな文字列は見たことがありません。ジョイド殿、ビード三九二

受け取つたジョイドは三九三ページで眺めていたがやがて

「」の隊長なりま、じつで出来ぬじよ。彼に聞ける手段はありますか

と呟つた。

「それはお任せください」

三十九はすぐ答えた。

「じゃあ、三十九はすぐに取りかかつて

「はい」

「JAPAN……自助精神が強くなるせいがある。

「それと、もう一つ」

ヨーゼフは今度は3冊の本を手にした。

「これらは、隣国ガルベラの古語で記されてる。誰か、詳しい人に心当たりはない?」

すると、ジョイドがくすりと笑った。

3人が不思議そうに見ると

「いや、失礼」

驚く事を言った。

「ガルベラはボクの生まれ故郷。古語も学びましたから。そちらの翻訳はボクがしましょう」

「えつ、外国の生まれだつたんですか!…?」

フレアは、それはもう驚いていた。

「凄いですね。一切の訛りも、違和感も無い」

「シユウも気付いてなかつたんだ」

「うん。ロザリア隊長も知らないんじゃない?」

「そうだね。セバスチャン隊長とエレイズ様くらいだらう、この事を知っていたのは」

ヨーゼフはにっこり笑った。

「嬉しい誤算っていうやつだ。頼んだよ、ジョイド」

「仰せのままに」

下手をすると、慇懃無礼に見える態度で一礼したジョイドだった。

ジョイドはすぐに翻訳作業に取りかかるからと、部屋を出て行った。

「残りは、2人に頼むね。僕は残念ながら、読んだくらいじゃ使えないようにならないから。

イロハは学んだはずなんだけど、才能が無いのかな~」

少々、つまらなさそうにヨーゼフにシューは苦笑を向けた。

「それでいいですよ。王族が戦わなければならぬような状況が来たら、その国は終わりです」

「来る気がするけどね」

ヨーゼフは、少し、憂いを帯びた表情で言った。

「ヨナが言つには、最悪、父上を困にして僕を逃がすといつけど。だけど、父上がころつと騙されやすい愚鈍な人というのは特に、ダグラスなんかには知れているから。真つ先に連中が始末しようとするのは、僕だと思うんだ。僕とヨナがいなくなれば、多分、例え父上が存命でもこの国は彼らの手に落ちる」

端から聞けば、自信過剰にも思える台詞だが、2人をよく知るフレアとシユウは正にその通りなのだろうと思つのだった。

「だからさ」

ヨーゼフはこつこつした。

「お願いがあるんだけど」

「……はい？」

フレアとシユウは、同時に嫌な予感を覚えた。

「こつそり、僕に魔法を教えてくれない？ 最低限、身を守れる程度でいいんだ。逃げるにしても、丸腰よりは何かあったほうがいいでしょ」

「ですが、そんな簡単に王子に魔法を教えていいんですか？ ばれたら相當に面倒な事になりますよ」

シユウが言つのに、フレアが何度も頷く。だが、ヨーゼフは平然と

している。

「ヨナに頼んで、結界を張つてもうつよ。彼の結界魔法はなかなか凄いよ。多分、殆どの魔法使いの感覚を誤魔化せるんじゃない？  
ばれなきゃ、大丈夫」

シユウとフレアは顔を見合わせた。

「解りました」

と答えるしかない。

そして、翌日からフレアとシユウによる魔法レッスンが始まった。それは、朝一番、仕事を始める前にヨナがヨーゼフの部屋に魔力探知防止の結界を張るところから始まる。そして、何食わぬ顔でいつも通り王子の歓談相手であるフレアとシユウが入室。……至急、ダーケヒル城から取り寄せた魔法書を持って。

ある程度の基礎をヨナから学んでいるヨーゼフだから、初歩から始めるのではなく中級魔法書を使う。これを完全にマスターしてしまえば、大抵の魔法攻撃から身を守るバリアを張る魔法、身を隠す結界など、暗殺者……もつと荒々しい反乱の徒から身を守る術を得る事が出来る。勿論、フレア達が全力を賭して彼を守る訳だが何があるか解らないという意見でヨナも納得し、賛成と協力を約束してくれたのだ。

「中々、難しいね」

「ヨーゼフは少し疲れたようだった。

今日は、一番覚えるべきバリア魔法から始めている。シユウが丁寧なアドバイスをし、フレアが実戦を手伝うかたち。昔なら出来なかつたが、フレアもきちんと魔法攻撃の出力を調節できるようになつてるので中級の未完成のバリアでも食い止められる強度の魔法攻撃が出来るというわけだ。

「でも、お世辞じゃなく良い方ですよ。出来ない人は、初級のヒヨロヒヨロ魔法でも止められませんから」

シユウが言つ。

「繰り返し、練習すればすぐ実戦で使えるようになります。フレアの魔力はなかなかに、底無しですから幾らでもやひつと思えば出来ますよ」

何度も、微妙な難しい調節を行しながら魔法を使つているフレアをシユウは見た。

「そうかなあ？」

当人は首を傾げる。クーファの力を見て、間接的に褒め称えられることはあっても、自身が褒められる機会はなかなか無かつたから少々、驚きもあつた。

「炎が得意なんだね」

と、ヨーゼフ。

「他の属性も出来るの？」

「あ、はい。でも、炎が一番しつくじくるんですよねえ。一番最初に使った属性だからって事もあるんでしょうけど」

「へえ。シユウは？」

「僕は、光属性が一番得意ですかね」

流石にヨーゼフも驚いた。

「それ、軽く言つ事じゃないでしょ。光属性の魔法が使えない、上位魔法使いだつているつて聞いた事があるよ？」

「そうだったんですね！」

フレアも大層驚いた。

「シユウ、軍に入りたての時から出来てたよね！？」

「まあ、得意分野は人それぞれってところだよ。事実、俺、一般魔法はSランク程度まで使えるけど召喚はBが精一杯なんだ」

それについて……というのが、フレアとヨーゼフ共通の感想。

「今でも凄い軍だけど、将来のエレイズ軍はとんでもない事になりそうだな」

しみじみと言つたヨーゼフである。

それから一週間、何事もなく過ぎた。少なくとも、フレア、シュウ、ヨーゼフには変わつた事は起きていないし、耳に入つていない。特筆する事というと、王子様の魔法センスが相当に高く、もう当初の予定は半分以上こなしてしまつた事か。

「でも、攻撃用魔法が上手くないよねえ、僕は」

フレアとシュウが口々に褒めると、ヨーゼフは言つた。ちなみに、シュウはともかくフレアに王子に対する遠慮だとか気に入られようといつ下心だとなどはありはしないから褒め言葉の全ては本心である。

「まあ、防御用を覚えていただくのが僕等の目的なんですがね」

シュウが言つても、不満げである。

「……そうだ」

何か、とても良いことを思いついたと言いたげな明るい表情でヨーゼフは2人を見た。

「魔法が出来ないなら、剣で補つところのせどりだらう。」

「……は？」

「割と上手いんだよ。最近はやつてないけど、昔から剣はかじってて」

「はあ

フレアとショウは困ったように顔を見合わせる。

この王子、自助精神が強すぎるきらいがある。

「まあ確かに、剣で魔法に対抗する戦士もいますけどねえ」

ショウが言つ。

「せうなの？」

フレアにしては、初耳であった。

「この国は魔法中心だからね。大将軍の擁する各軍も、国王に仕える王国軍も。

だけど、他国には剣中心の軍だつてあるし、そういう国が魔法中心の軍に敵わないかというとそういう訳でもない。アルファーレーゼ公国とかは、魔法を諜報くらいにしか使用せずに戦場は剣や槍を持つ騎兵隊が取り仕切つているけど軍事力はかなり強いといえるよ」

「……相変わらず、ショウって博識だよね

「ま、情報部だしね」

軽く笑つてみせるところが少し憎らしげが、心底感心しているフレ

アは気にならない。

「ウチの軍だと、セフィー口副官かな。  
彼は、この国では本当に珍しい魔法より剣術に長けた高位の軍人だ  
よ」

それをヨーゼフが聞き逃すはずもない。

「セフィー口副官に教授してもうえないかな?」

「……は?」

2人は、先程とそつくり同じ反応をしてしまった。

「いやいや、しかしですね……」

「そうそう、それはちょっと……」

「ダメかな?」

「何で、いつもは老練の軍師みたいなのに仔犬のような顔をするんですか!」

フレアは思わず突っ込んだ。

表情が变幻自在過ぎる。王子のくせに世渡り上手だ。

「ダメもとで話してみてよ」

「……承知しました。俺が簡単に連絡取れるのを解つてて言つたで

すから、お人が悪い」

「あははっ」

楽しそうなヨーゼフと、呆れている側近2人であった。

エレイズ様が仮面の剣士に弟子入り……！？

「どういへ、セフィーー口」

くすくす笑いながら、エレイズは仮面の副官を見た。

「私は、魔法関連ではお役に立てませんから。必要とエレイズ様が『』判断されたなら」

「多分、良い子だと思つんだ、ヨーゼフ王子つて。あのヨナが心から従つてるんだからね。

……なんて言つたら、ヨナに失礼か」

「いえ、確かに彼はああ見えて難物でしうから」

「君が云つかなあ」

「……」

エレイズはまた、おかしそうに笑つて、頷いた。

「じゃあ、行つてらつしゃい。3人に宜しくね。シウとジェイドはいいと思つけど、フレアには無理するなつて言つておいて。命令だつてね」

「かしこまりました」

\*

セフィーロが王城にやって来た。

「お初にお目に掛かります。アーベル王子殿下」

「我が儘で呼びつけじめんなさ」

はにかんだよにになるアーベル。いやらしいある丁寧な挨拶には慣れているが、正真正銘の丁寧にはあまり慣れていない。フレアやショウはもう、お友達感覚であるし、アーベルも安堵が入っている。ジョイドもそう。

「あんまり、形式張らないでください。『迷惑掛けたのは』といったらですから」

アーベルの発言に、珍しい事にセフィーロが目を丸くした。

それから、微笑んだのには横で眺めていたフレアとショウなど「あつ」と思わず声を出して驚いた。この国では珍しい青い瞳を持つ彼らは、確かに整った顔立ちだが、厳しそうで静かな印象しか抱いたことが無かつたものだが……。こうしてみると、とても魅力的な美丈夫にさえ見えた。だが、微笑みはすぐに引っ込んでまだ彫像のような無表情に戻ってしまう。

『普段から笑えばいいのに』

そんな事を考えていたフレア。顔に出ていたのか、隣のショウが微かに苦笑していた。

魔法は、室内で問題なかつたのだが剣術となるともうと広い空間が必要。ということで、一同は中庭に出た。興味半分、護衛半分でフレアとショウも同行。

中庭は裏庭や薔薇園とは打って変わつて、簡素な印象を受ける。広く、上品に芝や木々が整えられてはいるが色とりどりの花が咲き誇るでもなく、豪華な彫像や噴水があるでもない。聞けば、ここで実際に兵士が剣の訓練を行う事があるというから納得であった。

セフィーロが使うのは、クレイモアと呼ばれる大剣。これといった飾り気のない、単純な形状の剣身を持つ。背は高いが、どうしても筋肉質に見えない体型のセフィーロが軽々と片手でその大剣を簡単に扱っているのは不思議で、一つの絵のようでもあった。

ヨーゼフは、ショート・ソードを持っている。ショート・ソードは名の通り、短めの剣であり、尖端にいくにつれて剣幅が狭くなっている。乱戦などを考慮し、丈夫に作られているのも特徴のひとつ。

「…………ヨーゼフ様！？」

剣の訓練について聞いていたヨナが様子を見に来たといふ、彼は驚いた声を上げた。そこにいたのは、息一つ乱さず、汗すらかないで涼しげで静かなセフィーロと反対に息を荒げて……王族としてあるまじき姿勢だが致し方なく、大の字になつて仰向けに倒れているヨーゼフであった。

「一体、どんな無茶をやらかしたのですか」

「いや、それがですね」

シユウが少し、面白がりながら説明する。

「何一つ、特別な事はしてないんですよ」

「……？」

ヨナが首を傾げてばかりというのは、なかなか珍しい。

「素人の俺達の見たところだと、唯單に、剣を打ちあわせてるだけなのに。たちまち、ヨーゼフ様は疲弊してセフィーロ副官はあの通り平然としてる訳です」

「はあ」

「やつぱり、体力無いですか、僕？」

身体に付いた土汚れも余り気にせず、上体を起こしただけのヨーゼフはセフィーロを見上げた。

「良い方ですよ。失礼ながら、もっと簡単に倒れてしまわれるかと思つていました」

やはり微笑んだりはせず、淡々と述べるセフィーロ。

「今までに、誰かに教わった事はおありですか？」

「王城仕えの騎士に、ちょっとだけ」

「……あまり、教えるのに向いた方ではなかつたようですね。まず、くせを直しましょ」

「はーい」

ミナは、何だか、驚きっぱなしのようであった。

「どうしました？」

フレアがその表情に気付いて質問すると、そちらではなく再び立ち上がつて、今度は細かなアドバイスをセフィーの口から受けているアーゼフに注目しながら

「いえ、アーゼフ様があそこまで……何とこうか活き活きしていらっしゃるのな珍しいので」

と、答えた。

「ああ、確かにキラキラしてますねえ」

シユウが同意する。

確かに、魔法を覚えている時もわくわくした様子ではあったが、今はそれ以上に楽しそうである。すっかり、セフィーロの弟子気分のようだ。

「もしかしたら、ヨーゼフ様は……初めて、尊敬する年長者を知ったのがもしません」

そう言ったコナは、どこか自分が自分の事のように嬉しそうだった。

「ここの辺りで止めておきましょ。身体を痛めては本末転倒ですの」

「うーん、わかりました」

ヨーゼフは少し、お残惜しそうに剣を鞘に収めた。そして、はにかんだ表情で

「あつがとうござまく、師匠」

と。

今日は、珍しい、驚いた顔のセフィーロを2回も見るのはとなつた。

セフイーロはヨーゼフの室があるのと同じ棟に数日、泊まる事となつた。ヨーゼフがお得意の？ “我が儘”を使用して城の人々を説得したのだ。

そんな彼に、フレアは呼び止められた。

「フレア、エレイズ様から伝言だ」

「え？ はい」

少し緊張して背筋を正したフレアは、拍子抜けする事となる。

「『無理するな、命令だ』とのこと」

「ええっ……そんな、無理してると思われるんですか？」

「さあ。……ただ、お前の昇級に関して、誰よりも悩んでいたのはエレイズ様だ。今でも、心配なさつているのだろう」

フレアは、何となく、エレイズがそんな事で悩んでいるというのが意外だった。いつでも、超然として、人と異なる姿しか見てこなかつたからだろうか。自分如きをそんなにも、エレイズが気に掛けてくれているというのが意外で、そして嬉しかった。

「それと、リアからも」

「リア副官……！」

「健康には気を付け、どんなに忙しくとも毎食きちんと取ること。

徹夜は出来るだけしないこと

「……え」

「寝る前はきちんと戸締まりを行うこと。人間関係で悩んだら、迷わず誰かに相談すること。悪い男に引っ掛けからないように注意すること。万が一怪我をした場合は、軽いからと放つておかないと。風邪の疑いがある場合は」

「あの、すみません」

「まだあるのだが。もういいか？」

「はい……ええとつまり、遠出をする子供に母親が言ことうな」と全部、つて事ですね？」

「そうなるな」

セフィーロの顔には特に表情が浮かんでいないが……リアに対する呆れが、どういう訳か容易に感じられた。

「……恐らく、お前がアーク殿の娘だと知つたからだろうな」

「え……？」

「あいつが、炎属性魔法を好むのはアーク殿を深く尊敬しているからだ。そのアーク殿が亡くなっているという事もあり、娘のお前の事が心配でならないのだろう。……感情移入して、父親の心境についているのかもしれない」

余りにも冷静にセフィーロが分析しているものだから、フレアは何だかおかしくて、笑ってしまう。

「……大丈夫か？」

笑いすぎて、苦しがっているフレアをまた無表情ながら呆れたように見るセフィーロ。

「いや、はい、大丈夫です……何か、おかしくって。  
でも嬉しいです」

「そうか」

何となく、そう言ったセフィーロの声が優しかった。

## 戦いへの準備と急な呼び出し。

「何だ、今日は王子のとこ、行かないのか？」

朝から、自室で本を読んでいるフレアにクーファは言った。

「うん。セフィーロ副官が、剣の指導をしてて……あたしにはする事ないし。それに、これを早いうちに読んでもおかないと」

フレアがパンと叩いた本とは、先日、王城地下書庫から拝借してきた闇の魔法書である。これを読んで、無効化する逆転呪文を作らなければならぬ。ウラディス達が、どれだけの魔法を知っているか解らないので、出来る限り対抗策を用意する事となつたから手分けして魔法書解読が急ピッチで行われているのだ。

「まあ、ウォーレン大将軍が既に一冊分、片付けたらしいけど。あの人、ほんと凄い」

フレアは遠くを仰ぎ見るような目付きで言い、溜息をついてから自分の作業に戻つた。

「ヨナ参謀長」

ジョイドが、少し寝不足なのか、顔色を悪くしてヨナを訪ねた。彼

は今、珍しく陽が昇つてゐる時間なのに血室にいる。

「終わりましたか」

「ええ、翻訳完了です」

「ウォーレン大将軍に見ていただきましょう。それが一番早い」

「おや、この前のはもう片付けてしまつたのでっ。」

「そうです。敵いませんよ……。」

彼と会つまでは、私も知恵者の端くれと、そう思つていたものです

が

ヨナは、知つたことではないがフレアと殆ど同じ表情で溜息をついた。ジェイドは小さく笑つ。

「それでは、立つ瀬がないと嘆く者が大勢いるでしょう。エレイズ様は、別件で天手古舞いの忙しさなのでしたつけ？」

「ラファイン大将軍と、ここのことにはずっと具体的な対応策について話し合われているのですよ。当然ながら、備えるべき相手は闇魔法だけではありませんから」

「でしょうな」

ジェイドは頷く。そこへ、もう一人がやつてくる。

「お、情報係が来ましたな」

「どうも」

シユウはこいつと笑う。

「セバスチャン隊長が、暗号文解読を終了されました。そのまま、逆転呪文を作る作業に入つてください」とうです。

あの人出来ない事があるとしたら、聞いてみたいですよね～」

「君の方の作業は？」

「もうちょいです。使うのと作るのは、また別ですかうね」

「マーゼフ様は今日も？」

シユウが質問すると

「ええ。大喜びで、剣の練習に没頭してますよ。すっかり、師弟です」

ヨナは微かに笑った。

「そうだ、ちょっとした懸念というか思いつきを聞いてもらつていりですか？」

「どうしました」

「いやね、闇魔法の書を見ていると相手の魔力を封じ込めるという

恐ろしい術があつたんですね。強制魔法解除。

だから、ある意味でヨーゼフ様が咄嗟に剣を使えるへりこになつておるのは良いことかなと。それから、ヨナ参謀長……魔法を使わぬ戦士を集める事なんて出来ますか？ この際、傭兵でも何でもいいですから

ヨナはじつと話を聞いていたが、すぐに頷いた。

「何らかの手は打つておきましょ。セフィー口殿に都合の良い知人など、いないかな

「そうですね。彼のお墨付きがあれば、腕も人格というか立場も心配要らないでしじうね」

シユウの言い方に、ヨナは眉を上げた。

「連中が、そういうた者を集めていると？」

「可能性の話ですけどね。さつき言つた術は、一対象呪文でなく範囲対象呪文なんですよ

つまり、一人の対象に効果をもたらすのではなく、その呪文の効果があるフィールドを創作り出す魔法だということ。

「どちらも力を無くして、素人の殴り合いを始めたつて仕方がない。魔法使いの力を奪つた上で、それを斃せる力を持つ者。要するに、強い剣士やうを用意してると思つんですね

「驚きました。君は本当に、慧眼ですね。敵が氣の毒だ」

「いやいや、全部、セバスチャン隊長の御言葉ですよ

「……は？」

「俺がロザリア隊長に話した事を、隊長がセバスチャン隊長に話したんですね。それで、返事が来た訳です。そんなに褒められなかつたら、俺の能力って事にしても良かつたんですけど」

あつはつは、と笑う少年魔法使い。ざわざわ、相當に隠し事と騙して嘘が得意と見える。

「おい、フレア」

「なによお」

何時間もぶつ続けて本を読んでおり、頭がそろそろ痛くなつてきた頃、クーファが訝しげな声を上げた。

「アレ、何だ？」

「ふえ？」

振り返ると、窓の外に……。

「蝶、……？」

黒い蝶が、ヒラヒラと窓の外を飛んでいる。それだけなら、大したことでもないがその蝶は何度も体で窓を叩くようにしてくるし……。

「あの羽の模様……」

大きな蝶の羽の模様は、自然界ではありえないものだつた。

狼の姿が白い線で描かれている。

「狼といえば！」

フレアは慌てて窓を開く。

蝶はすぐに入ってきた、フレアの方へ飛んできた。フレアが手を差し伸べると、その掌の上にとまり、銀色に光ると封筒に変化した。

「エレイズ様からだ……」

素早く目を通すと、そこには数日間は何の心配も無いだろうから王城を抜け出してラファインの城に来てくれという旨が書かれていた。そこで、エレイズとリア、ラルファスとその副官2人、それからウォーレンの副官リザが集まつて闇魔法関連以外の対策会議を行つているのだといつ。

『クーファも一緒に』

といつ指定付き。

「なるべく急いで、か。どうやって抜けだそう……？」

クーファに話してみても、2人（？）で首を傾げる事になつただけである。

しかし、Hレイズ達はフレアの困る事などお見通しらしかつた。夕方だといつのに、城門前が騒がしい。

「あの馬車つて……バーフォンハイム家の」

「ラファインが来たのか？」

「もしかして、迎えに来てくれたとか？？」

またもや首を傾げていると、じぱりくしてドアが叩かれた。

「はいー。」

「Hレイズからの連絡は届いているかな」

「はい」

大きく頷いた。

いやあ、本当に、優しく美しい好青年だ。目に優しい。

なんて考てる場合じゃなくつて！

「あの、もしかしてといつか、もしかしなくても……」

「王城から出るのだけでも、色々と手間がかかるだろつと思つてね。それに、私の馬車が私の城に入るのであれば誰一人として奇妙には思わないだろう?」

「あ、成る程……」

確かに、どこの誰とも知らぬ小娘がラファイン大將軍の城をフラフラ訪れようものなら、『あいつは誰だ?』となつたに違ひない。

「では、行こつか」

紳士のラファインは丁寧に手を差し伸べてくれた。

こんなに美しく、高貴な人にエスコートされると流石のフレアも照れる。

豪華な城に豪華なメンツ。……あたし、場違い？

ラファインの居城は、ウォルテーナ城という。王城程ではないが、ダークヒル城に比べれば相当に大きい。白い外壁で、尖塔が幾つも見える美しい城は深い堀と高い城壁に囲まれている。2人がかりで開かれた城門を、馬車が通り抜けしていく。城へ向かう前庭は、季節の花々が整然と並び道を作っている。城主と同じく、品の良い、美しい城だ。

エントランス・ホールは吹き抜けになつており、天井は丸窓になつていて光が差し込んでいる。そこでは、何名かが待つていた。

「フレア、久し振り」

「エレイズ様！ お久し振りですっ」

床に頭が着きそうな勢いで一礼。

「ま、元気そうだな」

リアがその光景に笑いつつ言った。

「本当にお若いのですね」

丁寧に微笑みかけてきたのは、長い金髪を頭頂部でまとめている品の良い……男？ 女？

「フーンと申します。ラファイン軍の副官を務めています

名前と、やや低めの声、体型で何とかフレアは男性であると判断した。

きらりきらの笑顔と、宝石のような翡翠色の瞳が眩しい。どうしてこゝ、眩い美貌を持つ方ばかりが集まるのか。類は友を呼ぶといつやつか、とフレアは考えながら

「フレアです。エレイズ軍第零部隊所属です」

と、慣れない自己紹介。

一同は、1階の会議室に入る。そこに行くまでに、たくさんの兵士とすれ違つたが誰もが感じの良い挨拶をくれる。流石ラファインの軍だなと思った。

「待たせたね」

ラファインが会議室のドアを開けて声を掛けると、何やら話し合っていた2人の男女は立ち上がりて一礼した。

「女の子の方がリザ。ウォーレンの副官の一人。  
隣が、レイル。ラファインの副官」

エレイズが簡単に紹介してくれた。

「「Jの子がフレア。可愛いでしょ？」

「え？」

まるで、姪っ子でも紹介するよつたな言い方である……。

「ほんとですねえ。年齢が、何かのミスかと思つてましたけど。本当に16歳なの？」

「は、はい」

どこか、怖そだと見えたリザだが、思つたより気安い雰囲気で安心した。

もう一人のレイルは、フレアの方を見て軽く礼をしたのみ。それを見て、リザが軽く笑う。

「こいつ、すつごい人見知りなの！ 気にしなくていいよ」

「そり……でしたか」

男性にしては珍しい、前下がりボブで顔に影が掛かっている所為もあるだろうが暗い印象。瞳は漆黒、肌は青白い。こちらを殆ど見てくれないが、なかなか綺麗な顔立ちをしている。

「ちつともまでの話し合いで、総意となつたんだけど。王よりも王

子の命を優先させ、いざとなつたら王は見捨てるといつが斬り捨てるといふか、囮にするといふ事に關してます、異論はない？」

エレイズがフレアに尋ねた。

思い切つた事を言つものだなと感心しながら、頷く。

「多分、あの王が10人いるよりヨーゼフ様が1人いたほうが國のためにしよう」

リザがおかしそうに吹き出し、リアもにやりとする。

「シユウの毒舌がうつりてゐるよ」

エレイズはくすくす笑つて指摘する。

「そ、そうですか？」

「そうと決まると、どうやって王子様を守り抜くかだけど

エレイズが話を進める。

「フレアやシユウ、ジエイドにヨナがいるといつても4人だからね。何かの拍子に、ヨーゼフ王子が一人となつてその瞬間を狙われないとも限らない。

ヨナに調べてもらつたけど、王子の部屋には1つの扉以外入り口は無いけど、同様に出口もそこしかない。執務室なら、部下が出入りしていても不思議はないけど侍女や執事以外が、寝室に入る訳にはいかないし」

「君や、他の3人の寝室から王様のところまでまではどうかかかる？」

「フニアインの質問に、フレアは少し考えてから

「全員、別棟ですか。一番近い、ジョイドさんのところからでも3分は必要ですね」

と答える。

「結界は？」

リザの質問に、レイズが眉を寄せた。

「王女の結界魔法の腕は確かだけど、それが有名だとこいつのが問題。反・結界魔法を持つてこられたら仕様がない」

「あー。」

フーンがにっこりして口を開いた。

「でしたが、フレアちゃんのクーラフアンダフ・フレイム・ドラゴンを常に王様の寝室に潜ませておくといふのは？」

「なる……ほど」

全員が同時に考えを巡らせた。

「可能だな」

と、ラファイン。

そこで、クーファがフレアのポケットからひょいと出て来て、注目を一気に浴びる。

「俺も構わないぜ！」

初めて見る人々は、真っ赤な、掌サイズの羽つき蜥蜴が腕を組んで胸を張つている光景をぽかーんと見ていたがやがて、思い出したよう頷いた。

「ただし、そうするなら魔力遮断の結界だけは常に張つておかないとね。その子の魔力、かなり目立つわよ」

リザが言つ。

「それはヨナに任せていいと思う

ちょっととした昔話を聞いたフレアは容易く納得したが、エレイズは相当ヨナの腕間を信用しているらしい。また、他の者にも異存はなさそうだった。

「それから」

エレイズは次に、デスクに大きな地図を広げた。

「これ、城内図……！」

フレアはすぐに解ったが、他の者……特に副官達は、ビックリしてこんなものがここにあるのかと、驚いているようだった。

「ジョイドに頼んで、作っておいてもらつたんだけどね。フレア、頼んでおいた通りやつてくれた?」

「はい」

フレアが頼まっていた、そして、毎晩欠かさず行っていた事というものは城内をくまなく歩き回り、脱出ルートと侵入ルートを想定すること。ルート想定に関しては、シュウとヨーゼフが喜んで手伝ってくれた。本当に楽しそうに意見を交わし合つていただけ……と思いつ出す。頭の良い男の子はこういうものが好きなのか。

渡されたペンで印を付けながら、想定されるルートについて説明した。

「この、君達が使用した陛下の寝室への抜け道について、相手側に知っている者がいる可能性は?」

ところがフラインの質問。

「ジニアードさんと話しあつたんですけど、私達が使うまで、誰かがそこにに入った形跡は全くなかつたので。恐らく、知られていないかと」

「となると、正面突破していくのかしら」

リザが言つ。

「まあ、宰相が王と内密の話をするのは簡単ですからね」

と、フローンも同意する。

「ま、王妃きの暗殺に連中は大物を送り込んでこないだらうからこちうとしても放つておこひ。いずれ、高血圧で死ぬだらう……」  
めん、ラフライン」

エレイズは、悪戯を咎められた子供のようにうつと身をすくめた。

「それで、王子様のところへの侵入ルートは？ 寝室、執務室両方とも」

怖い顔をしたラフラインが仕切り直した。

「それなんですが、本当に……コーヤツフ様を守りつとしているのかどうか疑わしいくらいの不用心な間取りでして」

フレアは顔をしかめた。

「私とジエイドさんで確認済みなのですが、ヨーゼフ様の寝室、執務室共に窓からの侵入が可能です。階数からしても、その辺りが死角になっているところからしても……。

魔法を使えば、強制解錠なんて簡単ですし。音を立てずに、窓を壊す事だって出来ちゃいますから相当に危険ですよ」

王と王子の関係性を詳しく知らない副官勢は呆れたように口を開け、大将軍2人は「やつぱりね」という風に顔を見合せた。

「それから、ヨナ参謀長の話によりますと、ヨーゼフ様の警護に付いているメンツの半分以上が魔法に疎い兵士だそうで。魔法で気配を消して近付かれたり、拳げ句の果てには眠らされたりして使い物にならない可能性の方が高いかと」

「だつたら」

エレイズは、余り心配していないような顔色で口を開いた。

「寝室とはいわず、常にクーファが王子様と行動するよつにしているべきいいでしょ」

「でも、クーファの魔力について警戒される事は……」

フレアが言いかけると、今度は微笑んだエレイズ。

「ちょっと、法外の事をやるつと思つただけど。全員、黙つておい

てくれる?」

「まさかエレイズ!」

ラファインが勘付いたようで、眉間に皺を寄せた。

「身につけるだけで、魔力を察せられなくなる闇の魔具があるんだ。  
偶然手に入つたんだけど」

リアが隣で肩をすくめている。……どうやら、偶然ではないようだ。

「成る程、問題が全て解決しますね」

リザがちゅうと楽しむようつづ。流石、ウォーレンの體質といつ  
か。

「そうなんだ。ね? ラファイン

駄々つ子の様に、可愛らしく隣のラファインを見上げるエレイズ。  
ちなみに、関係ないところでフレアがメロメロになつていて。

「私には、ウォーレンと違つて色目は効かないぞ。  
……だが、まあ必要な事か。それに、ここで私が異を唱えても、使  
える物は何でも使つのだろ?」

「じゃあ、決まりといつ事で」

と、立ち上がる。

「どう?」

「ロザリアに連絡して、1時間以内に送つてもいい。善は急げつて  
いつから。今日中に、持つて帰つて」

後半はフレアとクーファに向けられた。

\*

ダークヒル城では、クロウが過労死寸前であつた。

数日前から対ウラディス派連合軍を想定した軍事演習が始まつて  
おり、また、元より人数の少ない軍であるから傭兵の募集・選抜も  
行われている最中。……に、エレイズはラファインの城で行われる  
作戦会議に行つてゐるし、リアはそれに同行している。セフィー口  
は王子へ剣の指導をするために王城。セバスチャンとロザリアはそ  
もそも、軍事演習には参加しない……という事で、必然的に魔法戦  
闘部隊一番隊の隊長であるクロウに全権が委任されてしまったのだ。

ただでさえ、リアがさぼる仕事の後始末に追われる日々を送る彼  
である。最後に布団を被つて眠つたのがいつかは、もう覚えていな  
い。

「クロウ」

そんな彼の唯一の救い、セフィー口隊第一部隊の隊長、ラズがやつ  
て來た。仕事を片付ける上では、救いであるが仕事を持つてくるの  
も彼である。今も、後者のようだ。

「ウォーレン大将軍から連絡があつて」

「Hレイズ様は『不在と伝えておいてください』

「つて言つたんだけど」

困つたように笑つてゐるラズ。クロウよりも少し年上の彼は、セフィー一団の者らしく魔法より剣術を得意とする。それが頷ける、筋肉で引き締まつた体つきで背は相当に高い。だが、顔立ちは優しげで黒い瞳は温和。茶色の髪は短く刈り込まれている。

「いないのは知つてゐるから、クロウで良いつて

「……」

思わず、小さな溜息をこぼしてクロウは頷いた。

「何と?」

「これから、ラファイン軍にも持ちかけるが3軍で合同軍事演習を行おうと」

クロウは眉根を寄せた。

「しかし、その様な動きを察せられては困るでしょう。3軍合同ともなると、ひつそり行うという訳にもいきますまい。ウォーレン大将軍にしては気が回つていらっしゃらない……」

「それも、考えがあるらしくて。結界魔法を上手く利用するとかな

んとか。

俺、魔法苦手だからよく解らなくてさあ

クロウはもう一度溜息をつく。今度はウォーレンに對してではなく、手段を考える前にダメだしをした自分の軽率さ　疲れで頭が回つていない所為もあるが　に対してだった。

「連絡手段は？」

「それが、ご本人が来てて」

ラズがまた困ったように笑って言うと、クロウはガタッと音を立て立ち上がった。よろめきながら頭を押さえる。

「それを何故、先に言つてくれないのです！」

「悪い、悪い。応接室にいらっしゃるから

「あなたも来てください」

「俺も？……解つた」

ウォーレンは實際、待ちぼうけなど氣にするタイプではなかつたが、その為人を知らないクロウにとつて今の状況はとんでもない大失態であつた。ちなみに、ラズはそのウォーレン大將軍に

「ま、あんまり急がなくていいけどな。クロウも色々大変なんだろ」と仰せつかつていたのだった。

10年越しの野望と、協力者達（前書き）

初、謀反組サイドです。

## 10年越しの野望と、協力者達。

「ラファインは当然、王家の味方につくでしょう。ウォーレンは王家……というより、ラファインを孤立させぬ為、彼に協力する。また、エレイズも同じはず」

ウラディスは、大將軍の一人、ロータス・トレヴァーンの居城にて話し合いの場を持つていた。

「……待ってくれ、ウラディス殿」

ロータスは顔をしかめた。もう、中年というべき年齢である。皺の多くなつてきた顔は、気の強さとは無縁のようだが、彼は伯爵位を持つており爵位を持たぬ貴族のウラディスより立場が上であると自負している。だから、精一杯向こうを張る威厳を發揮しようとしているのだが、それが滑稽に裏目に出ているというのがこのロータス大將軍である。今も、たくさんの不安を隠し通せていない。必死で声が震えぬよう、努力しているようだ。

「何か？」

それに相対して、ウラディスは憎いほど落ち着いていた。此の世に我が敵無しとでも言いたげな、威風堂々とした様相である。

「さ……貴公は、我々の勝利は確実と」

「やつは申しておりませぬ」

若干苛立つたように、ウラディスはこの爵位という虎の威を借る狐を見据えた。

「此の世には、確実な勝利など、有り得ませぬぞ。可能なのは、勝率を上げる事だけ……しかし、どのよつたな手を打つとも、それが100%となる事はない」

「……」

「言つてくるめられた子供のように、黙ってしまったロータス。そこへ、ロータスに向かいの男が口を挟んだ。

「ウラディス殿の仰る事は最も……だが、それにしてもその3軍を敵に回すといつのは些か無謀ではないか

ロータスが気の弱そうな小男なら、こちらのヴォルグ・バーレーン侯爵は神経質を極めたような小男。がりがりに瘦せていて、まだ若いものの疑り深い老人のような顔をしている。眼鏡の奥の瞳は、この場においてウラディスの双眸と並ぶ鋭さを持つた唯一のものだ。

「だから、こんなにも時間をかけて準備を行つてきたのですよ、皆さん」

ゆつたりと言つのは、ダグラス。家柄としては子爵と、そんなに高くないが宰相という事で、誰もが緊張感を持つて彼には接する。10年前の彼をよく知つていたウラディスは変わらないと思うのだが、最近になつて彼を見た者はダグラス宰相はこの数年で随分と変わつたと感じるだらう。30代半ばの、頼りない小男だった彼がウラディスに国家転覆の野望を持ちかけて10年にもなるがその間に彼は指導者たる威厳を身につけていた。しかしこの威厳というのは、無

馱に虚勢を張つたり大声を出して相手を服従させるようなものではなく静かに、ひつそりと人心を掌握するような……そんな威厳。

「約10年前に、大魔法使いアークを消し、4年前にユエ大将軍を消した事をそうだと言つのなら……時間を掛けすぎの気もしますがね」

遠慮無く言つたのは、見たところ最年少の男。剛毅な武人然としたウラディスはともかくとして、冴えない男達の中、唯一目立つ容姿を持つているといつてい。ハワード・ラルトウール伯爵。黒髪、黒目というこの国で最もよく見られるタイプで体つきはやせ気味だがみつともなくない程度に鍛えられている事も窺える。

ハワードの発言に思わず大きく頷くロータス、観察するよつにダグラスを見る、ヴォルグ。

「いいえ、とんでもない」

一切動じず、ゆつたりとした微笑みを消さないダグラスに何となく、ウラディスを除いた3人は寒気を感じた。

「3名の中でも最も厄介なのが、ドラゴンを契約魔獣としている上、軍のレベルも相当に高いウォーレンですが。彼の動きを封じる手筈は整えました。

エレイズに関しても、過去の傷を上手くいじつてやれば無力化できるでしょう。残るラファインですが、これくらい打ち倒せないようではこの先も国家として成り立たない。

大丈夫です、御三方はただ私とウラディス殿を信用して軍を動かしてくれさえすれば良いのですよ」

何か言いたげな様子を、3人とも見せたが、結局は黙つて同意を示した。

「やはり、奴らは当てにならない」

帰りの馬車に2人、同乗したウラディスとダグラス。きつい声色でウラディスは言った。

「気が弱すぎる。特に、ロータス」

「まあまあ

ダグラスはそれをなだめる。

「後に引けない状況となれば、必ずと役に立つてくれるでしょう。ウォーレンの件はこの前お話しした通り。エレイズは私に任せていただいて……ラファインは正攻法で」

「そう上手くいくか?」

「仮にも大将軍と名の付く者を3人も差し向けるのですから、心配は」

「そちらではない。お前の方だ」

じつくりと相手の、笑みを消さぬ顔を見るウラディス。

「はい？」

「お前如きに、あの女が消せるのか？」

「ふふ、私が手を下すとは申し上げていませんよ。何の為の10年だと思つていらつしやるのです。……近い内にお田にかけましよう。私の剣をね」

「……剣？」

魔法主流のこの土地の者にとって、自らの武力に長けた配下を「剣」と呼ぶことは珍しいのでウラティスは少々眉をひそめた。

まさか……。

「魔法では敵わないから？」

「ええ、相手の最も力を発揮する方法で、真っ向から勝負を挑むなど愚の骨頂」

やつと、ウラティスの顔から諭しむ様子が消えた。そして、口元には笑みさえ浮かべる。

「前言撤回だ。楽しみにしている」

\*

レトール街。レミュエル王国と隣接するガルベラ王国の都。王城を中心として、賑やかで明るい城下町が広がり、各所に大将軍の居城を構えるレミュエルの都をよく知る者は一見するところが都であ

る事に気付かぬ。

隠密の国、ガルベラ……。その王城は、強靭な結界により視認不可の上、城下には殆ど人が住まない。低い石造りの冷たい家に住むのは、魔法使い、そして魔法薬製造士。

ここは、静かなガルベラ王城城下町の内奥。魔法薬製造士居住区。家族住まいの者は一人としてなく、誰もが魔法薬の研究と製造に毎日を注いで生きている。世界一の魔法薬製造士である、レイファと「いまだ若い女もここに住んでいて彼女の、」15、6年に渡る常寄は他国の魔法使いであった。

「レミコール人のくせによく魔法薬を思いついたものね。闇とそれに準ずる魔法を忌み嫌うつまらない王国の人間にしては面白いのかも」

狭い居間の半分を占める、大釜と薬草が並ぶ台からしばし離れてソファに座った。すらりとした脚を組んで、引きこもりの魔法薬製造士として生きしていくのが勿体ないほどの美しい顔に何となく酷薄な笑みを浮かべる。今は邪魔になるから結わかれている金色の髪は、軽くウエーブしていく背中に流せば美しい滝のように見えるだろう。

「革命つて言つたかしら。そんな正義感が見える男じゃなかつたけど。それに、レミコールの王制は一応安定しているし」

誰もいないことを良じことに、独白を続ける。

「まあ、面白ければいいか。私の顧客になつてくれた訳だし、応援はしないとね。相手方は可哀想に」

口では可哀想と言いつつ、目は微笑んでいる。ガルベラの魔法薬製造士に、善悪の判断基準などない。自分の薬が使われるか否か、その効果が高いか否かしか興味がない。

火を掛けられていた大釜が、紫色の何とも言えぬおぞましい湯気を立て始めたのを見て満足そうにレイファは立ち上がった。

## ウォーレン、ダークヒル城を訪問す。

「お待たせして申し訳ありません、ウォーレン大将軍」

恭しく一礼して、クロウが現れると粗手は苦笑した。そして、感想を述べる。

「今にも死にそうだな、おい」

「少なくとも、Hレイズ様とリア隊長がお帰りになるまでは死ぬ訳にこきませんので」

後ろでラズは嘆き出しそうになっていた。悪いが、この年下同僚の真面目なは……ツボだ。

「用件だが、聞いたか？」

身振りで「ま、座れよ」と指示しながらウォーレンが問いかけるのにクロウは首肯した。

「△回演習の事でしたか」

「そう。恐らく、王の首級は簡単に落ちる。俺達も、そこは本氣で守つたりしないからな」

「……は」

「話についてはクロウも聞いてこる。」

「で、次に王子だが。兎に角、彼には生きていてもうらないことじつしありもない。だから、王城から一時的に避難させる事となると思う。

そうすると、王城の主はいなくなり王国軍が残されるわけだが。俺達の読みだと、半分以上が謀反側に付いてる。あつと/or>いう間に占拠されると、どうだ。

となると、解るな?」

「我々のすべきは、王子様の身の安全を図りながら、王城を奪還、首謀者達を屠ること。と/or>いう事ですか」

「賢い!」

話の順調な進みに喜んでウォーレンは笑顔で褒めた。

「いいで心配になつてくるのが、俺達が全て、まだ若い軍だつて事だ!」

「ええ。城攻めをした経験を持つ者など、そつはいなしでしょ?」

「だから、一夜漬けでもなんでも、形を知つておかなければならん。実際、俺も一度くらいしかやつた事がないし、その時は総大将じやなかつた。エレイズやラファインも似たようなもんだろ。だから、今回の提案といつ訳だ」

クロウは頷き、少し考えを巡らせていたが提案した。

「我が軍には、もともと他国で傭兵として働いていた者も多いです。そういう経験のある者を将校の皆様方に加えて、仮作戦本部とし

てもいいのでは

「成る程。俺の軍でもあたつてみよう。……ラファイン軍に關しちや、レミュエル人で応募枠がいつでも一杯になつちまつといつからな。ああ、だけど年をくつた奴もいたな。聞いてみよつ

最後の方は独白であつたが、言い終えるとさつと立ち上がつた。

「エレイズ軍の了解を貰つたと考へていいな？」

「……そうですね。エレイズ様も同じようにお考えになるかと」

「話が早くて助かる。お前、モテるだろ？」

「……は？」

すると、黙つて話を聞いていたラズがとつとつ声に出して笑う。

「真面目過ぎてダメみたいですよ

「はあ～損してるな！」

「……」

何となく、ウォーレンという人柄に触れた気がしたクロウだった。

そこへ、小姓がノックをして入つてきた。

「どうした？」

ラズが促すと、彼は一礼して話す。

「先程、ラファイン大將軍のウォルテーナ城から、ライト・ピジョンによる連絡が御座いました。エレイズ大將軍とリア副官は共に、現在、帰路についていらっしゃること」

「おーお、良かったなー、クロウ」

「ええ……ウォーレン大將軍、どうなさいますか。こちらでエレイズ様の到着をお待ちになり、直接お話しをなさいますか？」

ウォーレンは少し考えたようだが、頷いた。

「そうだな、じゃあ待たせてもらつか。ちょっと、セバスチャンと話したい事もあるしな」

「承知しました。シン、ウォーレン大將軍をセバスチャン隊長のところへ案内しろ」

「かしこまりました。それでは、一いちへ」

「失礼」

ウォーレンは、小姓のシンを戻らせるとセバスチャンの執務室の戸を叩いた。

「おや……」これは珍しい。ウォーレン大将軍ではありませんか」女性のよつに細い首を傾げながら立ち上がり、取り敢えずとソファを勧めた。

「いらっしゃるのなら、前もって教えてくだされば」

「悪いな、実際、すぐ帰るつもりだったんだが。エレイズを待つ事にしたからな」

「成る程。御用件は、いらっしゃうね」

セバスチャンは、大量の資料を手渡した。

「ガルベラの魔法薬に手を付けられるとは、お流石です」

「まあな」

元来、自尊心が強い方であるウォーレンは褒められるのが好きだ。今も、得意そうに、にやりと笑つてみせる。

「付け焼き刃だろうが、なんだろうが……俺の見た限りだと闇魔法はどれもこれも難易度が高すぎる。読んだだけで扱えるのは、それこそウラティス一人くらいだろう。そうなると、特に役に立たん」

「ですが、魔法薬の効果を借りれば。闇魔法を使うと同等の影響を与える事も可能ですし、それはタイミングさえ見付ければ誰にでも

出来ます。

調べたところ、飲食物に含まれて直接体内に入り込ませる以外にも、粉末を僅かな量、空気に乗せて吸わせるだけでも効力を発揮する類もあるようで。また、変わったもので皮膚に塗りつけると効力を発揮するものも

「気を付けるべきは、空気“感染”か。いや、最後のやつも例えば剣に塗り込まれたりすれば危険度が変わつてぐるな」

セバスチャンは頷いた。

「剣の使い手が、魔法に長けている事はこの国では珍しいですから。もしも、向こうが優秀な剣士やそれに準ずるものを集め、魔法使いにぶつけてきたら……」

「そう。将校クラスなら心配ないが、詠唱破棄が出来ない魔法使いは多い。腕が立つ剣客を相手取った場合、詠唱している間に斬り殺されるか……もしくは闇魔法で傀儡化されたり無力化されたり。兎に角厄介な羽目になる」

「心配なのが、フレアですね」

「ああ、あの子な……。クーラファンドラ・フレイム・ドラゴン使いを洗脳つて……考えたくもない」

「セフィーロが王城にいるのは、ある意味で必要な事なのかもしけませんね」

□元へ手をやつて考えつつセバスチャンは言つ。

「お母さんとこうと余りに申し訳ないが。」その後、Hレイズとお会いになるのでしたね？ この件を話してみてはもひえませんか？」

「ああ、わかったよ」

ウォーレンはやつ答えてから、少し首を傾げた。

「だが、ここのか？ セフィーロの隊は」

「ラズがどうとでもするでしょう。彼はああ見えて、よく働きます」

「お前の名前を聞きながら、問題ないな」

ウォーレンは軽く笑つた。

「それでは、私はもう少し魔法薬について調べを進めてみますので。解毒薬……などとこうと、真っ当な魔法薬製造士に怒られますが、探しておきます」

「やつしてくれ

ウォーレンとセバスチャンは顎を合つて、会談を終了させた。丁度、小姓がエレイズの到着を告げたのだった。

不法侵入者。……いや、あたしもじょっちゅうやつてるんだけどさ。

「じゃあ、クロウ休んで。リア、後をよひしね」

「へいへい」

エレイズがリア、クロウ、ラズに指示を出し終えたところへウォーレンがやってきた。前を歩いて、シンが案内してきたのだがまだ10代のシンの背が低く、ウォーレンが人並みより高いものだからその肩より上がはつきりと見えるほどだった。

「アリでいいやね？」

「ああ」

2人で応接室に入つていく。エレイズはドアを閉めかけて、止まると

「お茶だとかは、気にしないでいいから」

とシンに声を掛けてから、きつちりと閉めた。

「どうだ？」

ウォーレンは、クロウそれからセバスチャンとの話を細かに教えた。

「いいと思う。セフィーロがいるなら、確かに王城の剣士が100人いるより安全だからね。

あーあ、私の部下ばかりいなくなる

少し不満そうに言ったエレイズに対し、ウォーレンは思わず苦笑した。

「それだけ優秀なのが揃ってるって事だ」

「まあね。それより、次いでだからさっきまでの会議で決定した事、聞いてもらつていい？」

エレイズは、一切の漏れなく会議の決定事項を詳細まで教えた。

「成る程。クーラファンドラ・フレイム・ドラゴンを王子直属の護衛にか。そんな豪華な護衛、聞いた事もないな！ で、闇の魔具か？ お前……そういう子だっけ」

「そういう子にもならざるを得ない。善良な市民は悪党に勝てないからね。落ちた相手を倒したければ、同じ所まで落ちていかないと」

「名言だな」

「どーも」

名言だと笑いつつ、ウォーレンの背筋は妙に冷たくなった。エレイズは特別な意味を込めて、先程の台詞を吐いたわけではないだろうが……。もしも、彼女が隠している、婚約者の死因を知つたら。……同じ事をしようとするのだろうか。悲しみも怒りも、何もかも綺

麗にしまい込んで鍵をかけているエレイズである。もし、その鍵が開き、取り出されたのが“怒り”だけだったら？ 敵のだけでなく、味方の闇魔法にも対処しなければならなくなるかもしない。

「どうかした？」

「いや、何でもないわ……。そつそつ、お前にも完成した反闇魔法を見ておいてもらいたいんだが？」

「うん、解った」

ウォーレンは難しい事など、何一つ彼の胸をかすめなかつたとばかりに得意そうに自分達の成果を渡した。これを渡すのも、来訪目的の一つだつた。

「じゃ、俺はここへんで、合同演習の話に専ら、ベルがラファインのところに説明に行つたからな。了解もらつたら、すぐ予定を知らせる」

\*

それから3日後。

「そつか、解つた」

ヨーゼフは少々、不服そつだつたが素直に頷いた。セフィー口から、軍事演習のために数日間ダークヒルに戻る事を知らされたのだ。

その様子を見て、フレアとショウは思わず顔を見合わせる。懐きまくりではないか。

「まー、ヨーゼフの側にはこの俺様が付いてるからなー、心配は無用つてもんだぜ」

王子直属護衛として配属されたクーファーは、ヨーゼフの隣で上体を反らせる。無表情・無感情（要するにこつもの顔）でセフィーロは応じた。

「ああ、心強い」

「セフィーロ副官ー、気を遣つてあげなくていいですよ。こいつ、すぐ調子に乗るんですからー。」

フレアは“やれやれ”と首を振りながら言った。

「何だとフレアーー！」の前もたーつぶり、俺様の武勇伝を聞かせてやつたるうつり

「あの話って、結局一番すごいのは父さんじゃないの」

「何をお……、言ひ返せなー」

思ひ認めて少やくなる、少やな蜥蜴……否、ドラゴン。

それからば、大した事も起こりはずフレア達、王城潜伏組はヨーゼフの周囲に目を光らせたり、引き続きダグラスやウラディスの噂を集めたり、反闇魔法の訓練を（こつそりと）して時間を過ごした。

「うーん、落ち着く……けど、落ち着かないなア」

自分や、事情を知る魔法使い達が作った闇魔法の逆転魔法の呪文を眺めながらフレアは思わず独りごちた。クーファがいないと、静かなのだが、どうも小さい蜥蜴が何かある度に何か言ってくる面倒くさい状態が日常であつたため、静か過ぎると落ち着かないタチになつてしまつたようだ。

『外でも歩いてこよっかな』

王子警護の交替時間まで、まだ大分あるからと部屋の外へ出た。最初の内は、一步踏み出すのにも躊躇していた大理石の床だが今はもう、慣れたものだ。人の適応能力を知る。

何となく、ふらふら歩いていると足が覚えていてヨーゼフの執務室の方へ来てしまった。戻るのも何だから、少し早く行くかと思っていると……。

『あれは……』

もうすっかり顔を覚えた、ヨーゼフの部屋の周囲を巡回している兵ではない。それどころか、

『あの体格……それに、魔力が結構強いな。……魔法使いか』

剣を下げて、警備兵の鎧をついているものの、どうしてもそうとは思えない。声を掛けて詰問しようかと思ったが、取りやめて気配を消して様子を窺う事にした。障害物のたいへん少ない廊下のまつた中であるが、魔力で気配を消して足音も消すため自身の周囲を簡

単な結界で覆う。“結構強い”という判断をしたが、それは王城仕えの者（本当にセツリであったとして）にしては、であつてエレイズ軍を歩いていたら間違いなくセフィー口の部隊だと思つレベル。まづ、気付かれないはずだ。

何者かは、どう見ても「そこそこ」と……しかし気配も音も無い事に安心しているのか振り返つたり、立ち止まつたりはせずに、ヨーゼフの執務室の前まで来た。そこで、何か、道具を取り出す。

『……魔具？』

男の手に持つたものから、突然、黒い煙が立ち上り始めた。

『ますいかも！』

首筋が粟立つ嫌な予感と同時に、フレアは迷わず男に近寄つた。

「あなた！」

「ひつ」

少女相手に情けない、と思わせる程、その男は身をすくめてフレアの姿を見ると一目散に逃げ出した。

「ひつ、待てつ……」

見かけ通り、逃げ足は速いようだが慣れない鎧を着た小男と身軽な少女。段々とフレアは追いついていく。

「止まりなさい！」

フレアは叫ぶと、呪文を唱えた。男の身体が一瞬だけ硬直する。それでもう充分な距離まで近付いていたからフレアは小男の眼前に躍り出る。

「あたしと追いかけっこしようつたって無駄よ。何をしたの？　あの黒い煙は何？」

「お……お前は」

「聞いてるのはあたしよ」

自分でも、「護衛っぽくなつたな」と感心しながら問いつめる。そんな呑気な事を考えている隙に……と知るはずもないが、男は踵を返した。

「いの」

再び、追いかけようとしたフレアは微笑んで止まった。

「ナイス！　シュウ！」

「それほどでも」

似非好青年が微笑んだまま、禁術ぎりぎりの氷結魔法で相手の動きを今度こそがつちりと固めてしまう。ちなみにこの術は氷結魔法とはいっても、凍る訳ではない。氷漬けにされたように、指一本動かせなくなるだけだ。

「ああ、口だけ動かせるようにしたから。さつさと田舎を吐くんだね。おっと、舌を噛もつとしてもダメだよ。そういう動きに出たら、再発動するようにプログラミングしてるからね」

プログラミングとは、要するに既存呪文の改変だ。余程センスのある者でなければ、一瞬で思い通りに術の改変など出来ないのだがシユウはその、余程センスのある者だった。プログラミングの難しさを知っていた男が実際に、ただのはつたりだろうと思つて舌を噛んでしまおうとしたところガツチリと顎が固まつたので、とうとう諦めたらしい。

「俺は……」

その時だった。

解つてはいたけど、超少數派みたい。

「 もや、どうしたのですか」

「 ……宰相」

フレアは思わず、口元を引き結んだ。対して、シユウは平然と……

「いやあ、怪しい輩を捕まえまして。見ての通り、もう大丈夫です。あ、煩かつたですか？ 申し訳ありません。俺達で始末しますんで」

しかし、ダグラスは簡単には頷かなかつた。

「 ポーゼフ様の護衛は腕も弁も立つようですね」

「 いいえ、それほどでも」

「 ですが、使用している魔法がいただけませんな。氷結魔法を5分以上使うのは禁忌です。闇魔法の捕縛の呪いと同じ効果となつてしまつますからね」

しかし、シユウは悪びれもしない。あくまで明るい口調で返す。

「 あ、5分経つてましたか？ 俺、時計持つてなくつて。それにしても、だつたら氷結魔法を禁術に指定すればいいと思いません？ そうなるとまあ、逃亡者の確保が難しくなるんですがね」

立て板に水、状態である。

「まあ、そんな事より。その男は私の方で預かりましょ。や、こ  
ちりへ」

ダグラスが途端に、丁寧な物腰から有無を言わぬ態度に変わる。その瞬間、フレアの頭に声が響いた。シユウのテレバスである。

『仕方ないから、引き渡そう。その男を縛つて、ばれないように左ポケットから黒い筒を抜き取って』

フレアは早速取りかかる。

「何をしていのやす？」

「いえいえ、だって、俺の魔法を解いたらその男、逃げ出しますよ。宰相は男と追いかけっこする趣味がおありますか？ ですがね、俺の知人の中でも俊足で評判のこの子が追いつけなかつた相手です。中々、大変な作業になると思いますよ。それとも、この男が宰相から逃げない理由があつたりして？ いやだな、睨まないでくださいよ。なんちゃつての話ですってば」

そうしている間に、フレアは警備員の誰もが腰にくくりつけている捕縛用のロープを男から取り上げて縛り上げ、ダグラスがシユウを睨んでいる瞬間に筒を抜き取つて自分のポケットにしまいこんだ。

「これでよしー。」

まだ、マシンガン・トークを繰り広げてゐるシユウを遮るようにしてフレアは男を軽く前に押し出す。

「じゃあ、宰相、後はよろしくお願ひしますね。そいつが何者なんか、解つたら」」  
「そり教えてくださいよ」

「その必要がありますか？」

ダグラスは冷ややかに微笑んで、男を引き取つた。男は目で必死に何かを訴えているがダグラスは構わず引き摺るようにして連れて行つた。

「どうだつた？」

2人が執務室に入ると、ヨーゼフは開口一番に言つた。

「宰相の『』登場ですよ」

「宰相だつて……？」

「捕まえたのに、持つて行かれました。あれは絶対、手を組んでますね。

まあでも、それが手に入つただけでも大捕物の内に入るかな」

シウウがフレアを振り返つた。頷いて、フレアは黒い筒を取り出す。15センチ程度の円筒で、直径は2、3センチ程度とあまり太くない。

「これが、煙の発生源みたいですね……あ、そういうえば部屋の中に入

つてそうだったけど」「

フレアが言つと、シユウが微笑んだ。

「それは大丈夫。俺が浄化呪文使つたから」

そこは、流石である。

「それにしても、クーファがいて良かつた。俺も遠慮無く飛び出せたよ」

「……おい、ちょっと待てシユウ」

クーファが腕を組んだ。

「それが狙いだつたら?」

「?」

「あの黒い煙は……まあ、何かしら効果があるにせよ中にいた見張りの奴が外へ飛び出し、願わくば犯人を追つていいくようにするのが目的。その隙に、無防備になつたヨーゼフを……てな」

シユウとフレアは顔を見合せた。

「確かに、クーファがいることは誰も知らないもんね」

「俺とヨーゼフ様の他に、クーファの声が聞こえたから実行を諦めたのかもしれない」

「動き出したって事、か。

……まあ、兎に角今はその筒だね」

『ピーゼフはフレアの手にある黒い筒を指をした。

「闇の魔具で間違いはないでしょうね」

と、シユウ。

「『ナミジ』ハイドさんを呼ぼうか」

『ピーゼフが言つたので

「じゃあ、あたし、呼んでもきます

と、フレアが駆けだした。

「成る程。ここを見てください」

「ああ……」『れは

「おいおい、ちょっと、2人だけで喋つてないでこいつにも説明し

るー。」

クーファが一同の心情を代弁すると、2人は我に返つた。

「ここを見てください」

ジエイドがヨーゼフに黒い筒の一部を指して、近づける。

「“アルド”……！」

以前、話に出て来たダグラス一派と手を組んでいるらしい闇の魔具の第一人者の名である。

筒の側面に掘られている文字は恐らく、知らなければ見付けるのが困難だろう。

「闇の魔具で間違いは無いって事だな。効果は、解るか？」

クーファの問いかけにヨナが頷く。

「恐らく、気体を大量に吸い込む事で効果を発揮するものですね。この手のものは、催眠効果や意識の錯乱をもたらすものが多いです。」

「眠らせたところを殺そうとしたか、護衛に僕を殺させようとしたかつて事だね」

ヨーゼフに頷いたヨナ。

「それにしても、ザルな計画ですよねえ。怪しい煙を見たら、駆け寄つて確認するとしても思つたんでしょうが？ 済みやく文使うに決まつてるじゃないですか」

シユウが言つと、ヨナが苦笑した。

「全ての人が、そう冷静とは限りませんよ」

「ミナ参謀長が言つても信憑性ないですね」

フレアは、駆け寄つて確認する自信があつたが、黙つておいた。  
…今度から、気を付けようと決心した。

「兎に角、この事は全体に知らせましょう。この魔具はお預かりしても？入手ルートを調べれば、闇の魔具について詳しく解るかもしれませんので。どんなものがあるか、把握しておくに越したことはありませんから」

ミナに一同、頷いた。

「多分……」

シユウが口を開く。

「セフイー口副官がいなくなつた途端、これですから。その人が出て行くのを待つていたんだしじょうね。この先、同じような事が立て続けに起こると思いますよ。部屋の外の警備も……あれ」

彼が言葉を止めた理由は判つた。

「何で、誰もいなかつたの？」

思わず、声を大きくしたフレア。

「そついえば、あたしが自分の部屋からここに来るまでの間も、誰

ともすれ違わなかつた！

「俺達、結構暴れたよね？ それにしても、誰一人として……宰相以外、集まつて来なかつた

「私がここを離れた後、結界が張られたのでしょうか

ヨナが言つと、クーファが反駁する。

「だつたら、俺が気付いたぜ」

となると。

「まあか……いや、思つた通りと言つべきかな

ジエイド。

「とほこつても、いじままでとま。我ながら、情けない王家だな

ヨーゼフ。

「少なくとも警備担当は、全員共犯……<sup>グル</sup>

フレアが締めくくつて、全員頷いた。

荒れちらりしゃる。 (前書き)

いつもよつ長い割に内容薄です (苦笑)

荒れてらつしゃる……。

その後、ダグラスが引き取った不審人物について探しを入れていたジェイドがうんざりした表情でやつて来た。

「どうだつた？」

そう聞くヨーゼフも大体の予想がついていたようだ。

「もみ消されていたようですね。国王陛下への報告が行っていないのは勿論、噂にさえなっていませんよ……。犯人もどうされたやら。ミスを責められて始末されたのか、安全なところへ逃がされたのか

「俺達が騒ぎ立てたところで余り効果はないだろうし」

シュウが考え込みながら言つた。

「いつその事、ヨーゼフ様が直接国王陛下に……」

フレアの言葉に、本人は

「どうかな」

と。

「実害は出でていない訳だし、犯人は既にダグラスの手に渡つていて……。あいつが僕が父上を説得しているのを嗅ぎ付けてやつてこないとも限らないしね。そうなれば、可愛くない息子より忠実な宰相

だ。ダグラスに任せてお前は引っ込んでいろ。大人しくせずに嗅ぎ回ろうとするから、危険も増える……なんて言われるのに賭けてもいいさ。信頼関係って大事なんだね」「

肩をすくめるヨーゼフ。今更どうしようもないが、確かに王とヨーゼフが信頼しあった親子であつたら……話の進みは全く違っていただろう。

「これからは、何かあつたら秘密裏に処理しないといけませんね。宰相や、仲良しの衛兵達が出てくるように前に、迅速に」「

シユウが言った。フレアが首を傾げる。

「でも、そんな事……」

「俺に任せとけ！ 瞬間に炭にしてやるぜ」

胸を張つてクーファ。

「それじゃ、犯人を取り上げられるのと同じじゃない！ 跡形は残してよねつ」

「ううむ、そうか。焼き加減が難しいぜ」

「そうね、肉は生焼けくらいが美味しいしね」

「あ、王子様、解ります。ミティアムよりフレアですよね」

「おや、私はウェルダンが好きですよ」

「やつこつ話じやなこつ」

フレア渾身のツツコミが入った。何で眞面目な話をしていたのに、ギャグティストになつていいのだ。

「失礼します」

そこへ、ギャグティストとは無縁のヨナが入つてきてフレアは彼が救いの神に見えた。

「随分と盛り上がつていたようですが?」

「ああ、肉の焼き加減についてな!」

クーファの解答に、首を45度曲げるヨナ。フレアはヨナで、無視してくだせこと訴えてからさつきの問題について正しく伝えた。

「成る程。こちらの話と近からず、遠からずですね」

「やつこつえはヨナ、ぐつたりしてない?」

ヨーゼフが耳聴く観察して述べると、彼はうなだれるように頷いた。

「どうも、連中は証拠の品を全て回収していない事に気付いたらしく

「

ヨナはロープの裏から例の筒を取り出した。

「これを取り返そうとする、連中の手先と一騒動どころか……夜通し殺氣と魔力に当たられて碌に眠れませんでした。立ち向かってき

た者は、捕らえましたが……

「また、ダグラス？」

言葉を切つたヨナにヨーゼフが問うと、彼は首を横に。

「刺客は条件性の呪いを掛けられていたよつでして。首謀者の名を私が問い合わせた途端、即死です」

「その死体は？」

「王城内で取り扱う事は出来ませんから、セバスチャン殿の配下の方々に預かっていただきました」

エレイズの城から一晩で？ といつ疑問に首を傾げた一同にヨナは説明する。

「セバスチャン殿は、あらゆる地域に部下を潜伏させていらっしゃるのです。単なる商店の売り子であつたり、行商人であつたり……。そして、今回お世話になったのは葬儀屋です」

そういう、ホラー系の響きが苦手なフレアは軽く身震いした。……  
といつか、無駄にセバスチャンには柩や墓地が似合つ氣がするのは何故だろつ。

「まあ、死人を預けるにはもつてこい。彼らが調べてくれるといつ事だね？」

ヨーゼフにヨナは頷いたが、その顔はどちらかといつと暗い。

「私の方でも軽く、持ち物などを検めたのですが、証拠となるものは見付かりませんでした。それに、呪いを掛けたのが我々の知る魔法使いとは限りませんので望み薄かと」

「やっぱり、尻尾を洗い出すなんて無理なのか。向こうに敵対に気付いている事を気付かれてしまったからにはね」

全面対決の可能性はもとからあったが、更に強くなってきた。

「奴らが、予想より早めに動いてくるかもしね。反闇魔法の方はどうなってる?」

ヨーゼフの問いに、久し振りに好ましい答えが返ってきた。

「葬儀屋取締役と僕は取り敢えず、作った分は網羅しますので」

「葬儀屋取締役って、……セバスチャン隊長の事?」

悪口とは言えないが、どこか無礼な気がするのは何故だろ?。

「あの人には、笑顔より冷笑、白より黒、朝より夜、生より死が似合つと思わない?」

「そんな具体的に言わなくても……」

今や、自他(?)共に認める墓場の支配者第一の部下であるジェイドを横目でちらりと見やる。……すると、彼は腹を抱えて笑っていた。

た。田尻に涙を浮かべて。……薄情者。

「生のまま人肉を喰つてやつだよね~」

「肉の話はもういいからつーーー。」

口の端から（誰かの）血を流して冷笑を浮かべる、真っ黒の背景を背負ったセバスチャンを想像してしまった。……夢に見て呪われそうだ。

\*

「くちゅん

「あ、聞こいやつた。可愛いくしゃみ」

笑ったロザリアを軽く睨んでからセバスチャンは書類を突き出した。

「今日中に、この人物について調べてください。いいですか、今日中にですよ、今日中にー！」

「3回も言わなくていいわよ。でもね、戦時情報網整備の件がまだ終わつてないの」

ロザリアが悪びれず、それどころか困った事を相談するよひに言つからセバスチャンは細い肩をがくつと落とした。

「あなたはいつもいつも……まあ、いいです。もう、いいです。それはガーディにでもやらせればいいでしょ。その方がきっと早い

「はーー」

ロザリアは、お前には隊長格のプライドはないのかとセバスチャンがその背に叫びたくなるくらい素直に一つ返事して出て行った。

それと入れ違いに入ってきたのが、イアリスである。

「失礼します……お加減悪そりですね」

「君の見田麗しい隊長の所為でね

「いや、あはは……。隊長にも悪気はないといつか

「ええそりでしょ」とも、悪気があつたひ、こゝまで出来ませんよ。彼女は何ですか、墓場まで仕事を持ち帰つてのりのりと片付け続けるつもりですか」

「うわ、セバスチャン隊長、死ぬまで働くお積もりで?」

「彼女の所為で仕事をしながら死にそうですよ。部下に葬儀屋をやらせておいたのは正解かな」

「……」

『荒れてらつしゃる…………。うわーー、この状況で面倒くさい仕事、伝えたくないなあつ』

「それで? イアリス」

「はい……」それを、見てください」

書類を受け取ったセバスチャンの背後にじす黒い、というか世界滅亡を一瞬後に控えた魔王の如くおぞましいオーラが見えたのはアリストの目の錯覚か。

「これは本来、情報部の仕事では？」

「む……無理ならいいんですつ。ただ、ええとですね」

「期限きつぎりに仕事を先伸ばしているといひく、ここのといひ立て続けに新たな仕事が舞い込んできた。そしてそれを副官のガーディを始めとしたたくさんの部下に取りかからせているが、なにぶん量が量。それさえ期限内に終わらせるのがやつとなのに、新たにこの七面倒くさい仕事を増やすと機能停止すると」

「……仰るとおりで御座います」

荒れている……。滅多な事では感情にまかせて行動しない、彫像の様な美丈夫が荒れている……。

「はは……」

「え」

「あはは、はははっ！」

「セ……セバ……」

「あはははははははっ！」

「ひいいいい」

セバスチャンの無味乾燥で高らかな……誰がどう聞いても気が触れてしまった笑い声とイアリスの恐怖による絶叫がしばし続いた。

「置いておきなさい」

「え……」

「その書類。内容は？」

「は、はい。王子様暗殺に関わり、その上ヨナ参謀長襲撃に関与していた者達はどうやら一つのまとまりではなく、多数の雇われた組織だという事が解りましたのでその組織について洗い出す事。それから、この魔具に残る魔力残滓を調べ、これを扱った男がどうなつたか調べる事」

「成る程。誰の指示ですか？」

「王子様ですね」

「全く、人を何だと思っているんだ。まあ確かに、御自分の命が掛かっているのだから必死になつて無理もない。しかも、自分の命だけでは済まず、この王国の寿命まで掛かっているのだからな。それにしても、彼は人を使う事に慣れすぎているのではないか。いや、王子だから当然か。あんな善良な子犬のような顔をして……。私はもう騙されないぞ。次からはこちらが喰つてやるくらいのつもりで相対する必要があるな。対応をヴァン（副官）に任せておいたのは失敗だつた。彼は仕事が速くて忠実な良い部下なのだが丁寧すぎる

という欠点がある。王子に足下を見られたか？ 全く、碌でもないガキだ。大人の恐ろしさというものを誰か教えてやつたほうがいい。だいたい、ヨナ殿も甘やかしすぎなのだ。父親に愛されぬ憐れな王子だと？ 私など、両親の顔さえ覚えていない。同情の理由としては甘すぎる、ああ、甘すぎる。確かに、あの愚鈍を極めた肥えた豚のような魔王よりはずっと頭が回るし、好人物には違いない。だが、それにしてもこれはないだろう。いや、文句を言うところを間違えていたか。一番悪いのはロザリアだ。あのお嬢様め。情報収集関係の魔法に関する能力が天下一品だというのは百歩譲つて認めるとして、あの怠惰な勤務態度は何だ。隊長の一人として、軍という巨大な組織を動かしているという自覚と責任感が果たしてあるのだろうか？ いや、無いだろうな。やんわりとしていて部下に好かれやすいところが彼女の美点だとしても、仕事にならなければ意味がない。

ねえ、イアリス？」

「何について、同意もとめてるんですかっ！？ てか、ブチギレ！？」

という盛大なツッコミは心の奥にしまって、イアリスはこの数ヶ月で会得した必殺愛想笑いでスルーしたのだった。

## 大將軍襲撃事件。

それから一週間。様々な者が様々な秘密裏の対応に追われていたが、それもようやく落ち着いてきて三軍合同軍事演習もウォーレンが広げたマジック・フィールドと、やつれ果てたヨナも協力して張った結界の中で行われ、終了した。セバスチャンはイアリスのトラウマになりかけた、ブチギレから立ち直ると、いつも彼らしい冷静さと素早さでもって仕事を片付け、流石のロザリアもこの一週間はいつ誰が見ても仕事モードであった。ガーディーはお菓子を買いに行かされる事がなかつた。

さて、三軍合同軍事演習が行われたのは誰の城でもなく王都から遠い国境付近の平原であった。場所柄、白兵戦が中心となつたが作戦本部では万が一王城内までもが戦場となつた時の想定が行われて、兵達には細かな説明がなされた。そこでは、こつそり会議に参加してくれたラファインの父親、アルベルトの知識が大いに役立つた。別れ際に、アルベルトは手を空かせていたエレイズに溜息混じりに語つた。

「それにしても、若き者達が革命の意気に燃えるならまだしも国王陛下に忠誠を誓つて長いはずの将校達が謀反を計画しているとは、情けない限りだ」

もう、60に近い元大將軍の大貴族は一般より早めに戦線を退いたのを後悔しているらしい。

「もしも、私が目を光らせておいたなら」

「いえ……闇下が例え在役中でいらっしゃったとしても、やはり奴らは動いたでしょ。なにせ、どう考えても奴らの計画が始まったのは1年や2年前ではあります。恐らく10年近い歳月を掛けて、外堀を埋め、中を固め……一刻一刻と王国の首を狙ってきたのでしょう」

聰明な瞳で受け答えた、エレイズを見てアルベルトはラファインとやはり似たところの多い、優しく、若き頃の美しさを彷彿とさせる黒い瞳で感心したように相手を見た。そして、微笑む。

「堂々としたものだな、エレイズ大将軍。初めて将軍職についたあなたを見た時は、本当に大丈夫なのかとも思つたが。昔の私は慧眼とは言えなかつたようだ。今もかな」

「そんな事は、自分で思い返しても、昔の私は唯の魔力の強い小娘でした」

同じく微笑んだエレイズをしげしげと……当然、いやらしい気配など全くなく……眺めるとふと口にする。

「ラファインの婚約者が、25にもなつてまだ決まっていないのがな。どうだ、エレイズ大将軍？」

「お戯れを」

きつぱりとしたお断りを込めた微笑みに、残念そうにアルベルトは息を吐いた。

「そうか。

実際、困つておるのだよ。あやつも、なかなか潔癖な男でな。いや、

私に似てしまつたのだろうが

アルベルト本人も、親の決めた婚約者を全力で突っぱねて下級貴族のカスティリヤ婦人と結婚したのだったと聞いた事をエレイズは思い出す。

「私は平民どころか、自分でも生まれを知らぬ身です。外聞も悪いでしょう。それに、ラファインには素直でしとやかな人が似合つと思ひますが？」

「はつはつは！ それはあなたが、曲者だという事かな」

「せう自負しております」

「いやははや、あなたは面白いよ。カスティリヤと会つてみないかね。気が合つと思つぜ」

エレイズは、この人こそ曲者だと思つた。

「諦めていらっしゃらないのですね」

「何の事かな、はつはつは」

指摘の意図を理解してその通りだと思いつつ、何でもない風で楽しそうに笑う大貴族であつた。

「……リザ、気付いたか？」

帰路についているウォーレン軍のトップ陣。その馬車の中でウォーレンは田を細めた。

「見られてる……というか、尾行されますね」

「ええっ」

ローベルグが目を顔と同じくらい丸くして声を上げたので、ウォーレンは静かにしろと身振りで示す。

「何のつもりだかな。俺は別に楽しいところに寄り道するつもりもないんだが。俺の城の場所なんて、今更調べるまでもないだろうしどうしてか、気配丸出しじゃねえか

彼らは今、森林地帯を抜けている。馬車道が通っているものの、一歩外れれば木々と茂みで視界が効かなくなるところで、夜盗を恐れて陽が暮れてからここを通る者は殆どいないくらいだ。

「左右に5人ずつ。盗賊じやなさそうですね。多分、今なら気付いてる事を気付かれてませんよ」

リザが窓の外を見ないようにして言う。文官のようなものであるローベルグは気付かなかつたが、生糸の武官である2人はすぐに気付いた。あまり優秀な戦士ではないと見える。

「魔力の気配も余りしませんね」

「だが、油断するなよ……。さて、何が狙いだ?」

反対の方面でも、同じような事が起きていた。だが、こちらではどちら側にとっても身を隠すものなどなく相手も隠れて尾行するつもりではなかつたらしい。エレイズ達の馬車が街道を出て、静かな田舎道に入った途端、一気に馬上の者達に囲まれた。

「これはこれは」

リアがべつと舌を出す。

「ど……どひなさいますか」

一般人である、御者の男は当然怯えて、戸惑つている。

「取り敢えず、止めて。10人ならすぐ片付く」

他の兵達は、半分は後始末の為現地に残り、半分は目立たぬようばらばらのルートを通つて帰城している。前にも後ろにも、誰もいない。

「リア、セフイーロ、降りるよ」

2人は頷いて、停止した馬車からせつと飛び降りた。

まず、エレイズに斬りかかってきた相手を逆にセフイーロが電光石火のスピードで切りふせている間に彼女は召喚を完了させた。

軽い爆発音にさえ近い音と共に、白い煙が上がる。そして現れた姿を見て、刺客達 誰もが黒い鎧兜を身につけ、兜の面類は全ておろしている。鎧兜には、何の紋章など、所属を示すものはないは、その姿を見ただけで後退りする。

巨大な白い狼である。Sランク氷属性の狼型魔獣で、その毛並みは雪のように美しく、だが瞳は血のように赤い。僅かに開いた牙のびつしり並ぶ口の中も、同様に赤く噛まれるまでもなく流血を思わせる。大きさは、体高がエレイズの腰より上まであつて体長となると2メートルはあろうかと思われる。

「じ 主人、久し振りじえねえか」

低く、唸るような声で狼は云いつつ、頭をエレイズに押し当てた。

「平和ボケしてたからね。暴れていい。一人だけ残して」

「残すのはリア坊にでも任せろ、じつちは全部俺が殺る」

「てことで、よろしくリア」

「へいへい、おつそろしいぜ」

そういう彼の脇には、馬車を引く馬より一回りは大きい炎のたてがみで、赤に近い毛並みを持った馬。Aランク炎属性。リアはその背を叩くと、

「任せるわ。一人残せと」

と、簡単な指示を出して自分は馬車に寄つかかって見物を決め込む。

セフィー口はというと、念のために剣を持った手の力は緩めずにいつでも大将軍を守れる位置にいるが、アイス・ウルフとフレイム・ホースが出たからには自分の仕事はないと考えているようだった。

## 大将軍襲撃事件あらため、大将軍誘拐事件。

しかし、3人の予想は裏切られた。Sランク魔獣の霸気に押されて震え上がった時間が終わると、圧倒的不利とみえる状況には変わりないのであつという間に落ち着きが戻つた。流石に訝しく思い、剣をいつでも振れるようにしたセフィー口は正しかつたのである。

「……何だ、この匂い」

アイス・ウルフが一瞬、動きを遅らせた隙に黒い兵士達の中の一人が黒い掌に收まるくらいの球を投げ上げた。

「まずい」

エレイズは その効果を読み切つた訳ではないが 即座にそれを壊そと、球の周囲に氷の槍を出現させたがそれが突き刺さる直前……。

それは、崩壊した。そして、次の瞬間。

エレイズの魔法により生じた氷が全て霧散する。更に

「ガルルルツ」

「ヒヒイイン」

アイス・ウルフとフレイム・ホースが唸りと嘶きを上げて消え去つた！

「まさか、魔法解除……」

エレイズの呟きを聞きつけた黒い兵が笑う。

「その通りだ！ 貴様ら魔法使いには、これで打つ手は無いだろう！」

「エレイズ軍トップ達といえど、大した事はない」

「所詮、ひ弱な女の軍 ッ？」

最後、余計なエレイズへの中傷を述べた者の首は即座に宙を舞つた。風の如く襲いかかったセフィ一口の剣に、1つの抵抗する間もなく倒れた。その途端、堰を切つたように全員が一度に掛かつてきたがセフィ一口は意に介した風もない。まず、彼に到達した2本の剣を弾き上げると2つの胸を鎧ごとまとめて切り裂き、呻くそれらを邪魔と払いのけ、後ろからの剣を素早く横に逃れてかわすと、躊躇無く首を落とす。

4人が、いや始めの1人を加えて5人があつという間に葬り去られた事で、彼らが先に述べたような、彼らにとつて都合の良い状況がやつてきたのではないことを悟つたらしく、距離を大きく開いて、大して頑強に見える体つきでもない超戦士の隙を探す。

「エレイズ様、リアと共に中へ。ここはお任せを」

「うん。邪魔しないようにする」

エレイズとリアがさつさと引き上げるも、下手に動けば自分らの寿

命を縮めるだけと見送るしかない。

『あと5人……』

強引にねじ伏せられない人数ではないが、乱戦となれば全滅させてしまふ可能性が出てくる。となると、得られる情報が一気に少なくなってしまう。

「我々が命じられているのは、ウォーレン大將軍を連行する事だけだ。それさえ出来れば、あとの者はどうしろとも言われていない」

ウォーレン達の方は、絶体絶命の窮地に置かれていた。エレイズ達と同じく、周りに味方はいないし魔法解除を行われた。そして、こちらの方が襲撃者達も手慣れていて御者と馬、それからローベルグが人質にとられていた。

「おい、ベル。全て片がついたら、地獄のダイエットをさせてやるからな」

「ひいっ、何を言つてるんですかウォーレン大將軍つ」

「大將軍なんて連れて行つてどうするつて訳？ これを操ろうとなんてしたら、逆に操られて色々と死んだ方がマシな目に遭うわよ」

「リザウ……まあ、色々ツッコミはあるが、そういう事だ。諦めてさあせと帰れ！」

「あんたは俺達を笑わせたいのか？ そちちが諦めるほつだと思つが」

呑気な会話にも聞こえるが、ローベルグ達の首に当たられた刃物はどんどん力が込められていくし、ウォーレンとリザも残る者の剣を突きつけられて動けない。

「さあ、もう一度聞こうか。

俺達にあんたが付いてくるか、ここで全滅か」

「その2択はちょっとなあ

「ならば3択にしてやるわ」

「お、流石。顔は見えないがきっと男前！」

「あんただけ付いてくるか、全員でそつするか、全滅か」

「前言撤回。宇宙一の不細工め」

「子供の喧嘩じゃないんですから、ウォーレン大將軍っ

「だ、……田那。あたしと馬まで殺されるつてのは、無しの方向で  
……」

年老いた御者が切ない声を出し、馬も同調したように静かに嘶く。

「僕だつて嫌ですよつ！ 捕まるならお一人でつ」

「同感、火の粉は部下の分も被つてくださいね

「はあああ、何つて可憐くない！ これがエレイズ軍なら違つんだ  
るつなあ。リファインのところもやつか」

「半分以上、あんたの責任のよつに俺にも見えるが」

「あら、よく解つてゐるじやないの。初対面なの」

何故か解り合つた（？）リザと敵に、大いなる溜息をつくウォーレン。仕方なく、進み出た。

「解つた。連れて行け。だが、自由に脱走するからな」

「出来るなり、やつてみるとこゝ。お前達」

「は」

びつやう、喋つていた男がトップへ。その命令に応じて数名がウォーレンの手足を拘束して、鍵付きの首輪を付ける。

「何だつて、お前、そういう趣味か！？」

「面倒な男だ。なに、唯の魔力封印具だ。手や足につけると、エリカにぶつけて壊される可能性があるからな」

「おお、賢い」

「それから」

「うやうやしく、トップの男はウォーレンのとある発言に對して、相當に

頭に来ていたらしい。

「俺は不細工じゃない」

兜を外した途端、美しい金糸のような長髪がこぼれ落ちた。その瞳は紫色で、綺麗なアーモンド形をしている。大きすぎぬが十分に力のあるその瞳が男らしい美しさを強調している以外は、女性のもののようなパートが揃っている。すっと高い鼻に、淡い色の唇、細い頬のライン……。確かに、不細工ではないどころか一目みたら忘れない程の美丈夫であった。

「その顔……！」

リザは思わず、目を丸くした。

「“美貌の剣豪”、ライアルト……」

「余り好きな呼ばれかたではないがな。さあ、大將軍、準備はいいな。

副官の2人か？ 僕について調べても無駄だとだけ言つておこう

ウォーレンは縛り上げられたまま、荷物のよつに馬に乗せられた。髪をこじれみよがしに振つてから兜を被り直したライアルトは、優雅に白馬に跨ると付け足した。

「予想はついているだろ？ “雇い人” から伝言があった

『ウラディスカ、ダグラスね』

リザは皿をきつと光らせた。

「言つてみなせよ」

「時は満ちた」

その一言だけで、馬を駆けさせ去つてく。

「リザ、どうするの……？」

「ベル、ライト・ピジョンはもつ使える？」

「え、……ああそうか。エレイズ軍は大丈夫かな」

「そう、早急に調べて、こちらの事を伝えましょ」

ベルはいつでも持ち歩いている万年筆と紙を取り出して、手早く書きしたためると返信用の紙を添えてライト・ピジョンの足にへべつた。

「時は満ちた……つまり、あいつらが大きく動き出すつて訳ね」

「うちの大将軍は、多分殺しても死なないだろうから。本人に任せるとして。軍の指揮はリザに任せて大丈夫でしょう？」

「出来るわ。何なら、他軍の手も借りる」

それから、思い出したようにローベルグは御者を見た。

「怖い思いをさせて済みません。出してもらいますか」

「ぐ、へい。この年になつて、命のありがたみを知りましたよ」

展開についてきかねている御者は、慌てて仕事に戻つた。

エレイズ軍の側の刺客は、1人を除き完全に息絶えていた。その1人は、手足を拘束され、舌を噛まぬよう簡易猿ぐつわとして布を噛ませて馬車に押し込まれたところだつた。

「死体はどうする？」

リアの問いかけにエレイズは、少し唸る。

「この場では始末できないけど、放つておく訳にもいかないしな……セバスチャンに任せると流石に、笑顔で殺されそうだ」

リアもセフィーロも「殺されはしないだらつ」とは言わなかつた。

「恐らく、1人も戻らぬ事を不審に思つて誰かしら」やつらの味方が様子を見に来るでしょ。このままにしておいてもいいかと」

代わりにセフィーロはそつ提言したので、エレイズは頷く。

「H.I.」を通る予定の居残り組がいるから、それを来させて見張らせよ。出来れば、追跡を」

「いや、だつたら俺が残るぞ。中途半端な奴じや、尾行も出来ないだろ。下つ端が帰つてこないところに、下つ端が更に来たつてどうしようもないから、それなりの実力者が来るはずだ」

リアがそんな事を言つたので、失礼ながら Hレイズは驚いた。

「リアが進んで仕事をしてくれるとは思つてなかつた。じゃあ、頼むよ」

「一言余計だつづーの」

そこへ、ローベルグのライト・ピジョンがやつてきたので一同、顔色を不審に染める。

真つ直ぐ、Hレイズのところへ飛んできたライト・ピジョンの足から手紙を取る。緊急時だつたのか、封印魔法はなされていない。素早く目を通したHレイズは、顔をしかめた。

「……何だつて？」

「同じよつに、ウォーレン達も襲撃に遭つた。手法も同じ……。だから、魔法を封じられたあの3人には為す術なく、ウォーレンは連れ去られた」

「はあつーー？」

「……！」

エレイズは、2人にも手紙が読めるようにしてやった。まだ、混乱したまま手紙を読んでそれが事実と改めて確認する。

「ライアルト……」

セフィーロが反応した名前に、エレイズとリアは首を傾げる。

「知ってるのか？」

リアが促すと、セフィーロは頷いた。

「かなり腕の立つ、有名な剣士だ。……俺も勝てるかどうか解らな  
い」

問題山積み、時間もなし。

「兎に角、ラファインと連絡をとるわ。おれかとは思ひけど、同じような状況に陥っているかもしない」

ライト・ペジヨンに返事を持たせてからエレイズは言った。

「ロザリア嬢がいりやよかつたが」

「うん……だから、早く戻る。リア、それじゃあこには頼んだよ」

「ああ」

エレイズとセフィーロは馬車に戻り、なるべく速度を上げてくれるように御者に頼んだ。

コルドワークズ城は、演習場所から割と近いところにあるのでリザとローベルクはもう帰城していた。2人は真っ直ぐ、ブライグのところへ向かった。ウォーレンがいない事をすれ違つて兵達は不審に思つたが、リザの表情にひるみ、ローベルグからいつもの、のほほんとしたオーラが出ていない事を察して無理に引き留めようとはしなかつた。

「ブライグさん！　問題が起きたわ」

リザは開口一番に言った。

「……問題？ 兎に角、中へ入れ2人とも」

リザとローベルグは、帰城途中の出来事をつまびらかに語りエレイズ軍も同じ状況に陥つたがセフィーロの活躍で乗り切つた事を伝えた。

「成る程ね。確かに問題だ。偽ウォーレンを仕立てても、戦場に行けばばれる。それに、あいつの力が無いと相当に厳しい事になるぞ。エレイズ嬢やラファインが優秀なのは確かだが、ドラゴン使いつてのはいるだけで敵味方問わず、影響が全く違う

副官2人は大きく頷いた。若いリザであるが、気が強い事も幸いして指揮は上手い方だしローベルグという軍師もいる。実際、ウォーレンが不在であつても大抵の事は乗り切れる軍なのだ。……しかし、今回想定されている大規模な戦いとなると別だ。また、反闇魔法を完全に扱える人物としてもウォーレンは重要なのだ。

「ラファイン軍の方はどうした？」

「ライト・ビジョンを送りました。もうすぐ戻つてくるでしょうが、あそこにはレイルがいますし。ラファイン大将軍も、大貴族の公子息ですから剣術を幼少から習つています。恐らく、退けたかと。向こうの内で一番の実力者はこっちに向けられたようですね」

ブライグは頷いた。

「向こうも、よく解つてるようだな。3人の大将軍の内、最優先で

除くべきは誰か

「取り敢えず、3軍で集まつて話したほうがいいわね」

リザが言つた時、丁度、ローベルグのライト・ピジョンが戻つてきて殆ど同時に誰のものかは解らないがライト・バットが現れた。

「ライト・バットの使い手なんていたつけ?」

リザが首を傾げると、ライト・バットから情報が伝えられる。

『初めてまして。エレイズ軍情報部のシュウといいます。ウォーレン大將軍の件について、話し合いの場を持つことをエレイズ軍は提案致します』

「ラファイン大將軍も同じ意見みたいね」

リザが手紙を見て言つた。

「ラファイン軍はやはり、被害なしか?」

「そうみたいです」

ブライグは頷いた。

「ベル、直ぐにイエスの返事と会議の場所については、3つの城の中間地点に当たるドルシア通りを提案しろ。あそこに、俺の視認不可魔法の実験に使つてている建物がある。そこを使える」

「了解しました」

\*

「Hレイズ様が、俺も来るよつことの事だから。じぢぢへ、王子様をよろじへねフレア」

「うん」

緊張感を持つてフレアは頷いた。まさか、ウォーレンが連れ去られるなどといつて事態が起きるとは誰が想定しただらうか……。

そこへ、ジョイドが入ってくる。手に持つた何かをヨーゼフへ渡した。

「今日こでも、事が起ころうが出て来ました。こひらの動きやすい服装へお着替えになつておこてください」

「解った」

ヨーゼフは慌てもせす受け取る。誰の手も必要とせず、さつやと自力で着替え始める王族に色々な貴族を見てきたシユウは感心してしまつた。

『単なる貴族だつて一人で着替えも出来ない奴がいるのに』

「フレアはいつでも戦つつもりで。クーファとも一緒にいたほうがいい」

「解りました。ジョイドさんは……？」

「僕はセバスチャン隊長に呼び戻された。そちらの仕事をする」

そこへ、ヨナも入ってきた。

「この執務室に結界を張ります。ヨーゼフ様とフレア、クーファーはその中にいて頂きます。フレア、何か必要なものはありますか？」

閉めきつてしまいますが

「大丈夫……だと思います」

ヨナは頷く。

「ヨーゼフ様、私も大將軍達のところへ参ります」

「うん、解った……」

流石の気丈な王子も、長年ヨナの傍らにいて守ってくれていたヨナがいなくなる事には不安を覚えたようだがそれを隠すようにしつかりと頷く。既に着替え終わった彼は、頑丈な生地で出来た長いズボンに厚手のシャツ、それから剣帯という格好になっていた。

「よいですか、あなたが戦わぬのが一番なのですよ」

「解つてゐるぞ」

ヨナはもう一度念を押すよりヨーゼフを見ると一礼して、部屋を後にした。それにジョイードも続く。

「フレア」

シユウは一瞬躊躇つたようだが、やがてにっこりとする。

「無理しないでよ」

よく笑うシユウの、初めて見せる種類の笑顔でそれが何を意味していたのかフレアには解らなかつた。ただ、彼女がもしも振り返つたならちょっと顔をしかめたヨーゼフが目に入った事だろう。

「おい、どう思つ?」

クーファはフレアとヨーゼフ、どちらともなく言った。

「何について?」

「全部だよ、全部。ウォーレン連行から今後の事まで」

2人とも、黙りこくつた。ここ暫く、この部屋の人数が3人（クーファを加えれば4）を割る事は無かつたし、人がいれば必ずひつきりなしに考えが述べられたり対策が講じられていた。だが、今は気味が悪いほどに静かになつてしまつた。

「相手の狙いが、大將軍を全て潰す事だつたら……エレイズ大將軍とラファイン大將軍はどうしようというのかな。2人の軍にはそれぞれ、数こそ多くはないけど魔法以外にも長けた高位軍人がいる。ウォーレン大將軍と同じ状況には追い込めないね。

だとすると、より強力でタチの悪い魔法が持ち出されるのだと思うけど」

これも独白するようにヨーゼフが囁く。

「……少人数で、集まつたりして大丈夫なんでしょうか」

「そこは、ブライグさんを信用するしかないね。  
ねえ、いつだと思つ？ 彼らが取りかかるのは」

「もうすぐだらうな」

クーファは即答する。

「ヨーゼフよお、Hの説得は本当に出来ねえのか？ ウラティイスと  
ダグラスが王城内立ち入り禁止になれば随分と違うぜ」

「……やつてみようか」

ヨーゼフは、半ば諦めた表情だったがそう答えて立ち上がった。

「付いてきて」

「おひ

「はい

話を聞かないこともほどがあるー。

「失礼します、父上」

ヨーゼフが取り次ぎもせずに入室すると、国王はさぞかし迷惑そうな顔で息子を見やつた。

「何用だ。取り次ぎもない上に、その格好は……。その年になつて傭兵の真似事か」

だが、ヨーゼフは一切ひるまない。

「重大なお話しがあります、父上」

「それは誰だ」

フレアを見て、更に訝しげな表情をする。騎士服を着てはいるが、鎧を纏わず、剣も持たぬ軽装は余りにも王の御前に出るには不十分な格好であった。

「僕の護衛です。一度、対面なさったはずですよ。それはともかく父上は、我が国に謀反を企む輩がいるとお考えになつた事はおありますか」

「巫山戯た事を。何故、この安定した国内情勢で謀反などが起きねばならん。飢餓を訴える地域も無ければ、貧困に喘ぐ地域もない」

「人の野心といつものほ、そりやつて割り切れるものではありますよ」

「貴様は私に説教をしこきたのか！」

気の短い王は、かつと田を見開いて声を上げた。だが、それはヨーゼフはおろかフレアでさえ恐ろしがらせるこは及ばなかつた。その様子が更に王の機嫌を損ねたようだ。

「で、何が言いたい」

「これ以上は無いほどの無関心をもつて、一応問い合わせた。

「では、率直に申し上げます。

我が国には、謀反を企む重臣達がおります。それらはこの10年の間に四方へ手を広げ、今ではこの王城を占拠する事さえ夢物語ではないほどに大規模な集団となりました。首謀者の名は」

「ぐだらんつ！」

「父上、僕は遊びのつもりで申し上げているのではあります

「貴様などに付き合つて居るヒマはない、下がれ、馬鹿者つ！ しばらく顔も見とつないわつ！」

「言つたでしょ？」

「何ですかアレー、私、あつたまきました！」

完全に呆れ返っているヨーゼフ、憤慨するフレア。無言で腕を組む  
クーファ。

「悪いが、あれは殺されてしかるべきかもな。ヨーゼフ、お前の  
父ちゃんはよ

「解つてゐる

「でも、何であそこまで……」

「出てくれる前に心当たりがあつたからでしょ？」

フレアは田を丸くしてしまつた。

「じゃあ、何で！？」

「あの人は、ダグラス宰相を重用して何でも彼の言つてやつて  
きた。その彼が謀反の首謀者の一人だと、能無しで引きこもりの息  
子に告発されたら国王の立場がない」

「立場なんて……」

「まあ、恐らく、これから自力でダグラスについて探り始めるや  
あつと間に合わないけどね」

ヨーゼフの田の色は暗い。それが、例え情は薄いとはいっても唯一  
の血を分けた肉親がこれから無惨な最期を遂げる予感による悲しみ  
を映しているのか、自分の言葉が最後まで受け入れられなかつた苛  
立ちを映しているのかは解らない。

「僕もねえ、どこかであの人が殺されてしまえばいいと思つていたんだよ。僕を息子として扱つてくれない恨みとかじゃなくて……。遠くにいるようでもわ、やっぱり親子だからかな。等身大のあの人があ見えるんだ」

「そんな……」

フレアにしてみれば、全くその気持ちは判らない。片や、父が死んだ方がいいと思っていたと吐露した者、片や死んだ父の無念を晴らそうと、そしてその事実関係を明らかにしようとする者。

「僕も尊敬する父親が欲しかったなア……。フレア、君が羨ましい」

そう言つたヨーゼフは、ひどく孤独に見えた。

\*

「トレイズ、考え方直してくれ！ 危険だつ」

珍しいほどに声を大きくするラファイン。だが、他の誰もそれに驚きはしない。当然の反応なのだ。

「どう考へても一番危険なのは、このままウォーレンを放つておくことだ。」

「あいつが死んでもいいの？」

「それは……。だからといって、一人で乗り込むなど、莫迦のする事だ！ 向こうの狙いはそれなのかもしないぞ！」

「じゃあどうしようと？ 全軍を率いて攻め込むか？ そんな事した

ら、王都ががら空きになる。魔法使いの戦争は確かに、やり方によつては人数差をひっくり返せるが、それは普通の戦で、彼我の差が圧倒的な場合だけだ。また同じ魔具を使われたらどうする？」

延々と、この押し問答を繰り広げている。

単身、ウォーレンを助けに行くといって聞かないエレイズ。それを無謀と押しとどめようとするラファイン。どちらも、うつかりすれば頷きたくなる理論を持っている。

「なら」

セフィー一口を開いた事に誰もが驚く。

「俺がエレイズ様と共に行きます。軍の方は、リアに任せることも出来ますし」

「1人が2人になったからといって！」

「落ち着いてくださいよ、ラファイン様」

フェーンが今にも立ち上がりんばかりの、大将軍の肩を軽く叩いた。

「最善かもしれないですよ？」

「フェーンっ……」

「魔法、剣術それぞの面から見てこの場で最強はこちらのお2人です。ウラディスも恐らく、王都を離れる事はしないでしょう。ライアルトが気になりますが、そこはセフィー一口さんが何とかするで

しょ？」

「ああ」

セフィー口は即答した。

「そして、見事ウォーレン大将軍が救出されたなら良いじゃないですか。もしも、お三方が戻る前に大規模な戦いが始まつてもセバスチャンさんが見当をつけた場所に捕らわれているのであれば間に合います。ウォーレン大将軍のドラゴンは、フライドラゴンでしたよね？」

リザが頷いた。

「ドラゴン種では、ライト・ドラゴンに次ぐスピード。3人くらい背中に軽く乗せられるしね」

ラファインは、暫く考え込んでいたが、顔を上げてエレイズを見た。そして、隣のセフィー口に目を移す。全く、そつくりな目をしていた。持論を譲る気は無いと見える。このまま問答を続けても、得られるものはなく悪戯に時間を消費するだけのようだ。

「解った。……ただし、命を掛けなければ突破できない状況であつた場合は戻つてきてくれ」

「ありがとう、ラファイン。じゃあリア、全部任せた」

「アツバウトな司令だぜ。ま、いいやな。終わる前に戻つてこいよな。エレイズ軍大勝利の場にエレイズがいなけりやしまらねえ」

「そしたら、リア軍に変更かな」

「冗談！」

危機感のない、日常会話のようなやり取りに全員が大丈夫そうだと思わざるをえなかつた。

ウォーレン救出作戦開始。……これ、作戦？

エレイズとセフィーロが早々に出て行くと、続きの話が始まった。

「私は、各軍の枠を超えて情報系魔法を得意とする者を集め、情報網を整備する事を提案しますわ」

ロザリアが言った。

「賛成です」

と、ローベルグ。

「こちら側が、圧倒的に人数が少ない状態で戦う事になるでしょうから。どれだけ情報が早く伝えられるかが勝負の分かれ目になるかと」

「そういう事」

ロザリアはこつこつしてから、エレイズ軍情報部のシユウ以外は見たことがない表情で続ける。

「指揮は私が執りますわ」

「ああ、適任だな」

必然的に、この場で一番発言権の大きくなつたラファインが頷いた。

「フェーン、何人出せる？」

「そうですね……普段、斥候隊として情報系魔法を重視している者達が150名ほど。ロザリアさん、どのくらい必要ですか？」

「エレイズ軍の情報部隊は200名いるから……50名貸して頂きたいわ」

「解りました。この後すぐ選びます」

「では、ウォーレン軍からも同じだけ出しますね。あ、僕も加わりますので」

と、ローベルグ。

「それでいいわ。ダークヒル城は戦地から恐らく、遠すぎますから。ラファイン大將軍、ウォルテーナ城の一角を本部に貸していただけますか」

「勿論だ」

\*

エレイズとセフィー口は、王都の南に向かつて馬を休まず駆り続けていた。リアの確認、セバスチャンの予測に従つて彼らは王都リーグルを出でずつと南下したところにあるネルヴァーという土地を目指していた。人口の極めて少ない地域であり、元より評判の良い場所ではない。盜賊や、不法組織が蔓延つてゐるようなところ。

「付き合わせてごめんね」

不意にエレイズが言ったのに対して、セフィー口は表情を変えずに

「俺はエレイズ様に剣を捧げたのですから」

とだけ答えた。魔法中心の国家であるレニコールでは余り見られない、剣の誓い。相手から誓いを無効にされない限り命尽きるまで、その相手に従い続けるという、剣士が何よりも重んずるべき神聖な誓いである。

「絶対に死なないでね」

「承知致しました」

魔法使いを乗せた黒い馬と、剣士を乗せた白い馬はひたすらに南へ下る。

\*

「俺をどうするつもりなんだ、え？」

「両手を縛られ、足もくくられてそんなに強気な人間を初めて見たよ」

ライアルトは、檻の中のウォーレンを呆れたように見た。

「どうするつもりか、……ね。あんたを殺せとは言われていなければ、大人しくしなかつたら容赦するなとも言われている。

指をくわえて、全て終わるのを待つて居るといい。全て片付いた暁には、すっかり洗脳されてウラティスの腹心にでもなっているだろ  
うか

「大いに顔をしかめたウォーレン。

「俺が簡単に洗脳されると思うか？」

「元気な状態なら。魔力を封じ、僕が気絶させてしまえばあんたを洗脳なんて赤子の手を捻るようなものさ。対象が可愛くないぶん、更に容易い」

日頃、見下ろされる事に慣れないウォーレンだが今は自分は床から立ち上がる事も許されず、相手は優雅に立ちはだかっているわけで。そして更に、（認めたくなかったが）相手の方がレベルの高い容姿かもしねない。それらがウォーレンのはらわたを煮えくりかえらせるのだが、打つ手はない。

「まあ、姫君と騎士が助けに来るかもしれないけどね

「……！ エレイズとセフィー口か！？ まさかっ」

「そんなに人望無い？」

「いちいち腹立つヤローだ」

「もしされたとしても、セフィー口は俺が倒すしエレイズについても対策がある。未来の傀儡が増えるだけだな」

そして、それでもまだ足りぬのかウォーレンの神経を逆撫である発

言を追加する。

「まあ、Hレイズが噂通り僕と並べる美貌を持つのなら、扱いは少し変えてあげてもいいけどね」

「いらっしゃー、てめえ、ただじゃおかねえだつー、俺でさえ、副官が怖くて指一本も触れてないのにつ」

「やだなあ。あんたがそんなに怒ると、どんどんそつしたくなっちゃうじゃないか」

もしも、これから先もこの2人の関係が続くのなら一生に一度の犬猿の仲と呼べる関係となるだろつ。

\*

「どうのぐりい掛かつたかな」

「3時間と経つてはいません。まだ無事と考えてよいかと」

Hレイズとセフィーは目的地に辿り着いた。

それは、古い城塞だつた。灰色の石で作られた、低めの城で窓はかなり少なく鉄の尖つた柵で覆われているから城塞というより牢獄にもみえる。周囲は鬱蒼とした森が広がつており、道も殆ど整備されていない。

「ロスタリア廃城か。趣味が良いとはいえないな

エレイズはさつと城を見上げた。

100年以上前、大火災で城に住む者は皆死亡してそれ以来うち捨てられていた呪いの噂さえあるような城である。

「ちょっと下がって。強行突破するから」

エレイズはそう言って、両手を突き出して呪文を唱える。詠唱の直後、突然鉄の門の一部が何百年分も年を経たようにぼろぼろと静かに崩れた。これなら、いたずらに中の者を呼び出す事なく済む。この呪文は、物質だけでなく目に見えぬ結界も崩壊させるので何の躊躇いもなく2人はさっさとロスター・アーヴィング城の荒れ果てた庭園に足を踏み入れた。

「ウォーレンの魔力は封じられてるか、結界の中にはいるみたいだなア……」

「どうなさいますか

エレイズは、セフィーロの問いに対してもつこりと笑った。

「誰かに訊こいつ

当然、穩便にではない。

それを承知した上で、何でも無をそつと頷いたセフィーロ。

中はかなり、肌寒く、そして薄暗い。まだ日中の為、数少ない窓から外の光が差し込んでいるがそれを補う人工的な光が無いのだ。エントランスホールだつたらしい、その場所は高い天井も大理石の床も崩れかけている。日常的に使っているのではなく、今回、ウォーレンを閉じ込める為に用意した場所なのかもしれない。

「何者つ！？」

「見付けた」

普通「見付かった」なのだが、エレイズは微笑んでそう言つしセフィー口は全く慌てないので飛び出してきた見張りらしい男3人は立ち止まつた。

「……何者だ」

もしや、雇い主の関係の者か……とさえ思い始めてもう一度聞き返してきた男達。エレイズとセフィー口は目を合わせて、声を出さずに会話する。

『どうしようか』

『完全に敵とは思つていないよつですね』

『フレンドリーに近付いて2人打ち倒して、1人案内用に生け捕り

？』

『承知致しました』

「おい、聞いてるのか」

3人がいよいよ困っていると、エレイズは一撃必殺の笑顔を浮かべた。

「やあ、こんにちは。おつとめ！」苦勞様

「え……」

そのまま近付く。

「あいつは大人しくしてるかな」

3人は顔を見合わせた。

「あんたちは……ウラディス大将軍の……」

「そうそう。様子を見に来たんだよね。ウラディス大将軍の命令で  
ぞ」

そうしている内に、セフィーの間合いに入った。

「！？」

その途端、セフィーは素早く踏み出した。一太刀目で、正面の男を肩から薙ぎ払い、戸惑っている内に隣の者の頭を峰打ちして気絶させる。最後の一人はエレイズの右手から放たれた氷の槍で心臓を一突きにされる。

「顔に描いてある通り、下つ端だつたねえ。入り口の見張りにそ、手を抜かないべきなに」

「ええ」

セフィーー口は氣絶した男を後ろ手に縛り上げると、振り起こした。

「うう……」

田を覚ましたといひで、失態に氣が付いたようだ。

「き、貴様らつ、敵かつ」

「氣付くのが遅かつたね。ウォーレンは死に」

「けつ、壇つもんか」

強気に言い返した男だが、首に当てられた剣とそれを持つ男の田を見て考えを変えた。

『いこつは……』

敵に回せば、恐らく一番恐ろしい人格タイプであると、これでも数々の恐ろしい者に雇われてきた男は思った。自分の意思より優先させるものを持っていて、その命令ならば生まれたての赤子を殺すことも厭わない人格だ。そして、見たところその優先させるものは隣で此の世のものとは思えない美しい笑みを浮かべている女だらつ。

「……地下。廊下を西に進んで、一番奥にある独房」

「ありがとう。セフィーー口?」

「はい」

『 いじへ いじめ 殺せな いでくれつ 』

本当に生命の危機を感じた時、声が出なくなる事を男は知った。

「他に誰か潜んでる？」

ぐるぐるに縛り上げられて、しょんぼり気落ちした様子で侵入者2人を案内している男にエレイズは問いかけた。

「ライアルトさんがいますから。表の見張りの俺達だけで」

「ほんと?」

「ほ、ほんとっす！」

『命が掛かってんだから嘘吐くわけねえだろうがっ！  
くつそう、あんまりにも美人だから油断した』

今更しても仕方がない後悔を延々と心の奥でしている。この図を見れば、悪党はエレイズとセフィー口だと思われる事だらう。

地下の階段を降りると、外の光が届かない場所なので、初めて人工的な光が現れた。ぽつん、ぽつんと必要最低限の燭台が吊り下げられている。細い通路は、そこがもう牢獄のような印象であった。

「その奥に……」

もはや可哀想なくらい元気の無い男が言った時、反対側から人影が颯爽と現れた。その堂々たる態度と美しい姿はさながら、地下通路に吹くはずのない風が吹き抜けたようだつた。

「お姫が」

「ハフ……ライアルトさん……」

「お前は見張りの意味を解つてる？ 侵入者を案内するのが見張りの役目だと？」

「い……いえ、あの」

次に起こった事が理解できたのはセフィーロだけだった。

男とエレイズにとつては、気付けば、男の首が床に転がっていた。

「ようこそ、エレイズ大将軍、セフィーロ君」

「……」

剣を一旦しまつたライアルトは、馬鹿丁寧に礼をした。今は金糸のよつやかな髪を頭頂部で一纏めにしている。暗がりのため、外で見るよりも更に美しく、女性じみて見える。

「あんたがライアルト、か。ウォーレンは元気？」

「とても。早く、彼が絶望して命乞いする惨めな姿が見たいんだけどね」

エレイズに一歩近付いたライアルト。その間にセフィーロがすかさず入る。

「俺が止めておきます。ウォーレン大将軍を、早く

「そう簡単にいくかな」

目にも留まらぬ早さで抜刀したライアルトが、セフィー口を無視してエレイズに斬りかかるが、それをセフィー口は見切つて止める。

「へえ」

ライアルトの関心はすっかり移ったようだ。もう、そこをエレイズが駆け抜けて行つても何処吹く風であった。

「ウォーレン！」

「エレイズ！？ おい、本当に……何で！」

「それは後」

エレイズは門を壊したのと同じ魔法を使って、牢を壊した。

「セフィー口が時間を稼いでる。逃げるよ」

「あ、ああ……ちょっとコレ取ってくれ

エレイズが頷いて、ウォーレンの拘束具を外しに掛けた。その瞬間、エレイズは牢の中に踏み込んだ事を大いに後悔した。振り向く

間もなく、背後で罠が作動したらしい。柵が天井から降りて。

床が落下した。

「ああ、罠が作動した。この音、聞こえるかい？」

「……罠だと？」

剣がぶつかり合って、火花が散っている。それでもライアルトは背後に耳を傾ける余裕があるらしかった。

「うん。牢の中に複数名が入ると作動するシステムでね。地下の可愛いペシトの部屋に落下する」

「魔獸か」

「闇属性のね」

「お前も魔法を？」

「まさか！ 僕には魔法なんて必要ない。君もそうなんじゃないか？」

「さあな」

今のところ、均衡状態が保たれていた。まだ互いの力量を掴みかねており、どちらにしても攻めあぐねている。

\*

「ラファイン大将軍つたら、落ち着いてくださいよ」

フェーンは、会議を終えてから何度、そう言って敬愛する大将軍の肩を叩いたか解らない。

「行くのに3時間は掛かるんですし、見張りやらが手間を掛けさせるに決まってるじゃないですか。どうしたって5、6時間は掛かりますよ」

「しかし……。

いや、そうだな。私が余計な心配をしていても仕方がない

ようやく、ラファインはそう言って、全ての心配事を一時頭から取り除くよつと深く息を吐いた。

「レイル」

「はい」

「出陣準備はどうなつていい?」

「完了しました。いつでも動けるよう、待機させてあります」

頷いたラファイン。

上層部の意見は一致している。ウォーレンが攫われ、それを助けるためエレイズが王都を離れるという事はダグラス達は想定しているだろうと。だから、数時間の内に大規模な動きを見せるはずだと。王都占拠をするには、これ以上はないという程の好機が今なのだから。

ラファイン軍は全軍、隊伍を整えて広大なウォルテナ城敷地内の地下に待機していてエレイズ軍も密かに王都を目指して動いている。また、200名程を王城へ先発隊として潜入させている。……方法については、ラファインは聞いていないが、恐らく呆れて溜息を吐きたくなるような方法をとったのだと予想していた。ウォーレン軍も同じく。

「とつとうね。連絡を回して…」

ロザリアの言葉で情報部隊は動き始める。

その内数名は、同じ城内のラファインのところへ走った。

「ラファイン大将軍！」

「動きがあつたか」

すぐさま問い合わせたラファインに、情報部隊の者は頷く。

「ロータス、ヴォルグ、ハワードの軍が動き始めました。王城前広場へ向かっています。ウラディス軍にはまだ動きが見られません」

「数は」

「ロータス軍三千、ヴォルグ軍一千五百、ハワード軍同じく一千五百。計八千です」

「迎え撃つ。王城組に連絡は」

「既に」

「解った。レイル、フェーン！」

副官の2人は心得たように頷き、軍勢の元へ向かう。

\*

「……始まつたつて」

フレアにも、情報部隊の連絡が入った。彼らは今、余程の事が無い限り外へ逃れるよりも寧ろ安全な結界の中に入る。

「ここにいて、大丈夫かな。ヨナの結界を疑う訳じゃないけど……。僕がここにいる事は、相手方も判ってる。强行突破された時に、身動きが取りづらいよね」

ヨーゼフの言葉に、フレアとクーファは顔を見合せた。それは、2人にとっては特に問題である。クーファの攻撃は明らかに室内向

きではないし、フレアが最も得意とするのも炎の魔法。敵と共に蒸し焼きになりかねない。

「それから……父上はどうしたかな」

「あ……」

「軍勢が動き出したのだから、国王の命を奪うなつむつすぐ……もしくは既に」。

「……参謀長には出るなつて言われたけど……。臨機応変つて母さんも言つてた！ 外に出た方が良いと思います、ヨーゼフ様」

「やつだね……うん」

「陛下の事は、私が見できます！ クーファ、ヨーゼフ様をよろしくね」

フレアは答えを聞く間もなく、部屋を飛び出した。

「クーファ……」

王宮の方を見て、少し躊躇つヨーゼフにクーファはさつぱつと叫ぶ。

「王は無事なら、フレアが連れてくる！ 僕達は外へ出るぞ。裏手には恐らく、まだ兵が回つてねえ。王城の敷地から出で、王都も出ちまつたほうが恐らく良い」

「解つた」

ヨーゼフは様々な未練を振り払つように強く頷くと、クーファに続いた。

レミコエル王城は、正門の先に広大な庭園が広がつて、その奥に中央宮と呼ばれる建物がある。中央宮は三つに分けられており、正門からは三つの入り口を見る事が出来る。その、一番大きく豪華な門が王宮……王の執務室から謁見室、主賓用室、そして寝室などがある部分。右手側が高位武官の宿舎となつており、そこから渡り廊下で王子宮へと繋がつている。左手側は高位文官の宿舎兼仕事場となつており、そこと高位武官宿舎、王子宮二階部分が王宮へと繋がつてゐる。

フレアは王子宮の一階にある渡り廊下から、一気に王宮に入った。もはや、訝しんだり驚いたりはしないが、普段はそこに立つている警備員がいない。取り次ぎを行つ文官もいない。

「失礼致します！」

大声で呼びかけ、返事を待たずに王の執務室への扉を開くと……。

「遅かつた

その半時間ほど前。

「失礼致します」

恭しい一礼をして、王の執務室に入ったのはダグラス。王に呼び立てられたのだ。

「ヨーゼフがおかしな事を言いおつてな」

「王子様が、で御座いますか」

ダグラスは特に表情を変えていない。

「この国には、謀反を企てている者があると」

「それはまた」

「わしは少し考えたのだ。この国に、謀反を企て、そして成功させる程の力を集められる者は誰かと。平民の大将軍2人だが、あれはそのような方向での野心があるとは思えん。また、ラファインは何代も前からレミュール王家に忠誠を誓つてきた一族。そのような事を考えはしまい……それでだ」

王は、鋭くダグラスを睨め付けた。

「疑つべきとすれば、お前だ。ダグラス」

「失礼でなければ、何故そのようなお考えを持たれるにあたつたかお聞かせくださいませぬか、陛下」

「簡単な話だ。お前は、ダグラス、わしよりも人望があるといつて差し支えない。これくらいわしにも解つてゐるつもりだ」

「そのような事を。わたくしめは陛下の忠実な僕に過ぎませぬ」

あまり、心がこもつていな事に自分の考えを述べる事に集中していた王は気付かない。

「お前が、まだ宰相としての任命を受ける前から事を進めていたとしたら？ 宰相として登用される事もお前の考えの内であつたら？ わしはとんだ間抜けだ」

黙つて、観察するような目で王を見上げたダグラス。その目には、何かの思いつきとその思いつきへの血口肯定が映つた。

「だから、ダグラス。

わしの考えが当たつてゐるのであれば、思い直すのだ。わしはお前の能力を重宝してあるし、お前の望むものは何でも与える事が出来る。

「何が望みだ？ 爵位か、金か、武力か、それとも……」

「陛下」

ダグラスは、遮り、立ち上がつた。

「何でもと、そう仰るなら。一つ、頂戴しましょう

「言つてみるがいい」

そして 。あまりに突然であった。

一気に玉座に突進したダグラスの持つ短剣が王の喉もとを切り裂いた。

「はがつ……ダ……グラ……」

「申し遅れました。

お命を頂戴します。そして、確かに受け取りました」

もはや、王城にダグラスの敵は片手で数えるほどしかいない。それに、全てが今日、動き出すのだ。証拠の隠蔽など、ただの時間と労力の無駄であるから彼は無造作にたつた今、長年の主、この国の中高責任者の命を奪つた短剣を投げ捨てるに死体には一瞥もせずに退室した。

フレアが駆け込んだ時には、完全に王は冷たい屍をさらしていた。一瞬、躊躇つたが、これに構っている時間の余裕はない。手を合わせると、未練無くヨーゼフとクーファの元へ走る。耳には、既に戦いの音が届いている。とうとう、最後の時が近付いてきたのだ。数々の準備の終着点、そしてもしかするとフレアの望み アークの死の真相を知ること の終着点。

\*

「ロザリア隊長！」

シユウが情報部本部に駆け込む。

「ラルトウール軍の数が想定より少ない事が解りました。恐らく、幾らかを裏に回して直接王子宮を叩こうといつ考えかと」

「……そうね。ラルトウール軍は比較的優秀だものね。解った、フレアと王城潜伏組のクロウに連絡して」

「了解しました」

「ウラディス軍が見えないな」

ラファインの呟き。

「多分、時間をおいてこの城門前広場が混戦状態になつた頃投入し、王城へ直接向けるのだと思います。

ラファイン大將軍、ウォーレン軍を左翼に展開させておきます」

「ローベルグ……そつか、解つた」

馬を寄せてきたローベルグに頷いたラファイン。ローベルグはリザの元へ駆け戻る。徐々にウォーレン軍が動き始めた。バーレーン軍がそれを拒もうと動き始めた事から、恐らくローベルグの読みは正しいと見える。

まだ戦場は、混戦とはいえない。互いに隊列を殆ど崩さぬまま、前衛達が探し合つよう魔力を打ちあつてゐる。ただ、今のところラファイン側の怪我人はともかく死人は一切出でていない。完全に相手のバリアを破る攻撃を出来る兵が今のところ動いていないようだ。数ではラファイン達が不利であるが、戦力とすれば大分逆転している。これを相手方が予想していない訳はないから、どういう手法に出てくるのがが問題だ。気は抜けない。

右翼側では、リア指揮のエレイズ軍が猛攻を見せてゐる。その先頭に立つのが、他でもない指揮官のリアである。燃え上がるたてがみのフレイム・ホースに跨り、相手に当たれば切り傷、刺し傷だけでなく火傷まで負わせる炎の槍を存分に振つてゐる。それを迎え撃つてゐるのはトレヴァーン軍である。

「くそつ、聞いていないで。あの副官がここまで出来るなどと……！」

指揮官、ロータスはうろたえている。

エレイズが彼がどうあがいても手が届かない実力を持っているのは知っている。セフィーロが魔法に優れなくともそれを補つて余りある剣の実力を持つているのも知っていた。だが、リアについては殆ど何も知らなかつた。数度見かけたが、明らかに緊張感の無い態度、がりがりの体、やる気の無さそうな目から実力ではなくエレイズと親しいから副官を務めているものだと勝手に信じ込んでいた。だから、エレイズ軍ならば……エレイズ当人とセフィーロのいないエレイズ軍ならば自軍でも止められると思っていたというのに。どんどん、先陣が大人に向かっていく子供のように蹴散らされていく。

そろそろ、作戦展開を変更する伝令を出すべきなのだが、この状況で、全力により炎の騎士を止めに掛かれば隊列が乱れて隙となる。あくまで、自然と乱戦に持ち込んでいくのが彼らの目標なのだ。こちらから動いて、弱みを見せて仕方がない。それに、今はまだウラディス軍の準備が整っていないはずである。今、理想の展開図となつても何も意味がない。

\*

すっかり空になつた渡り廊下を駆け抜け、王子宮に渡つたフレアはそのまま1階へ駆け下りる。ここまで来ると、意識を集中させずとも既に魔力漏洩防止の魔具を外したクーファの魔力の位置が手に取るように解る。

『まだ……敵とは鉢合わせてないみたい……』

戦いになつてれば、もっと荒々しい魔力波が感じられるはずだ。恐らく、クーファとヨーゼフは順調に王子宮を出たのだろう。願わくば、そのまま薔薇園を突つ切り、馬場に行つて適当な馬にでも乗つて王城を、いや王都をしばしヨーゼフが離れてくれればいい。

だが、そうはいかないようだ。

「クーファ、ヨーゼフ様っ！」

追いついたフレアの目には、どんどん大きく目に映るよくなつてきた軍勢が見えた。

「フレア……父上は駄目だつたの？」

責める調子は全く無い。無感動ともえ感じられる。単なる確認といつ口調だ。

「はい……。あたしが謁見室に入つた時にはもう

細かい話をしている場合ではなさそうだ。2個中隊くらいだろうか。大軍ではないが、城の裏手にこんなにも多くの兵が回つてきているとは思わなかつた。恐らく、かなり前から準備しておいた兵なのだらう。

「あの紋章は、ラルトゥール伯爵の軍だ。トレヴァーン、バーレン軍に比べれば随分と実力の高い軍だね」

ヨーゼフの説明を聞くが、フレアもクーファもひるみはしない。

「クーファ、いけそう？」

「まつかせとけ！」

フレアは領き、クーファと共にヨーゼフの前に並ぶ。

「早く漬して逃れるぞ」

「うん。ヨーゼフ様、大丈夫なので下がつていってくださいね」

白馬の王女？ 古い、古い。今時、一角獣《ゴーラーン》。

軍勢との距離がある程度縮まつたところで、相手方が一度止まる。

「ヘレイズ軍のフレアだな」

話しかけられるとは……また、顔が知れているとは思わず、フレアは驚いて相手を見た。ラルトウール伯爵だ。若いが、十分にフレアの嫌う貴族然とした空気を纏っている。フレアの中では高貴な空気（例えばラファイン）と、貴族然とした空気は別物である。前者は美点と認めるが、後者は大嫌いである。

「あんた達と話す事なんてない」

平民の小娘に突っぱねられ、ハワード・ラルトウールの自尊心は十分に傷ついたようだ。きつく顔をしかめた。

「全く、平民の娘はしつけがなつていしないな。親の顔が見てみたいものだ」

「黙りなさい」

クーファとヨーゼフまで驚いたほど、鋭い声だった。

無礼と言われようと、平民と見下されようと構わない。だが、親……特に父親についてがどんな形であろうと、彼らの口から出るのは我慢ならなかつた。事実上であろうと、彼らはウラティス・アーケを殺したと思われる者……に従つてゐるのだから。

ラルトウールも、ただの都合上出世しただけの小娘ではないと悟つたらしい。わざわまでの嘲り半分の油断を捨てたよつて面を引き締める。

「気に障つたよつなら謝ろつ。  
とつあえず……こちらの話を聞いてもらいたい」

「……いいわ」

「簡単に言おつ。こちらで寝返るつもつはないか。  
そつして、王子をこちらへ引き渡してくれれば君や君が望む者には  
危害を加えないようこじつ。更に、戦いが終わつた暁には王位に  
就くはずのウラディス殿が重役をとえてくれるだろつ」

フレアは、クスリと笑つた。

「なつ……何がおかしい」

「そんな事で、あたしがあんた達の味方につくと思つてるの？ どうせ、あんた達がエレイズ様やウォーレン大将軍、ラファイン大将軍たちを斃せる訳がないぢやない。ウラディスが王位？ 莫迦な事言わないでよね。卑劣な人殺しが国王になつて、その下で働くなんて冗談じやないつ！」

それと、もう1つ大事なのが……あたしが『望む者』の中にしつかりヨーゼフ様が入つてゐるつて事よ。ここは譲らないわ。  
つまり、却下よ。賛成よね、クーフア？

「よく言つたぜ、フレアつ！」

てめえら、最後の最後までするがしこく立ち回りつとじやがつて！

俺様が跡形無く燃やし廻してやるぜ!」

勢いよく応じたクーファは、上体を反らして息を吸い込む。フレアは巻き込まれぬよう、クーファの斜め後ろに立つて、簡易バリアでヨーゼフを守る。召喚主であるフレアには影響がないが、それ以外の者にクーファの攻撃により発せられる魔力の余波は些かきついのだ。

そして - - - - 。

大慌てでバリアを張つたラルトウール軍へ、クーファの炎が吹き付けられる。それは、この小さな蜥蜴と見間違いかねないドラゴンが発しているのがどうしても不思議な火力である。軍の正面をまるごと飲み込む規模、背後についてもその熱風をバリアで防がなければ火傷をしかねない熱……。

「くそつ……」

流石にラルトウールは、きちんと身を守つたらしいが下位召喚士の紋章をつけた者達は全滅であった。炭のようになつてている者もあれば、皮膚が焼けたれ馬から転げ落ち、苦しんでいる者も多い。さながら、地獄絵図である。

ヨーゼフはこつそり目を伏せたが、フレアはもう殆ど動じなくなつていた。今は使命感と、ぶつけどころの解らない怒りに心中を満たされているといつのも大きい。

「降参するべきなのは、あんたたちの方つて解らない?」

フレアが言つと、悔しげにラルトウール伯爵は歯がみした。

「……ウラティスを頼るような真似はしたくなかった」

「……なに?」

予想通りとも言えるが、ラルトゥールが詠唱を始めた魔法……闇魔法をフレアも知っていた。

「まづい！」

フレアがすかさず、詠唱破棄のとんでもないスピードで魔法を発動させラルトゥールの真下から炎の竜巻を発生させた。……だが、それに飲み込まれて傷ついたのは周囲の兵だけである。ラルトゥールは……無事である。

「何か、魔具を身につけてやがるな」

クーファが悔しそうに言い、もつと直接的な攻撃に出る。

クーファの金色の目が真っ赤に染まる、ラルトゥールの周辺の地面が割れ、溶岩のように溶け出した。

「うわあああッ」

「逃げろッ」

だが、これも混乱して逃げ出したのは他の兵だけである。相当地、防御力の高い魔具を身につけていると思われる。彼の足下だけは常日頃と変わらぬ、緑の芝が残っていた。

「……何の魔法」

こつなつては、相手の魔法が発動してからいかに素早く対応できるかという問題に尽きる。ヨーゼフに動かないようにもう一度念押しをして、フレアも一步引き下がった時だ。

強烈な光が発せられた。

それと同時に、天を裂くような咆吼。それがラルトゥール、そして後ろの兵達の口から出でいると氣付くのに時間が掛かつてしまつたほど、それは獣じみた咆吼である。次に、彼らの体が一瞬で巨大化し、鎧が弾け飛び、人の顔から狼、獅子、虎といった猛獸に近い頭に変わり果てる。腕などはびっしりと固い、これも獸のものらしい黒や濃い茶色の毛で覆われる。

「魔獸化の魔法だ……」

フレアは目を丸くしてしまつた。禁術中の禁術である。この術は、目の前で起こつてゐる出来事そのままに人が魔獸へと変化する術。この術の反対呪文はない。他人を魔獸化する魔術であれば、他人の魔獸化を解除する反対呪文も作れたのだが、フレア達が知るのはあくまで自身を魔獸化する術への反対呪文だけなのだ。

「何で、周りの人まで……」

「どんなドーピングやつてるか解らねえが。恐らく、呪文を改造したんだな。

恐ろしい後遺症があるつてのに間違いはないだろ?」

クーファはそういつつ。

魔獣化と共に、体は凄まじく頑丈になり理性も吹き飛んだようだ。溶岩の上も平氣で渡り、フレアやクーファに迫る。クーファが炎を吐いても、直接に当たった数体が焼け落ちるだけで余波を受けた者ものまでが、さつきのようにならってくれるのではない。フレアが炎の龍巻で覆い尽くしても、無事なものは増いほど平然としている。

「まざい……」

相手が少數ならば、クーファとフレアの力を持つてすればこの恐ろしい魔人達も怖くはない。だが、互いを盾にして何の恐れもなく向かってくる理性無き大軍が相手となると、さばききれない可能性がある。事実、少しずつ距離は無くなり、フレア達は後ろに下がりきれなくなってきていた。

\*

『クロウ隊長、聞こえますか』

王城裏、南側でラルトゥール軍の後続部隊を相手取っていたクロウの元へ、シユウのテレパスが届いた。

「ええ」

こちらは闇魔法や、闇の魔具を使つ者はおりず殆どクロウ達の勝ちが決まつたような状態である。

『出来るだけ早く、王子宮裏、薔薇園北口に向かってください。状況の正確な確認は済んでいませんが、強力な闇魔法の気配が察知されました。あそこにはフレアとクーファ、王子様しかいません』

「わかりました」

クロウは素早く指示を出し、70名の部隊にその場を任せ、自身で残りを率いて言われなくとも解る、强大で禍々しい魔力の方へ向かう。

彼らは、王城潜入していた時まま銀の王宮直属兵の鎧を身につけていたがしつかりとエレイズ軍の紋章を付けている。クロウの左側を走るのは、純白の一角獸ヨニコーン。Aランクの氷属性幻獸族である。馬よりも一回り小さい体で、額からは30センチは超える真っ直ぐな金色の角が生えている。

「あれ、一体……！」

クロウの右側で馬を駆らせていたサラは、思わず声を上げた。田に入る、魔人達。その強大な体の向こうにいるはずのフレア達の姿は、全く隠れてしまっている。これでも、クーファとフレアが次々に倒しているから数は減じているものの軽く100はいるようだ。

「サラ、指揮を一時、任せます。フレアに現状の説明をしてきますので」

「解りました」

クロウは使っていた白馬からヨニコーンに飛び移る。小柄で瘦せているクロウだから、馬より小さいヨニコーンであっても問題はない。

「飛んでください」

クロウのビームでも丁寧な命令に従い、ヨニコーンは2、3メート

ルの助走をつけると軽々飛び上がった。空中高く上がり、踏みしめる。その足下には氷の足場が現れては消え、を繰り返している。

「フレア！」

先に気付いたのはヨーゼフだった。

「援軍だ！ それに、あれって……」

「よかつた！ え？」

頭上を見上げたフレアは言葉を失つ。

『何て綺麗……じゃなくつてつ……』

物凄く実際的な怒りの爆発。

「フレア、久し振りですね。

ヨーゼフ王子殿下、ご無事で何よりです」

驚いている一同には一切構わず、素早く簡単な挨拶を済ませたクロウは背後を軽く見やる。

「この場は、我々が引き受けます。現在、正門前ではラファイン大將軍を中心に連合軍と反乱軍の戦いが本格化しており、この後はウラディス軍が増援として参戦するかヨーゼフ様のお命を狙つて裏手から王城に向かってくるか、まだ判断できない状況です。ですから、一刻も早くあなた達には王城を離れて頂きたい。王妃宮側から抜けるのが、恐らく最も敵と鉢合わせる確率が低いでしょう」

「わ……解りました。あの」

フレアは、今はそれを気にしている場合でないところは重々承知していたのだが尋ねる。

「エレイズ様達は、大丈夫なんでしょうか」

「未だ、連絡が取れずになります。……が、万が一、エレイズ様達が間に合わぬ事があつても大勢に影響は無いとみえます。今は何よりも、王子様に無事、生き延びて頂くことです」

そこで、フレアははつとした。

「あの、国王陛下が亡くなつた事は

クロウは僅かに眉を上げただけだつた。

「報告有り難うございます。全体に伝えましょう。では、より一層ヨーゼフ様が生き残られる事が重要になつたわけです。フレア、よろしく頼みます」

「……はい」

クロウが一切、止め処なく喋つたので3分も経つていらないだろ。だが、その間にもう後ろの戦いは一変していた。魔獣化した者達には、確かに悉く理性や目的意識が吹き飛んでいるようだ。血に飢えた獣のように、自らに仇なす多勢を撃破する事に、集中力を奪われている。

その、戦場から見逃されたフレア達のもとへ、先程クロウが使つていた馬が駆けてきた。相当に賢い馬のようだ。

「使ってください。今なら、脇を一気に通り抜けられるでしょう

「解りました」

その馬はかなり大きな体であつたから、小柄なフレアとヨーゼフを乗せる事には何の問題もない。フレアの方が馬に乗り慣れているから、フレアが前で手綱を掴み、ヨーゼフがその背中に捕まるかたち。ケーファはフレアの肩に乗つた。

「では、健闘を祈ります」

クロウはそう言い、戦場へ飛び込んでいった。

クロウの考え方通り、すっかり興奮した魔獣化した者達は脇を駆け抜けていく本来真っ先に狙うべき王子とフレアには気が付かなかつた。

「フレア、馬も使えたんだ」

「一応、軍人なので！」

忘れがちであるが、彼女も歴とした軍人である。しかも、エレイズ軍の上級兵である。

王宮の南西方向に、王妃宮はある。現在はその主はおらず、高位女官の居住区となっているそこを抜ければ、王宮裏の南門から外へ出ることが出来る。

「おいフレア、そう簡単にいくわけじゃなさそうだぜ」

全力で馬を駆けさせている今、吹き飛ばされないように必死になりながらクーファは指摘した。……それは、フレアも解った。

「大きな魔力……というか、変な魔力ね」

「ああ、気味が悪いぜ」

個性が一切ないのに、驚くほど強い魔力。冷たい手で心臓を握られたら、これほどの不快さがあるだらうか。それほどまでに、嫌な魔力であつた。

「間違いないとみていいな」

「ウラディス……読んでたわね」

「南東にも門がある。そっちへ行つたほうが良い」

『一ゼフに言われ、フレアは頷いて馬の進行方向を変えさせるが……。

「やばいっ」

クーファの声と、フレアが馬を止めて簡易バリアを張つたのは同時だつた。頭上から振つてきたのは……。

闇そのものである。

それは、フレアが球状に張ったバリアにぶつかると跳ね返される事も、それを破ろうと働きかける事もなくゆっくりと油が伝うようにバリアを覆つっていく。

「閉じ込めるつもつね……」

フレアの言葉に頷いたクーファは短く言つ。

「出来る限り小さくなつてる」

「…」

次の瞬間、バリアが爆発した。

それは、外から見たら、そう見えるといふ事である。フレアとヨーゼフは瞬間に熱風に包まれ、それがどんでもない音を立ててバリアごと闇を突き破つたのを見た。

「あ……あなたの力なの、クーファ？」

「おうよー、名前は……アーン、フレイム・バーストでござりだ！」

「今つけるんかいっ！」

景気の良いツッコミを入れてから、それどころではなかつたと氣を引き締め直すフレア。目の前にはウラティス1人と、ほんの20名かそこらの部下がいた。

フレイム・バーストにすっかり怯えてしまった馬からフレアとヨーゼフが下りると、さしもの賢い馬も逃げ出していった。もしかしたら、人間よりも感覚が鋭い獣にはこのウラディスのものと思われる魔力は耐え難いというのもあったかもしだれないが。

「流石、クーラファンドラ・フレイム・ドラゴン。凄まじい力だ」

「……ウラディス」

フレアはきっと睨み付けた。クーファと共に、ヨーゼフの前に立つ。「という事は、お前が炎の召喚士アークの娘か。道理で。アークの魔力を持つた使用人など、不自然極まると思っていたが」

フレアは、ウラディスとの初対面時を思い出した。一瞬、目があつたに過ぎないが彼はフレアからアークの魔力を感じ取っていたらしい。

疑いが確信に変わる。

「あんたが……」

怒りで震える体を押さえ、奥歯が鳴るのを止め、相手を見やる。

「あんたが、父さんを……」

最後の一言は、まるで獣の呻き声のようだった。

「殺したの?」

そして、確信は事実へと……それはあっさりと姿を変えた。

「そうだ。人の好い彼は何とも扱い易かつた。

彼にもう少しだけ非道さがあれば、あの時屍をさらしていたのは俺だつたろうがな。この世には何も悪いものはないのだと信じているような、憐れな男だつたぞ。お前の父親は……。その点、お前には望みがありそうだ。救えぬ悪がこの世にある事を知つてゐる日だ」

「そうね」

カタカタと、フレアの歯が怒りで鳴る。

「今、知つたわ」

「ヨーゼフ下がれっ！！」

その時、クーファが叫んだのとヨーゼフが従つたのが一瞬でも遅れていいたら、どうなつていたか解らない。

稀代の大魔法使いが……生まれながらの誰よりも恵まれた魔力に加え、それと同じほどの力を持つた父親から受け取つた魔力を持つ少女が抑制を、失つた。

魔力が暴発し、彼女の魔力を最も具現化するに相応しい強大な炎の波となつて周囲を焼き尽くすばかりに、それが広がつた。

「あれが……フレアの力？」

半ば呆然と、辛うじて魔力の爆発に巻き込まれるのを逃れたヨーゼフは茫然自失のていで呟いた。

「驚く事じゃねえ……」

クーファはフレアを凝視したまま呟つ。

「俺を永久召喚した魔力が、日頃あれだけ抑制されてたのが寧ろ、驚くべき事だ。

だが、コントロールが効いてねえ。危険だ」

最後の方はクーファの独白であった。クーファはフレアの元へ直進した。

「おいつレア！ 気を取り直せつ、全部巻き込む氣かつ。それに、今ガス欠になつてどうする！」

きつぎりで……それは、フレアの理性を取り戻させたようだつた。

彼女は、まるで今初めて自分の隣にクーファがいることに気が付いたような様子でそちらを見た。

「（J……これ、あたしが？」

「そうだ。兎に角、落ち着け。ヨーゼフまで巻き込むところだつたんだぞ」

はつとしたようにフレアは振り返つてヨーゼフを見た。まだ、驚愕

覚めやらぬ様子でこちらを見ているパーゼフ。

「……」めん、なさい」

「まあいい。多分、ウラディスは無事じゃな……あ？」

クーファは我が目を疑つたような声を出した。

フレアも、自分が引き起こした状況を未だによく理解できていないが、ウラディスのその異常さには気が付いた。彼の後ろの者達は残らず、火傷に苦しみ、喘いでいるか既に灰と化しているというのに……彼だけは、笑みさえ浮かべて平然と立っていた。

「成る程 素晴らしい力だ」

「フレア、火傷はともかく、灰になつた連中はお前のせいだけじゃなさそうだぜ」

「……え？」

クーファがそう言ったのを聞いて、ウラディスは頷いた。

「なに。凄まじい攻撃だったのでね。こやつらの魔力を奪い取つて強力な防壁を作らせてもらつたまで。余り驚く事ではない」

「味方を……」

やつと我に返つたパーゼフが、激したように言つとウラディスは笑みを浮かべたままそちらを見た。

「おや、王子様。

故意でなかつたとしても、あなたの護衛は同じ事をするといひだつたのですよ。もし、ここによつ多くのあなたの方の味方が密集していたらどうなつていた事か。

実害が無くて、何よりですな」

「一緒にするなつ！」

「モーだてめえつ、元はと言えばめえがなあつ……」

激した口調で叫ぶモーゼフとクーファを余所に、フレアは呆然としていた。

「あたし……そんな」

「おこ、フレア、まともに耳貸してるんじやねえ！」

「でも、あたし、一歩間違つたらモーゼフ様を殺してたつ」

「ええいっ、うひたえるなつ」

その、動搖を……突かないウラティスではない。

「フレア、クーファ、危ないつ……！」

モーゼフが叫んだと同時に、それは起きた。

「え……」

「何だつ……？」

2人の……クーファは宙にいるので正確にはフレアの足下から闇が現れた。それは実体を持った影のようである。円を描くように広がり、2人を囲むその影は生き物のようにゆらゆらと揺れながら中心……フレアとクーファに迫る。

「くそつ

クーファが炎を吐ぐが、それは意味をなさない。その闇には決まつた形状が無いらしい。水に浮いた油のように、何かが当たつても形を変えるだけで消える事はなく、ゆつたりと距離が詰まる。フレアが作つた結界も、するりと抜けてくる。

「知らないのか。結界魔法は元を辿れば、闇の魔法が起源なのだ。唯一、禁止されていない闇魔法といつても過言でない」

「だから、闇じゃ闇は防げねえってか。くそつ

「そして、闇はそれを打ち消す光以外の、何者の干渉も受けない。光に最も近しい炎であつても同じ事。闇に喰われるといい、炎の召喚士、炎のドラゴン」

馬鹿と忠実は紙一重（ｂｙ 孤高の美貌剣士）。

ウラディスの悠々とした台詞が終わる頃には、闇がすっかりフレアとクーファを覆い尽くした。だが……。

「なめんじゃないわよつ！」

「なに……？」

闇の中から、くぐもった声が聞こえると同時に、強烈な光が無数の刃のように闇を切り開いて炎のロード战士と炎のドラゴンは姿を現した。

「光属性の魔法も使えたか……」

慌てはせずとも、厄介なものを見るように顔をしかめたウラディス。

「時間ありがとうね、ウラディス大將軍！」

「……は？」

「反省タイムには10秒あれば十分！ さあクーファ、蹴りつけるわよつ！」

「よおっしー、流石、天下一の単細胞ー！」

「全然、褒め言葉じゃない」

奇しくも、ヨーゼフとウラディスの弦がぴったり重なった。

\*

時はしばし戻り、場所も変わる。

セフィーー口とライアルトの戦いは、一進一退を繰り返していた。どちらも、今まで自分と並ぶ相手と戦った事が無かつた。任務遂行、ただそれだけを考えているセフィーー口はともかくライアルトはいつしかこの戦いを楽しみ始めてさえいた。

「何故、君の様に強い者が人の下に付いているのかが解らないな

「お前もウラディスに雇われているのだろう」

「生活の為に働いてるだけさ。俺は奴に忠義を誓つてなんかいないし

セフィーー口は特に、興味を持たなかつたようだ。もとより、余計な事に気を散らす事を好まない性格である。純粋なまでに、ライアルトを退ける事だけを考えているのだった。それも、ライアルトが彼に関心を持つた……もっと言つてしまえば今までの相手の中で一番に面白いとさえ思った理由である。

ライアルト、誰にも仕える事なく自分の腕だけを信じてどんな場

合でも自分の為だけに剣を振るつてきた剣士にとつて、セフィーロの持つ強い他者への忠誠心は未知のものであった。

幾たびも、剣をぶつけ合い、時に相手を傷つけ傷つけられている内にだいたい、互いの力量を理解していた。それは、全く同様の理解だった。

この敵は、もしかしたら自分より強いのかもしれない……。

一度、間が開いた。互いに、かなり疲労が出始めている。致命傷には決してなりえないものの、互いの傷は少なくない。消耗戦となつた場合、恐らくセフィーロの方が僅かに体格が良い分、分があるだろうがセフィーロは時間を掛ける事を望んでいない。すぐにでも、唯一の主の無事を確認に行かねばならないのだ。

つまり、互いに早期決着が望まれた。

そして、行動に移したのはまた同時だった。

2人、同時に今までで一番の気合いを込めて踏み出す。多少の傷はもう厭わず、まさに光速で2者は斬り結ぶ。相手より早く、速く……それだけを求める戦い。

だが、その中で敢えてセフィーロはそれに逆らつた。

凄まじい突きが繰り出される瞬間を、相手より一拍遅らせた。だが、死んだり身動きを取れない傷を負う気も、セフィーロには毛頭なかった。ライアルトの剣が貫いたのは絶妙に身をかわしたセフィーロの肩であった。それでも、普通なら痛みに絶叫するか身を悶えるだけの攻撃のはず。しかし、セフィーロは眉一つ動かさずライアルトの脇腹を貫いた。

狙いは心臓であったが、セフィーロも人間であるから痛みで手元が少し狂つた。だが、明らかに深手を負つたのはライアルトの方で、その証拠に彼は膝から崩れた。

ライアルトの手が、彼の剣を掴みきれなくなつたところでセフィーロは自分の剣を引き抜くと、真つ赤に染まつた刃を拭つて鞘に収めた。主の手を離れ、セフィーロの肩を貫いたままの剣を次に抜いてライアルトへ返した。

「肉を斬らせて骨を断つ……か。そんな馬鹿をする者がいるとはね」

「俺に」「えりあれているのは、死ぬなといつ命令だけだ」

ライアルトは剣に手を伸ばそうとしたが諦め、そのまま目を閉じた。

「行けばいいぞ」

「やつさせてもいい」

不思議な事に、剣を握つてライアルトが初めて味わつた敗北は悔しくもなく、苦くもなく、相手を逆恨みする気持ちも全く生まれなかつた。

『ああ、何で……』

微笑みが浮かぶ。最後に、いつやつて笑ったのはいつだつたか。

『素晴らしい』

静かなる称賛だけが彼の胸を充たしたのであつた。

「コードの肩部分が裂けていたから、それを切り離して簡易な包帯の代わりとして傷を縛つた。痛みは強いが、行動に大きな支障が出るほどではない。廊下の突き当たりに行くと、崩れた牢……その先は無かつた。見事に床が抜け落ちていて、下からは戦いの音がしていた。恐らく、大将軍二人はその中である。セフィー口は一縷の躊躇いたえ見せずに飛び下りた。

「エレイズ様」

「セフィー口！」

感動の声を出したのは、エレイズではなく部屋の隅にいたウォーレンである。一切働く、地下を照らす光の魔法の発動も数々の魔獣との戦いも全てエレイズに任せきつているウォーレンにセフィー口が無言で冷たい目を向けると彼は大慌てで説明する。

「手足は良かつたんだが、首の、魔力解除の拘束具が取れねえんだ！」

「……成る程」

確かに、見たところ頑丈そうな造りであるそれは首にぴったり密着していて強い攻撃を加えれば本人が無傷では済まないと見える。

「しかも、エレイズが言つに強制解錠呪文に反応して罷……恐らく爆発かなにかが発動する仕掛けになつてゐるらしくてな」

だが、セフィーロはもう聞いていなかつた。すぐさま敬愛すべき大将軍の元へ行く。

その間、さつと全体を見渡した。

随分と広い。エレイズの魔法で全体が照らされているが、奥行きは2、30メートルあるだろ。ほぼ正方形の空間らしい。床や壁は頑丈な石で出来ていて、元はあつたのかもしぬないが部屋の中には何もない。魔獣の数は50以上。どれも、漆黒の毛並みを持つもので赤や金に怪しく目が光つている。獅子や虎、狼など攻撃性の高い魔獣ばかりだ。また、蛇や幻獣族などなかなかにぞつとしないものもある。

「どうも、全部ランクみたいなんだよね」

並んだセフィーロにエレイズは言ひ。

「アイス・ウルフの“咆吼”では1体も消えなかつた」

猛獣系の魔獣が使う技……というより、“ただの雄叫び”。これも立派な攻撃となり、大抵Sランク魔獣の“咆吼”を受ければAランク以下の魔獣は余程頑丈な種でない限り自然消滅してしまつ。

「という事で、一体ずつ地道に片付けてるんだけど」

「承知致しました」

魔獣が飛びかかってきた。

最初の一匹。黒い狼型の魔獣がセフイー口に襲いかかる。それを何の問題もなくかわしたセフイー口はまだ空中にいた狼の横腹を切り裂く。鮮血の代わりに、真っ黒な闇の魔力が流れ出て魔獣は消える。セフイー口を強敵と認知したか、残りの狼型魔獣が一気に襲いかかってきた。

「おい、ご主人。あいつは大丈夫なのか」

「セフイー口？ 心配ないよ。こういう状況では私よりずっと強い」

「けつ……じゃあ、下がってるか？ お嬢さん」

「冗談よして」

アイス・ウルフが飛び出したのと、残る魔獣が2体の獲物に飛びかかったのが同時である。巨大な吠え声と共に、魔獣達ののど笛を食いちぎるアイス・ウルフ。力勝負では敵わないから、素早くバリア

を張つて体当たりから身を守り、罠を仕掛けて魔獣達の足場を氷付けたりなどして動きを封じると巨大な氷柱で魔獣の体を真つ二つにするエレイズ。

それから、10分と掛からなかつた。セフィーロは自分に襲いかかつてきた全ての魔獣を片付けるとすぐさまエレイズとアイス・ウルフの方へ向かい、戦闘に終止符を打つた。

「やるじゃねえか、お前」

アイス・ウルフは……当然、表情は変わらないわけだがにやりとしたように言つた。

余談だが、人の言葉を扱える魔獣はSランク魔獣の全てと、例外的にウサギ型魔獣である。それ以外は人の命令を理解出来るが、扱う事は出来ない。

「これ、どうじよ」

エレイズがウォーレンの首を難しそうな顔で眺めた。

「俺が喉ごと食いちぎつてやる」

「ううん、それじゃ意味無いんだよねえ」

「……エレイズ、もつと強く反対してくれよ」

そこで、セフイーロが

「ライアルトが鍵を持っている事はないでしょうか」

と。

「どうにか解る?」

「恐らく、動けないでしようから……」口までの通路に

エレイズは頷いた。

「じゃあ、めまいを出ないと」

彼らは短く話し合い、まずエレイズが巨大な飛行魔獣を召喚して1人乗せて地下から出る。そして、鍵を手に入れて戻り、ウォーレンの拘束具を外してドラゴンで強引に脱出。……という事に決まる。

「つたぐ。大魔法使いの作戦つてやつはひとつも適当なんだか

呆れたよつて言ひアイス・ウルフであった。

とにかく、エレイズが召喚したのは大型のBランクドラゴン、氷属性のワイバーンであった。

「ドラゴンはBしか召喚出来ないんだよねえ

と呟いたエレイズ。

「どうする？ セフィーロが行つたほうが、話が早いかな？」

「……そうかもしれません」

恐らく、最後の表情を見るとライアルトは少なくとも自分にはもう敵対の意思を持つていないのでうとセフィーロには思えた。

「じゃあ任せた」

「わイバーン……青い巨大な翼竜の背から降り立つたセフィーロは急ぎ、ライアルトのところへ戻つた。同じ場所で、今は壁にもたれて座つている。

「留めでも差しに来たのかい？」

「いや。質問に来た。

ウォーレン大将軍の魔力封印を解きたいのだが」

ライアルトは返り血に濡れていながら、やはり美しい顔でセフィーロをしばらく見つめていたがやがて微笑んだ。

「あの大将軍はどうも嫌いだけど、あなたは好きだ。あげるよ」

一人称が変わつてゐる事には突つ込まず、セフィーロはライアルト

が震える手で差し出した鍵を受け取った。

「済まないな」

こんなあつせり片カタが付く事に、些か驚いてはいたが表情には一切出でずニセフイーロはわざと地下へ戻った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7204v/>

---

炎の召喚士フレア

2011年10月10日00時25分発行